

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 558 集

まつ やま おお ち た まわ

# 松山大地田沢遺跡発掘調査報告書

道路改良事業一般国道 106 号宮古西道路松山地区関連遺跡発掘調査

2010

岩手県宮古地方振興局土木部  
(財) 岩手県文化振興事業団

# 松山大地田沢遺跡発掘調査報告書

道路改良事業一般国道 106 号宮古西道路松山地区関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県上づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業團埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、道路改良事業一般国道106号宮古西道路松山地区に関連して平成20年度に発掘調査された松山大地田沢遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査の結果、奈良から平安時代にかけての竪穴住居、土坑が見つかり、本遺跡が尾根上に営まれた古代集落であったことが明らかになりました。竪穴住居からは鉄製鋤先や鎌のほか、足金具が出土しており、貴重な資料を追加することが出来ました。

今後、本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました宮古地方振興局土木部、宮古市教育委員会、宮古市広域行政組合をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 武田牧雄

## 例　　言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市松山第7地割字大地田沢112-64に所在する松山大地田沢遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、道路改良事業一般国道106号宮古西道路松山地区に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
- 3 岩手県遺跡データベース登録の遺跡コードはLG33-2166、調査時の遺跡略号はMOTS-08である。
- 4 発掘調査面積は、1,790m<sup>2</sup>である。
- 5 発掘調査の期間と担当者は、次のとおりである。

野外調査	平成20年7月1日～平成20年9月12日／丸山直美・鈴木博之
室内整理	平成20年11月1日～平成21年3月31日／丸山直美・鈴木博之
- 6 出土遺物の鑑定、保存処理は次の方々および機関に依頼した。

石質鑑定	花崗岩研究所
木材分析鑑定（肉眼）	岩手県木炭協会
鉄製品の保存処理	岩手県立博物館
AMS年代測定	株式会社加速器分析研究所
炭化種子同定	古代の森研究会
- 7 野外調査における安全防護柵の設置、基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。

安全防護柵設置	株式会社小山田組
基準点測量	株式会社北日本朝日航洋
航空写真撮影	東邦航空株式会社
- 8 野外調査・室内整理・報告書作成にあたり、次の機関からご指導・協力をいただいた。

岩手県宮古地方振興局土木部、宮古市教育委員会、宮古地区行政組合、宮古地方森林組合、大坂建設株式会社
- 9 本書の執筆・編集・校正は丸山・鈴木が行い、文末にそれぞれ名前を記した。
- 10 本書では国土地理院発行の次の地形図を使用した。

1/25,000地形図	宮古
1/50,000地形図	宮古
- 11 調査で得られた出土遺物および調査に係る諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 調査成果の一部については、現地公開資料および「平成20年度発掘調査報告書」（岩文振調報第546集）等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

## 目 次

I 調査に至る経過	
1 調査経過	1
II 立地と環境	
1 遺跡の位置と立地	3
2 歴史的環境	3
3 基本層序	7
III 調査方法	
1 野外調査	9
(1) 調査経過	9
(2) 発掘調査の方法	9
2 室内整理	11
(1) 整理作業の方法	11
(2) 記載方法と凡例	11
IV 調査成果	
1 概要	15
2 検出遺構	15
3 出土遺物	46
V 自然科学的分析	
1 松山大地田沢遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	76
2 松山大地田沢遺跡より出土した種実	79
VI 総括	84
報告書抄録	117

## 図版目次

第1図 岩手県全図	1	第26図 9・10号土坑	42
第2図 地形分類図	2	第27図 1～3号炉跡	44
第3図 周辺の遺跡分布図	4	第28図 1号焼土遺構	45
第4図 基本層序・遺物集中区1・2断面	8	第29図 1号堅穴住居出土遺物（1）	48
第5図 グリッド・基準点、トレント配置図	10	第30図 1号堅穴住居出土遺物（2）、 2号堅穴住居出土遺物（1）	49
第6図 調査区縦断・横断ラインと遺構検出 プラン	13	第31図 2号堅穴住居出土遺物（2）	50
第7図 遺構配置図	14	第32図 2号堅穴住居出土遺物（3）	51
第8図 1号堅穴住居（1）	16	第33図 2号堅穴住居出土遺物（4）、 3号堅穴住居出土遺物	52
第9図 1号堅穴住居（2）	17	第34図 4号堅穴住居出土遺物（1）	53
第10図 2号堅穴住居	18	第35図 4号堅穴住居出土遺物（2）	54
第11図 3号堅穴住居（1）	20	第36図 5号堅穴住居出土遺物（1）	55
第12図 3号堅穴住居（2）	21	第37図 5号堅穴住居出土遺物（2）	56
第13図 4号堅穴住居（1）	24	第38図 5号堅穴住居出土遺物（3）、 6・7号堅穴住居出土遺物（1）	57
第14図 4号堅穴住居（2）	25	第39図 7号堅穴住居出土遺物（2）	58
第15図 5・6号堅穴住居（1）	26	第40図 7号堅穴住居出土遺物（3）、 5号土坑・1号炭窯出土遺物	59
第16図 5・6号堅穴住居（2）	27	第41図 1号炭窯（2）、2号炭窯出土遺物、 遺物集中区1出土遺物（1）	60
第17図 6号堅穴住居カマド断面	28	第42図 遺物集中区1出土遺物（2）	61
第18図 7号堅穴住居（1）	30	第43図 遺物集中区2出土遺物（1）	62
第19図 7号堅穴住居（2）	31	第44図 遺物集中区2出土遺物（2）	63
第20図 1号掘立柱建物	32	第45図 遺物集中区2出土遺物（3）	64
第21図 1号門跡、谷部小ピット	33	第46図 遺構外出土遺物	65
第22図 1・2号炭窯	34		
第23図 1～3号土坑	36		
第24図 4・5号土坑	38		
第25図 6～8号土坑	40		

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	6	第4表 鉄製品観察表	74
第2表 土師器・須恵器観察表	66	第5表 銀漆類観察表	75
第3表 石器・石製品観察表	74	第6表 土製品観察表	75

## 写真図版目次

写真図版 1 遺跡遠景、調査区全景（航空写真）	89	写真図版17 1・2号竪穴住居出土遺物（1）	105
写真図版 2 調査前現況、試掘、表土除去、 基本層序	90	写真図版18 2号竪穴住居出土遺物（2）	106
写真図版 3 1号竪穴住居（1）	91	写真図版19 2号竪穴住居出土遺物（3）、 3号竪穴住居出土遺物（1）	107
写真図版 4 1号竪穴住居（2）	92	写真図版20 3号竪穴住居出土遺物（2）、 4号竪穴住居出土遺物（1）	108
写真図版 5 2号竪穴住居	93	写真図版21 4号竪穴住居出土遺物（2）	109
写真図版 6 3号竪穴住居	94	写真図版22 5号竪穴住居出土遺物（1）	110
写真図版 7 4号竪穴住居	95	写真図版23 5号竪穴住居出土遺物（2）、6号 竪穴住居出土遺物、7号竪穴住居	111
写真図版 8 5号竪穴住居	96	写真図版24 7号竪穴住居出土遺物（2）、5号 土坑・1号掘立柱建物出土遺物、	
写真図版 9 6号竪穴住居	97	1・2号炭窯出土遺物	112
写真図版10 7号竪穴住居	98	写真図版25 遺物集中区1出土遺物	113
写真図版11 1号掘立柱建物	99	写真図版26 遺物集中区2出土遺物（1）	114
写真図版12 1号門跡、1・2号炭窯、 1号土坑	100	写真図版27 遺物集中区2出土遺物（2）	115
写真図版13 2～5号土坑	101	写真図版28 遺物集中区2出土遺物（3）	116
写真図版14 6～9号土坑	102		
写真図版15 10号土坑、1～3号か躰	103		
写真図版16 1号焼土遺構、 遺物集中区1・2	104		

## I 調査に至る経過

### 1 調査経過

松山大地田沢遺跡は、「道路改築事業宮古西道路」の道路改築工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

地域高規格道路「宮古盛岡横断道路」は、宮古市を中心とする宮古地方生活圏と県庁所在地盛岡市を中心とする盛岡地方生活圏を連絡する延長約94kmの幹線道路である。そのうち、宮古市松山地内から根市地内までの「宮古西道路」は、延長3.6kmで、国土交通省施行三陸縦貫自動車道（宮古道路）との連携により、宮古市内の交通混雑の緩和、災害時の緊急輸送道路の確保を目的とし、平成15年度に事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、宮古地方振興局土木部から平成18年9月12日付官地土第387号「道路改築事業に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月4日、5日に試掘調査を実施し、工事に着手するには松山大地田沢遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年12月7日付教生第1221号「道路改築事業予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成20年6月24日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県宮古地方振興局土木部）



第1図 岩手県全図



第2図 地形分類図

※走跡位置は第3図参照 1:50,000

## II 立地と環境

### 1 遺跡の位置と立地

松山大地田沢遺跡は宮古市松山第7地割字大地田沢112-64ほかにあり、JR東日本山山線磯鶴駅の南西約4.3km付近に所在する。遺跡は東流する閉伊川の右（南）岸に位置し、北流して閉伊川に注ぐ小規模な沢によって形成された谷底平野沿いの小起伏山地に立地する。調査区はこのうち北西方向へ延びる山地の二つの尾根部とその間の谷部にかかる1,790m<sup>2</sup>である。標高は尾根部の最高位で45m前後、谷部の最低位で33m前後を測る。調査前は山林である。遺跡の中央部は北緯39度37分21秒、東経141度55分17秒付近にある。遺跡の東方および南東方には、谷を隔てて平成19年に発掘調査が行われた木戸井内IV遺跡、陸里III遺跡、平成20年度に発掘調査が行われた隠里VII遺跡が近接している。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側縦辺部の一端をなしている。平成17年6月6日に行われた新設合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、それぞれ宮古市と合併し、これによって宮古市は、北と西を下閉伊郡岩泉町、南西を下閉伊郡川井村、南方を下閉伊郡山田町と境界を接することとなった（平成20年11月1日現在、市域面積696.82km<sup>2</sup>、推計人口57,578人）。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだアリアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市と川井村の境界にあたる区界岬付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川、本造跡の南東側を流れる八木沢川がそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃綠岩～トーナル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダメロ岩やデイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向が見られる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帶状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶴西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的小ない標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。本遺跡はこの小起伏山地に含まれる。

### 2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

#### 縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、菅ノ沢遺跡、小沢貝塚などが確認されている。縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地はそ



第3図 周辺の遺跡分布図

の他にも存在するが、現段階では総じて詳細な様相が把握できる状況はない。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶴報糞森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隱里Ⅲ遺跡では、後期の土器が出土している。

#### 奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、藤手刀や直刀など鉄製武器類や和同開拓が出土している。県内における和同開拓の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まると考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。松山大地田沢遺跡の南東2.5kmに位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隱里Ⅲ遺跡では平安時代の堅穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち堅穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では初となる灰釉陶器片が出土している。また、松山大地田沢遺跡（報告遺跡）では藤手刀などの大刀に付けられる鉄製の足金具が堅穴住居から出土しており特筆される。

#### 中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに閉伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。遺跡の周辺域では、松山館、千徳城、田鎖館、花輪館、鱒沢館等が確認されている。前代から引き続き、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、松山大地田沢遺跡の西方800mに位置する松山館からは、江戸時代に農地の耕作がおこなわれた際に藤手刀が出土しており、宮古市の指定文化財となっている。

#### 地域的・歴史的特性

以上のように、松山大地田沢遺跡周辺には、縄文時代～中世に至るまでの遺跡が数多く確認・調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地の特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残像状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	鳥田Ⅱ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡	42	松山大手川沢	古代	集落跡
2	鳥田Ⅰ	平安	集落跡	43	船堀Ⅰ	縄文・古代	集落跡
3	礎頭中谷地	縄文・古代	集落跡	44	陣屋Ⅱ	縄文・古代	集落跡
4	八木沢古館	中世	城館跡	45	陣屋Ⅲ	縄文・古代	集落跡
5	礎頭館山	縄文～近世	集落跡・城館跡・生産遺跡	46	陣屋Ⅳ	縄文・張牛・古代	集落跡
6	高根	縄文	土壌高部	47	破窓竹洞Ⅰ	平安	集落跡
7	寒風	縄文	集落跡	48	藤原上町Ⅱ	奈良	集落跡
8	菅ノ沢	縄文・古代	集落跡	49	丸岸地	縄文	集落跡・貝塚
9	近内中村	縄文・弥生・古代	集落跡	50	小武田	縄文・古代	貝塚
10	蛭ヶ沢Ⅰ	縄文・古代	集落跡	51	早坂	縄文・弥生・古代	貝塚
11	近内白石Ⅰ	古代以降	製鉄遺跡	52	上村貝塚	縄文～平安	集落跡・貝塚
12	近内大船	中世	城館跡	53	礎頭根美森貝塚	縄文・古代	貝塚
13	赤畠	縄文・近世	集落跡	54	仏説Ⅱ	縄文・平安	集落跡
14	山口駒込Ⅰ	縄文・奈良	集落跡	55	花輪館	中世	城館跡
15	山口駒込Ⅱ	古代以降	集落跡	56	下折壁Ⅰ	中世	城館跡
16	狐塙	縄文・奈良・平安	集落跡	57	八木沢Ⅱ	縄文・古代・中世	集落跡
17	山口館	縄文・古代・中世	城館跡・集落跡	58	八木沢Ⅲ	古代以降	生産遺跡
18	桝駒込	縄文	集落跡	59	八木沢新館	中世・近世	城館跡
19	黒森町Ⅰ	近世	尾数跡・鉄物製作跡	60	鷹之館	中世	城館跡
20	小沢貝塚	縄文	貝塚	61	八木沢駒込Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
21	佐原	縄文	集落跡	62	金浜館	中世	城館跡
22	平原Ⅰ	縄文	集落跡	63	金浜Ⅰ	縄文	散布地
23	熊野町	中世	番屋敷	64	金浜Ⅱ	古代	集落跡
24	猪ヶ崎雄山貝塚	縄文～中世	貝塚・集落跡・城館跡	65	金浜Ⅲ	縄文・古代	散布地
25	井戸ヶ洞	縄文	集落跡	66	金浜Ⅳ	縄文	散布地
26	田銀館	中世	城館跡	67	金浜Ⅴ	縄文	散布地
27	黒田館	中世	城館跡	68	金浜駒ヶ沢	古代以降	製鉄跡
28	下大谷地Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡	69	馬越Ⅱ	古代	集落跡
29	千鹿城	奈良・平安・中世	城館跡・製鉄跡	70	山時館	中世	城館跡
30	青猿Ⅰ	縄文・平安	集落跡・製鉄跡	71	沼里	縄文・奈良	集落跡
31	青猿Ⅱ	弥生・平安	集落跡	72	沼里館	中世	城館跡
32	長根Ⅰ	弥生・中世	郡集墳	73	小屋内Ⅰ	縄文・弥生・奈良	集落跡
33	泉町狐塙Ⅱ	縄文・奈良・平安	集落跡	74	赤前Ⅲ	縄文・平安	集落跡
34	鷹塙Ⅰ	古代	集落跡	75	赤前Ⅳ・八枚田	縄文・平安	集落跡
35	笠置館	中世	城館跡	76	赤前館	中世	城館跡
36	横山	古代	集落跡・貝塚	77	埼山貝塚	縄文	集落跡・貝塚
37	木戸井内Ⅱ	古代以降	生産遺跡	78	八木沢駒込Ⅱ	縄文・古代	集落跡
38	木戸井内Ⅲ	弥生・古代以降	牛產遺跡	79	八木沢野来	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
39	木戸井内Ⅳ	縄文・古代・近世	集落跡・牛產遺跡	80	妻の神	弥生・古代	生産遺跡
40	小山田館	中世	城館跡・製鉄関連遺跡	81	妻の神Ⅰ	縄文・古代	生産遺跡
41	松山館	古代・中世	城館跡	82	妻の神Ⅱ	縄文・古代	生産遺跡

### 3 基本層序

遺跡の所在する松山地区一帯には花崗閃緑岩基盤層が分布しており、地表に向かうにつれ、風化作用を受けている（マサ土）。この風化層はその度合いにより下層の岩塊層と上層の砂層に分けられる。調査区内では、尾根部・斜面部において表土（森林腐植土）以下の堆積は見られず、直下にマサ土層が露出する。このため遺構検出面が各時期において共通する。

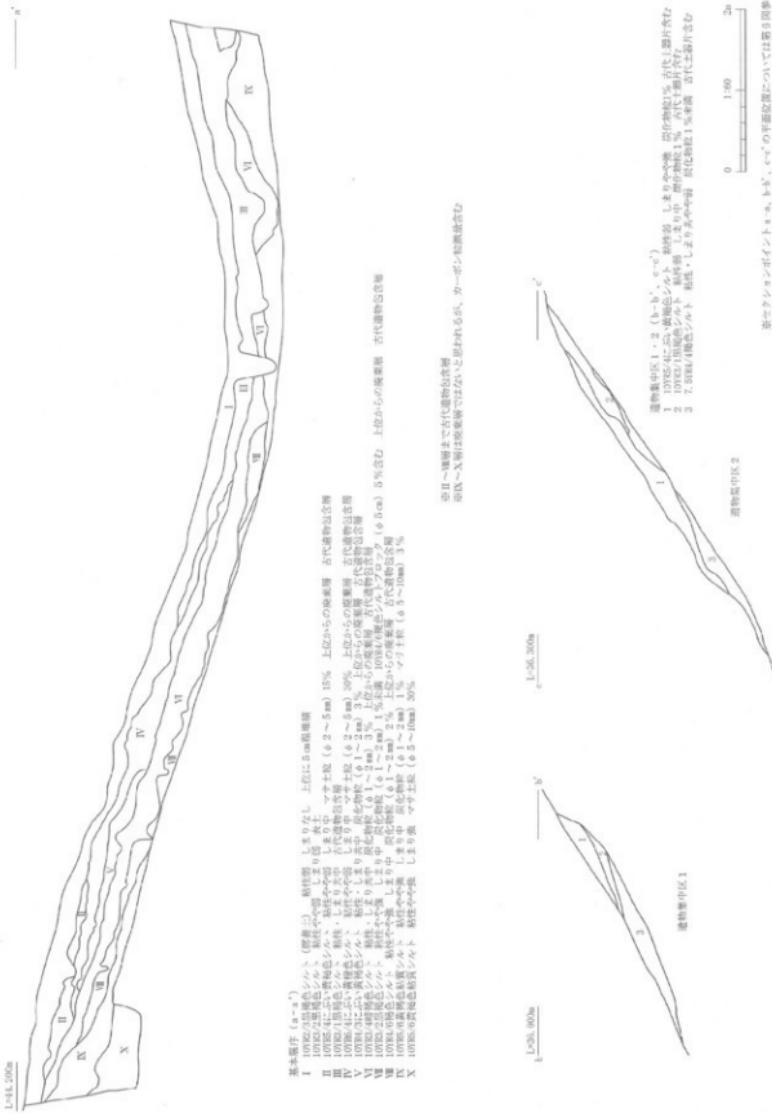
谷部では堆積様相が大きく異なり、それぞれ以下のような。

（谷部）

- I a 10YR2/3黒褐色シルト（腐葉土） 粘性弱 しまりなし 上位に5cm程堆積
- I b 10YR3/2黒褐色シルト（表土） 粘性やや弱 しまり弱
- II 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 マサ土粒φ2~5mm15%（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- III 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり共中（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- IV 10YR6/4にぶい黄橙色シルト 粘性やや弱 しまり中 マサ土粒φ2~5mm30%（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- V 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり共中 炭化物粒φ1~2mm3%（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- VI 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり共中 炭化物粒φ1~2mm3%（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- VII 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや強 しまり中 炭化物粒φ1~2mm1%未満 10YR4/6褐色シルトブロックφ5cm程度5%含む（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- VIII 10YR4/6褐色シルト 粘性やや強 しまり中 炭化物粒φ1~2mm2%（上位からの焼土層・古代遺物包含層）
- IX 10YR5/6黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり中 炭化物粒φ1~2mm1% マサ土粒φ5~10mm3%※カーボン粒微量含む
- X 10YR5/6黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり強 マサ土粒φ5~10mm30% ※カーボン粒微量含む（尾根・斜面部）
- I a 10YR2/3黒褐色シルト（腐葉土） 粘性弱 しまりなし 上位に5cm程堆積
- I b 10YR3/2黒褐色シルト（表土） 粘性やや弱 しまり弱
- X I 10YR8/6~8/1黄橙色～灰白色シルト（風化花崗岩＝マサ土） 粘性弱 しまり中

### 引用・参考文献

- 岩手県企画開発室 1974 「土地分類基本調査一宮古・跳ヶ崎一」
- （財）岩文振興文化財センター 1999 「鳥田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集
- （財）岩文振興文化財センター 2000 「沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集
- （財）岩文振興文化財センター 2004 「鳥田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- （財）岩文振興文化財センター 2006 「山口創跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第485集
- 宮古市教育委員会 1983 「宮古市遺跡分布調査報告書1」宮古市埋蔵文化財調査報告書3
- 宮古市教育委員会 1984 「宮古市遺跡分布調査報告書2」宮古市埋蔵文化財調査報告書4
- 宮古市教育委員会 1985 「宮古市遺跡分布調査報告書3」宮古市埋蔵文化財調査報告書6
- 宮古市教育委員会 1986 「宮古市遺跡分布調査報告書4」宮古市埋蔵文化財調査報告書8
- 宮古市教育委員会 1986 「宮古市遺跡分布図」宮古市埋蔵文化財調査報告書9
- 宮古市教育委員会 2006 「鳥山貝塚第20次調査・早船橋Ⅱ遺跡第7次調査」宮古市埋蔵文化財調査報告書66
- 宮古市教育委員会 2006 「木戸井内IV遺跡」宮古市埋蔵文化財調査報告書68



第4図 基本層序、遺物集中区1・2断面

### III 調 査 方 法

#### 1 野 外 調 査

##### (1) 調 査 経 過

- 6月25日 プレバブ用地整地・鉄板設置。重機搬入（バックホー0.45 1台）。
- 7月1日 資材搬入、調査開始（雑物撤去）。
- 7月2日 試掘・表土除去（人力）開始。  
安全防護柵・階段設置（転落防止・土留め）。※設置作業は（株）小山田組へ委託して7月3日まで実施。
- 7月3日 重機による表土除去・人力による遺構検出作業開始。7月8日まで随時。
- 7月7日 基準杭打設。精査開始。
- 7月9日 肥穴住居をはじめとする複数の遺構を確認、本格的な精査に着手。
- 8月1日 西尾根調査区拡張に関する三者協議を経て調査面積が1,130m<sup>2</sup>から1,790m<sup>2</sup>へ変更となる。
- 8月4日 面積増加に伴う安全防護柵の拡張、表土除去開始（バックホー0.45 1台）。
- 8月27日 空撮実施。
- 9月5日 終了確認。
- 9月12日 調査終了。安全防護柵撤去。現場撤収。

##### (2) 発掘調査の方法

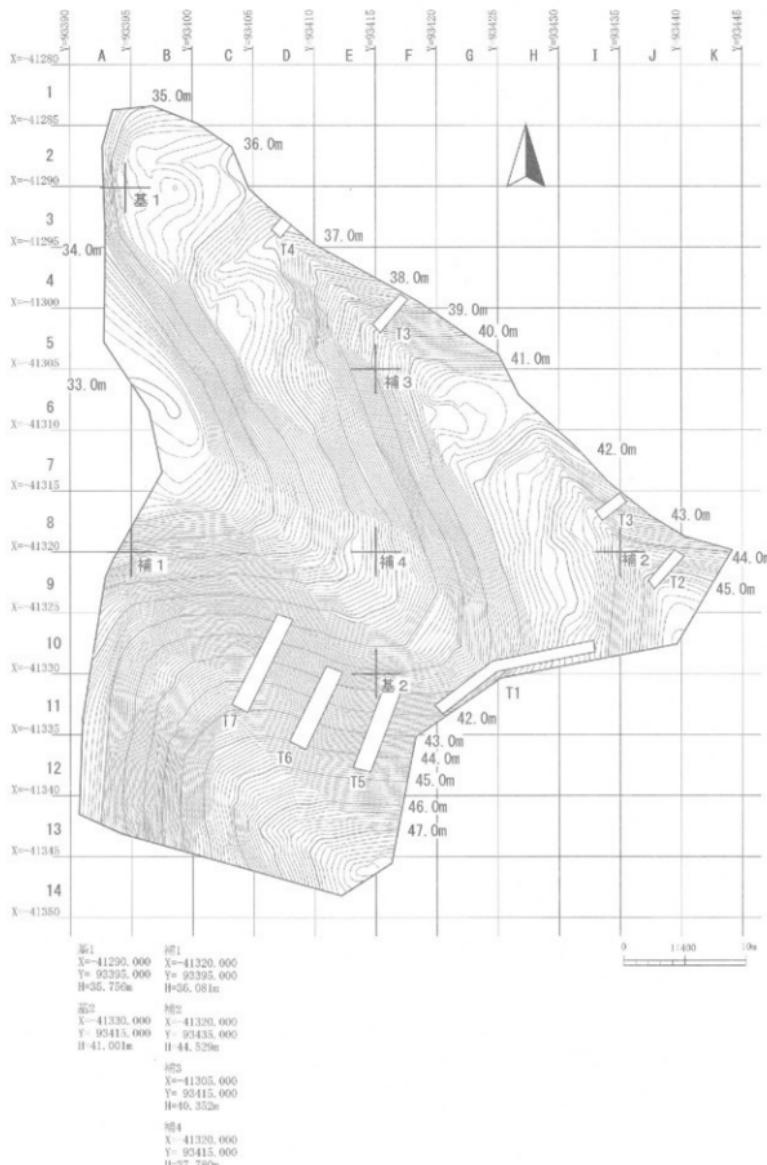
###### ①グリッド設定と調査区の名称

調査グリッドの幅は5mで統一し、遺物の取り上げや遺構の平面的配置の把握に用いた。グリッドは北西隅を原点とし、北から南に向かって昇順する算用数字1～14と、西から東に大文字アルファベットA～Kで表した。図版中の座標値、標高値はすべて世界測地系で示している。遺跡内の地形の表現については、山地の峰線上の範囲を「尾根部」、尾根部に挟まれた低地帯を「谷部」、尾根部と谷部をつなぐ斜面を「斜面部」と呼称した。個々のエリアの名称は第6図に示している。

###### ②安全対策・雑物撤去・粗掘・遺構検出

遺跡の調査前現況は山林であった。調査開始前には宮古地方森林組合によって調査範囲の伐採作業が行われ、調査開始直後は伐採にて生じた雑物（伐採木の枝葉）の撤去作業から行った。また、調査区内の斜度によっては転落防止措置を図り、残土の流出が懸念される箇所については安全防護柵、上蓋列を設置するなどして随時安全を確保するよう努めた。なお、安全防護柵の撤入および設置は株式会社小山田組に業務を委託した。雑物撤去終了後は順次、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体に人力による試掘トレンドを入り、その後、試掘結果に応じて尾根部・斜面部はマサ土層まで、谷部においては表土除去後のII層上面まで重機を使用して表土除去を行った。表土除去は尾根上から斜面に向け行い、重機が進入不可能な急斜面などは安全ベルトを着用した上で、適宜人力によるトレンド調査を行った。表土除去後は、尾根上から順次人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構の掘削は、肥穴住居については1分法、その他の遺構については規模・形状に則して4分法、2分法など適宜選択して行った。また、遺構埋土の掘削に際しては層位毎に遺物を取り上げるよう努めた。さらに、肥穴住居の床面、カマド燃焼部・煙道埋土については土壤を探取し、

# 1 野外調査



第5図 グリッド、基準点、トレンチ配置図

現地にて土壤洗浄・炭化種子の選別・抽出作業を行った。

遺構平面図は、おもに光波測量機器、電子平板を用いて実測及び作図した。なお、遺構平面図は遺構の種類、規模などを考慮し20分の1、10分の1などの縮尺で作成した。遺構断面図は、平面図と同一縮尺での作成を原則とした。

遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・6×9cm判モノクロによる撮影を基本とし、補助的にデジタルカメラによる撮影も合わせて行った。撮影に際しては、当センター所定撮影カードの記入および写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。

## 2 室内整理

### (1) 整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センター内にて行った。

発掘調査時に作成し、点検を経た遺構等の断面実測図は、必要に応じて第2原図や合成図を作成し、スキャナーで取り込みデジタルデータ化した。遺構平面図は電子平板で作成し、これと断面のデジタルデータを合成して図版を作成した。作成したデジタル図版はEPS形式で保管している。遺構等の写真はそれぞれアルバムにより整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、紙焼きし写真団版用に版下を作成した。

遺物の洗浄および注記を経た遺物は、接合作業を行い、必要なものは石膏による復元も行った。本書に掲載する遺物を選択し、実測作業と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況のものを原則とし、土器類の破片については特徴から時期や土器型式を特定できるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での実測を基本とした。土器は実測可能なものをを中心に実測を行った。実測を行った遺物は、浄書し図版用の版下を作成した。また、縄文土器表面や錢貨等は湿拓により採拓した。遺物の写真撮影はデジタルカメラを用いて行い、圧縮したデータを編集し写真団版として掲載した。なお、これら遺物写真データはRAW形式とJPEG形式の両方を保管している。すべての処理が終了した遺物は、本書掲載遺物と不掲載遺物とに分けて所定の場所へ収納した。

### (2) 掲載方法と凡例

#### ① 遺構

遺構名・遺構番号については、発掘調査中は略号（SI・SK・SXなど）を用いたが、本書では、「1号竪穴住居」、「1号土坑」などと表記した。遺構計測値に付した（ ）は推定値を、〈 〉は残存値を表している。遺構図面は点検後、必要に応じて第2原図を作成した。図版中の縮尺は個々にスケールを付した。なお、使用したスクリーントーンの種類は凡例のとおりである。

#### ② 遺物

遺物の掲載番号は、以下のとく1～3桁の遺物番号を付した。なお、実測図・写真とも共通の掲載番号である。また、遺物は土器・土製品→石器・石製品→鉄製品→その他の順序で掲載している。遺物実測図は、土器、砾石器を3分の1、剥片石器・鉄製品を2分の1でそれぞれ統一し掲載した。写真団版は、デジタルカメラで撮影した画像データ（JPEG形式）を用いた。遺物写真的寸法は遺物実測図とほぼ同じである。

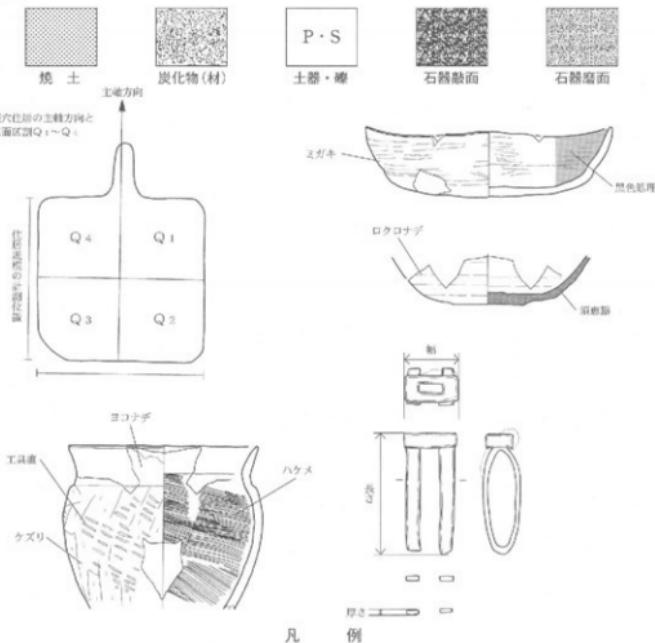
## [フローテーションにかかる遺構内土壤の採取]

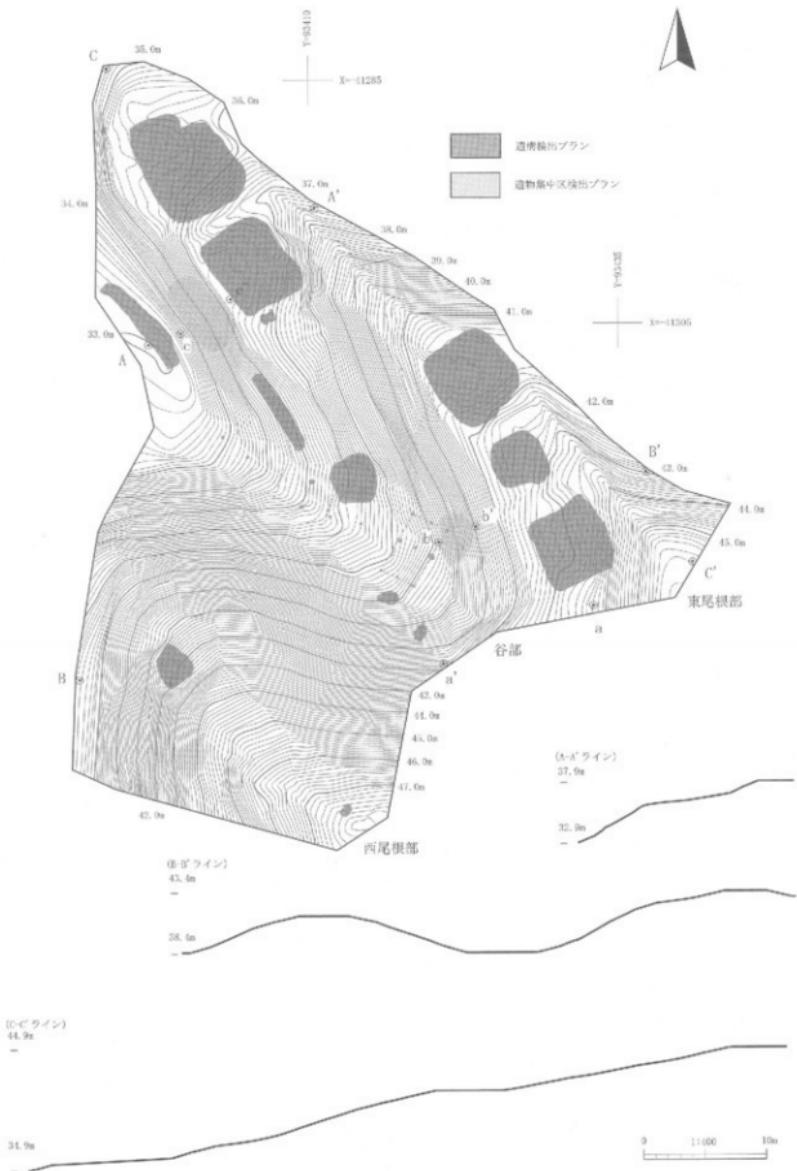
遺構の埋土をサンプリングし、ウォーターフローテーション・セバレーション法による微細自然遺物の回収を実施している。土壤は10リットルのバケツ内で水洗し、炭化浮遊物を0.5mmメッシュの篩で回収する作業を数回繰り返した後、沈殿物を0.5mmメッシュの篩で回収した。浮遊物は新聞紙（一部はアルミホイル）の上にのせ保管、乾燥した後、肉眼あるいは15倍のルーペ下で自然遺物の1次選別を行った。なお、サンプル採取地点およびフローテーション・セバレーション実施推定土壤量は以下のとおりである。

遺構名	採取地点	土壤量(t)	遺構名	採取地点	土壤量(t)
1号堅穴住居	Q1床面	300	3号堅穴住居	床面一括	160
1号堅穴住居	Q2床面	540	3号堅穴住居	カマド崩落土～屢辺	440
1号堅穴住居	Q3床面	220	3号堅穴住居	カマド槽道	60
1号堅穴住居	Q4床面	280	4号堅穴住居	床面一括	120
1号堅穴住居	カマド崩落土	80	4号堅穴住居	カマド崩落土	120
1号堅穴住居	カマド槽道	700	4号堅穴住居	カマド槽道	260
1号堅穴住居	カマド燃焼部	180	5号堅穴住居	Q4床上3cm	80
2号堅穴住居	Q1床面	40	1号炉跡	埋土	380
2号堅穴住居	Q2床面	40	2号炉跡	埋土	100
2号堅穴住居	Q3床面	60	3号土坑	埋土	80
2号堅穴住居	Q4床面	140	3号土坑	焼上・炭化物層	100
2号堅穴住居	カマド槽道	120	6号土坑	埋土	40
2号堅穴住居	ベルト埋土一括	120	7号土坑	埋土	160

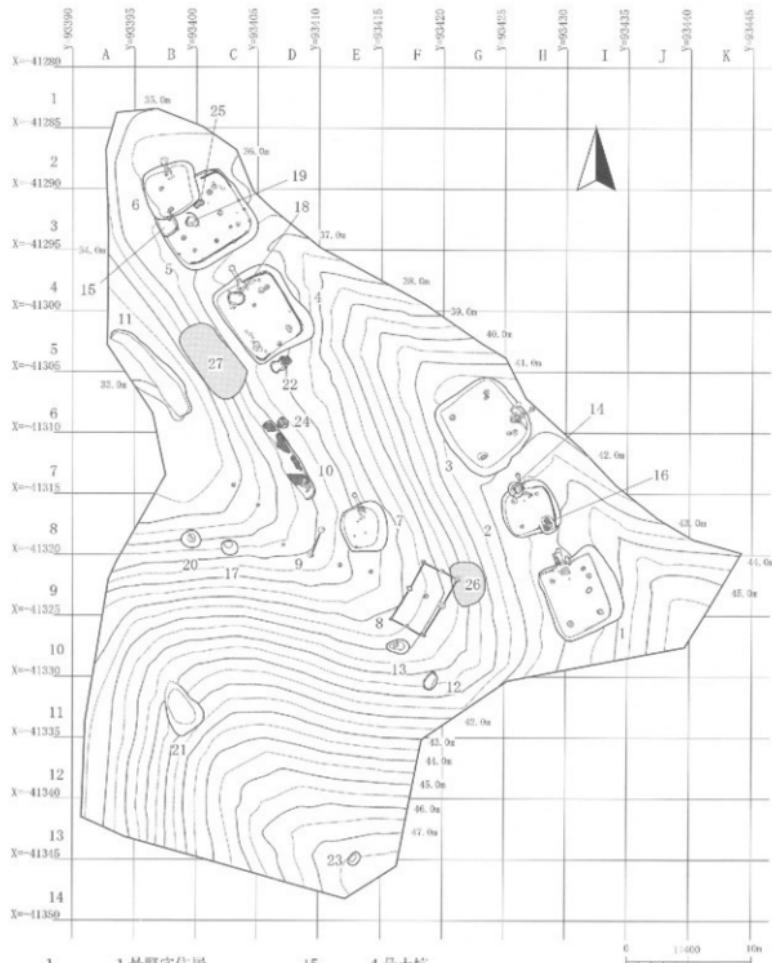
※土壤量は推定

(九山)





第6図 調査区縦断・横断ラインと遺構検出プラン



1	1号竖穴住居	15	4号土坑
2	2号竖穴住居	16	5号土坑
3	3号竖穴住居	17	6号土坑
4	4号竖穴住居	18	7号土坑
5	5号竖穴住居	19	8号土坑
6	6号竖穴住居	20	9号土坑
7	7号竖穴住居	21	10号土坑
8	1号圆柱形建筑物	22	1号陶罐
9	1号门址	23	2号炉跡
10	1号灰坑	24	3号炉跡
11	2号炭窑	25	1号烧土遺構
12	1号土坑	26	遺物集中区1
13	2号土坑	27	遺物集中区2
14	3号土坑		

第7図 遺構配置図

## IV 調査成 果

### 1 概 要

今回の調査で検出された遺構は、奈良から平安時代にかけての竪穴住居7棟、土坑10基、炉跡3基、焼土遺構1基、遺物集中区2箇所、時期不明の掘立柱建物1棟、門跡？1箇所、炭窯2基である。

### 2 検出 遺構

#### 竪穴住居

##### 1号竪穴住居（第8・9図、写真図版3・4）

【位置・調査過程】 9Ⅰグリッドに位置し、東尾根の北西向き斜面上位に位置する。検出層位はI層直下のマサ土層上面で、地面の窪みと褐色シルトの広がりとして確認された。

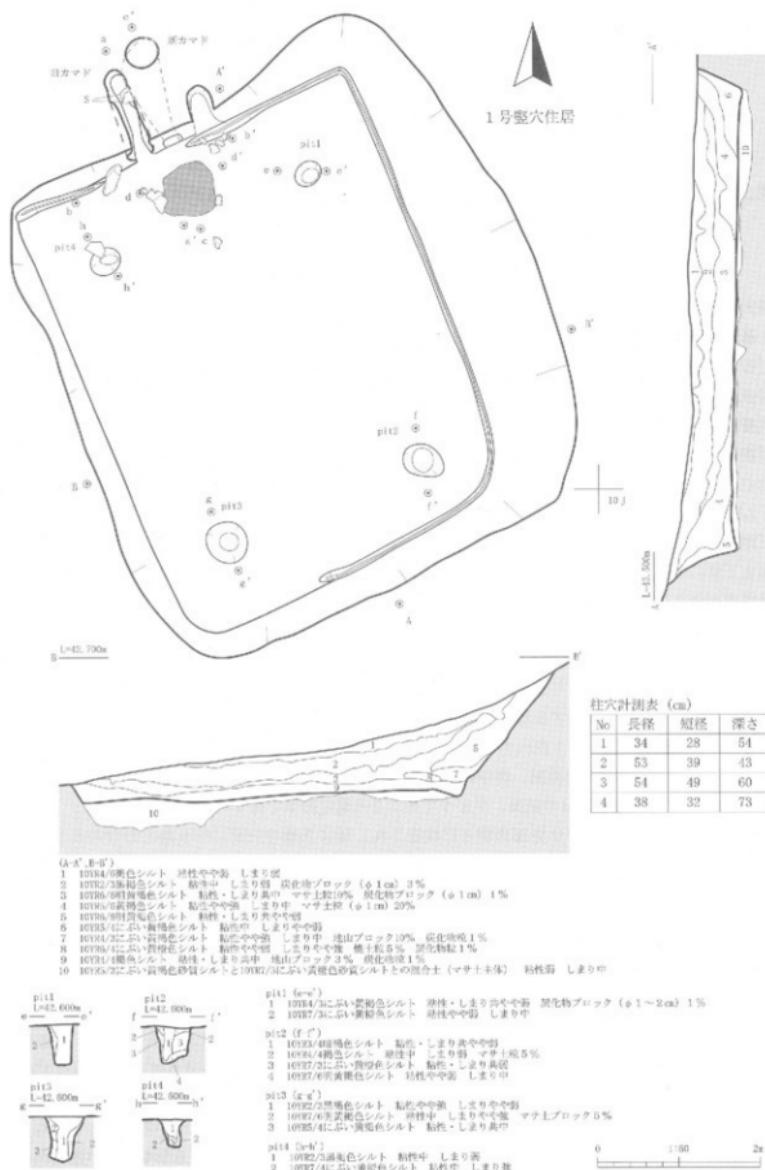
【重複関係】なし。

【規模・平面形・主軸方向】 尾根斜面に位置することから崩落・流失等の影響で西辺の残存状況がやや不良である。規模は西一東6.0m、北一南6.6mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-22°-Wである。

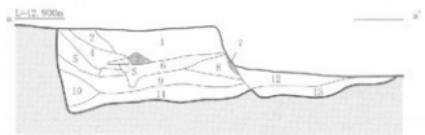
【埋土】 10層に分層される。第10層は貼り床である。理上位に褐色シルト、中位に黒褐色シルト、埋土下位にはにぶい黄褐色～褐色シルトが堆積する。全体にマサ土をブロック状に含む。第5～8層は壁面が崩落堆積した状態を呈している。

【塗・床面】 住居構築時の掘削はマサ土層中まで及んでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ39cmの貼り床が施され、斜面下位で厚い。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁は、やや外傾して立ち上がるが、斜面上位にあたる東側では大きく外傾する。検出面から底面までの深さは最も残存する北側で1.48mを測る。壁溝は西側を除く壁面をほぼ全周している。床面Q4からは鉄製の釘先が1点出土している。なお、床面Q2から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施している。その結果、暦年較正年代で689～772ADの値が得られている（分析・鑑定の項参照）。炭化材は肉眼観察の結果、ケヤキであるとの鑑定結果を得ている。

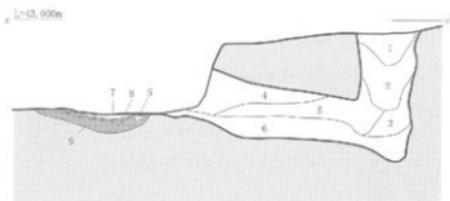
【カマド】 はじめ北壁の中央部西寄りに設置され、後に北壁中央部に作り替えが行われている。カマド本体は残存しておらず、新カマド燃焼部焼土周辺から礫片と炭化材が数点検出されているのみである。礫の素材は流紋岩で、カマドの芯材として用いられたものと推測される。炭化材は肉眼観察の結果、センノキであるという鑑定結果を得ている。新カマド燃焼部焼土は66×63cmの範囲に形成され、最深部9cmを測る。煙道は割り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約10度の下り勾配で北側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下77cmを測る。煙道長は1.38m、幅は46cmである。旧カマドは煙道～煙出しのみの検出である。左袖壁面側に流紋岩製の礫片が1点検出されている。燃焼部は残存していないかった。煙道は割り抜き式で、トンネル状に掘り込まれており、約5度の下り勾配で北側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下54cmを測る。煙道長は1.1m、幅は33cmである。旧カマドの埋土上1層は焼上ブロックが全体に混入するもので、第3層は明赤褐色焼土ブロックが堆積している。このことから新カマド構築時に人為的な埋め戻しが行われていると考えられる。これら新旧のカマドは圓面作成を前にして、平成20年8月に起こった地震による影響を受け煙道部がす



第8図 1号竪穴住居 (1)



- 断面 b-b [m.s.n.、L=12,990m]
- 1 1014/1褐色シルト 動性やや暗 しまり中 中十板 5%
  - 2 1016/0赤褐色シルト 動性やや暗 しまりやや密
  - 3 1015/3青褐色シルト (漂土) 動性・しまり共無
  - 4 1015/0褐色シルト 動性中 しまり弱 呈生物ブロック (ø 3 cm) 1%
  - 5 1015/0褐色シルト 動性やや暗 しまり強 ø 5 cm程度の塊を10%含み、非常に堅くしまる
  - 6 1015/0褐色シルト 動性やや暗 しまり中 呈生物ブロック20% 呈化物ブロック (ø 1 cm) 1%
  - 7 1015/0赤褐色シルト (粘土) 動性中 しまり強
  - 8 1015/0黄色シルト 動性中 しまり強 天然化の毛管岩主体で非常に堅くしまる
  - 9 1016/0(粘土) 漂泥質シルト 動性中 しまり強
  - 10 1015/0褐色シルト 動性中 しまりやや密 天然化の毛管岩主体で非常に堅くしまる
  - 11 1015/0(粘土) 黄褐色シルト 動性中 しまりやや密
  - 12 1015/3黑色系シルト 動性やや暗 しまり中 呈化物ブロック (ø 2 cm) 30%
  - 13 1015/1黑色シルト 動性やや暗 しまり中 呈化物ブロック (ø 1 cm) 10%
  - 14 1015/1 二云灰岩質シルト 動性やや弱 しまり中 働土ブロック5%
  - 15 1015/1 黑色シルト 動性・しまり共無

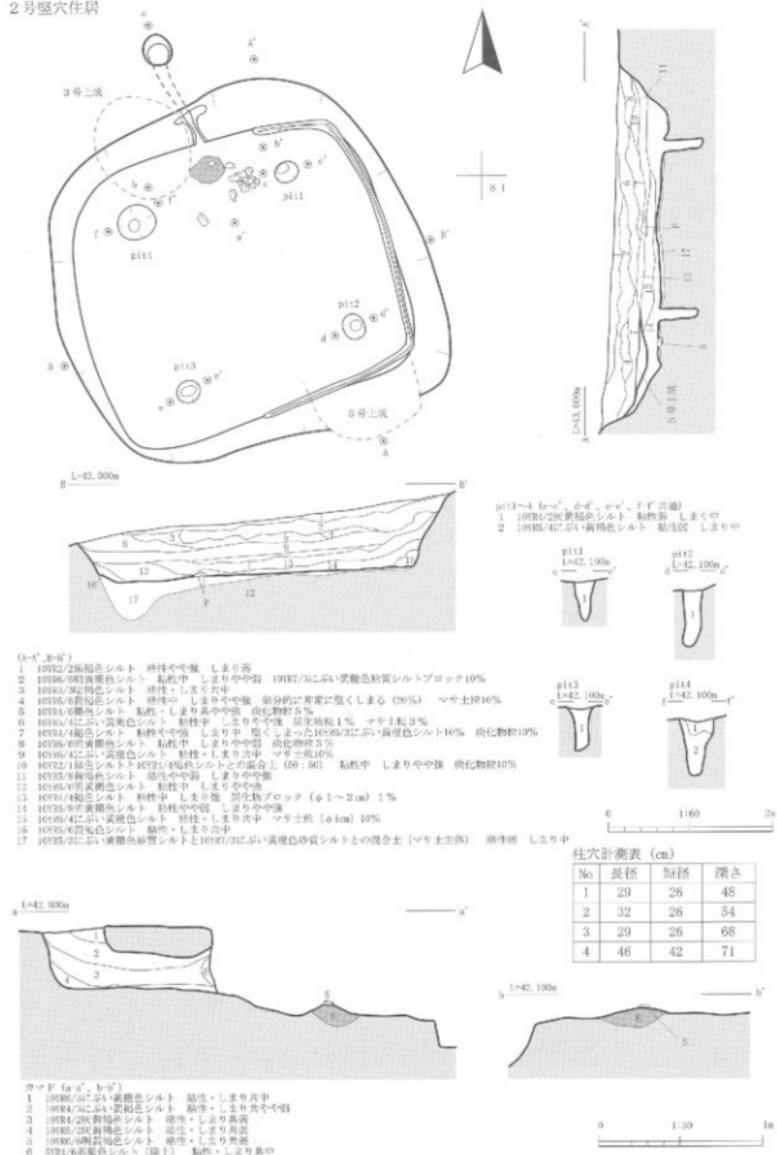


- 断面 c-c (c-c', 4 c')
- 1 1015/2(粘土) 黒褐色シルト 動性・しまり共無
  - 2 1015/2(粘土) 黒褐色シルト 動性・しまり共無
  - 3 1015/1褐色シルト 動性・しまり共無
  - 4 1015/2褐色シルト 動性・しまり共無 鉛白/赤褐色漂土ブロック3% 呈化物被3%
  - 5 1015/1褐色シルト 動性・しまり共無 上部の風化带 (D1) 動性・しまり共無
  - 6 1015/1褐色シルト 動性・しまり共無 呈化物被1%
  - 7 1015/1黒褐色シルト 動性・しまり共無 呈化物被1%
  - 8 5115/0(粘土) 黑褐色シルト (底土) 動性弱 しまり強
  - 9 5115/0(粘土) 黑褐色シルト (底土) 動性弱 しまりやや密
  - 10 5115/0(粘土) 黑褐色シルト (底土) 動性弱 しまりやや密 (掘え方?)



第9図 1号豎穴住居 (2)

## 2号竪穴住居



第10図 2号竪穴住居

べて崩落してしまった。この為、平面図上の表現が一部推定によっている。

【柱穴・ピット】 柱穴は北東隅から1個、南東隅から1個、南西隅から1個、北西隅から1個の計4個検出された。

遺物（第29・30図、写真図版17）

【土師器】 10点出土した。内訳は床面直上3点、カマド袖部2点、埋土5点である。

【石器】 床面から埋土にかけて2点出土している。

【鉄製品】 床面から埋土にかけて3点が出土している。

【鉄滓】 床面から2点出土している。

【炭化種子】 床面およびカマドから炭化種子が出土している（詳細は分析鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物および床面炭化材の放射性炭素年代測定結果から8世紀後半～9世紀代と推定される。

## 2号竪穴住居（第10図、写真図版5）

【位置・調査過程】 8号グリッドに位置し、東尾根の北西向き斜面上位に位置する。検出層位は1層直下のマサ十層上面で、地面の窪みと褐色シルトの広がりとして確認された。

【重複関係】 南東隅で5号土坑、北西隅で3号土坑と重複、これらにより切られる。

【規模・平面形・主軸方向】 尾根斜面に位置することから崩落・流出等の影響で西辺の残存状況がやや不良である。規模は西一東4.4m、北一南4.3mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-19°-Wである。

【埋土】 17層に分層される。第17層は貼り床である。埋土上位は黒褐色シルト、中位から下位は黄褐色～褐色シルト主体で構成される。全体にマサ土紋、炭化物粒を含む。第13層上面には5号土坑が作られており、竪穴住居廃絶後に住居跡の窪みを利用して土坑が作られていることが判明した。

【壁・床面】 住居構築時の掘削はマサ十層中まで及んでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ45cmの貼り床が施され、斜面下位で厚い。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁はいずれもやや外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する東側で91cmを測る。壁溝は東半部にのみ認められる。

【カマド】 北壁の中央部に設置されている。カマド本体は残存しておらず、燃焼部焼土と、礫片が周辺から数点検出されているのみである。礫の素材は流紋岩で、カマドの芯材として用いられたものと推測される。燃焼部焼土は43×33cmの範囲に形成され、最深部で12cmを測る。煙道は割り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約1.7度の下り勾配で北側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下38cmを測る。煙道長は1.46m、幅は25cmである。

【柱穴・ピット】 柱穴は北東隅から1個、南東隅から1個、南西隅から1個、北西隅から1個の計4個検出された。

遺物（第30～33図、写真図版17～19）

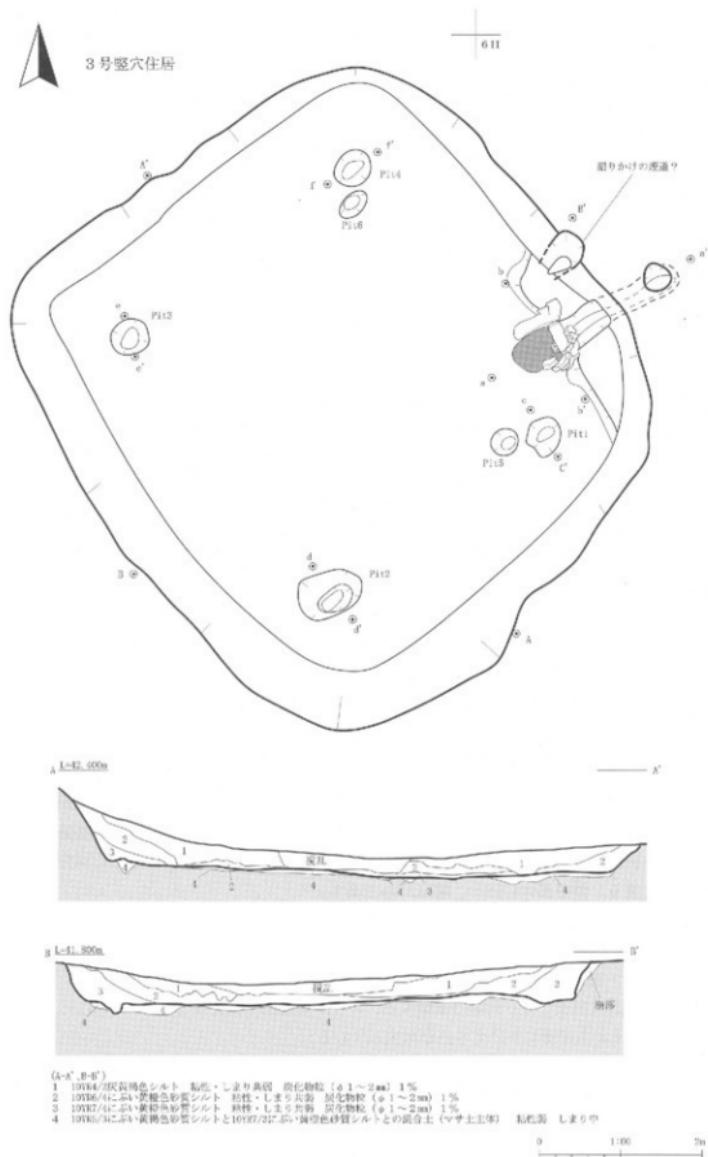
【土師器】 22点出土した。内訳は床面6点、カマド燃焼部1点、埋土15点である。

【石器】 埋土から床面にかけて6点が出土している。

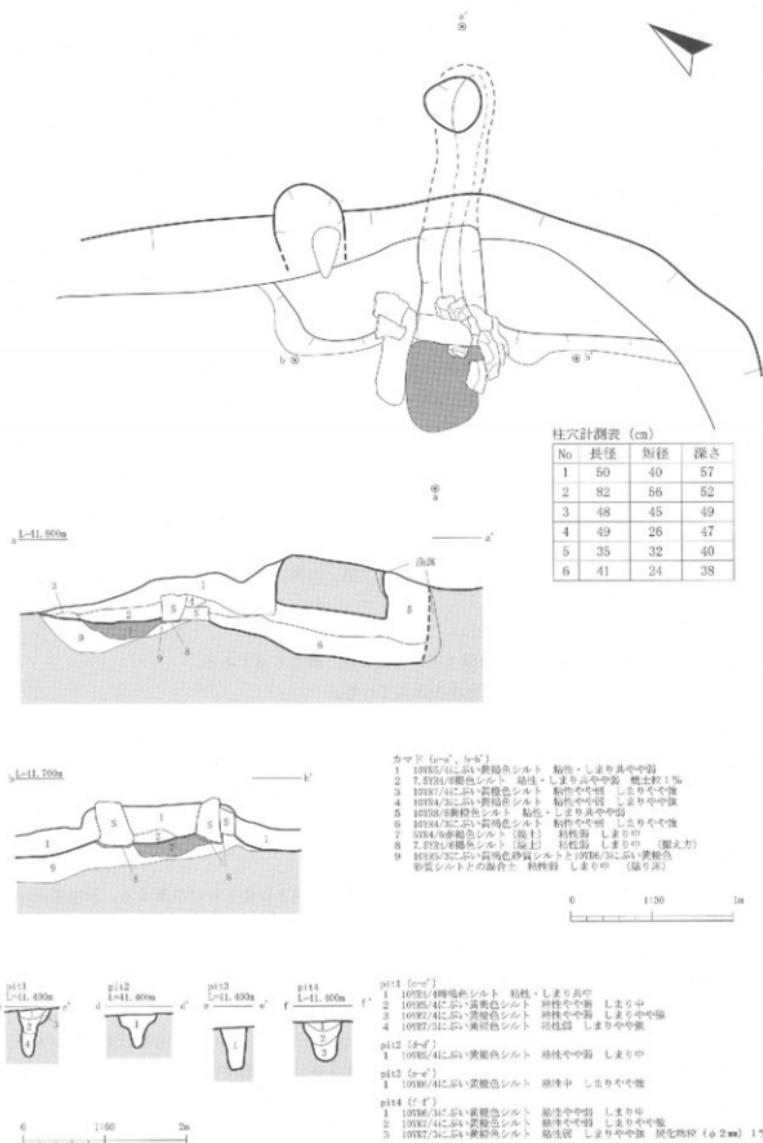
【土製品】 埋土から1点出土している。

【炭化種子】 床面およびカマドから炭化種子が出土している（詳細は分析鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物から8世紀後半～9世紀代と推定される。



第11図 3号竪穴住居 (1)



第12図 3号竖穴住居 (2)

## 3号竪穴住居（第11・12図、写真図版6）

【位置・調査過程】 6Gグリッドに位置し、東尾根の北西向き斜向上位に位置する。検出層位は1層直下のマサ土層上面で、地面の窪みと灰黄褐色シルトの広がりとして確認された。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形・主軸方向】 規模は北西—南東7.17m、北東—南西6.6mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-49°-Eである。

【埋土】 4層に分層される。第4層は貼り床である。埋土上位は灰黄褐色シルト、下位はにぶい黄橙色砂質シルト（マサ土）主体で構成される。全体に炭化物粒を少量含む。なお、理上中から出土した炭化材の肉眼鑑定を実施している。その結果、ホウノキであるとの鑑定を得ている。

【壁・床面】 住居構築時の掘削はマサ土層中まで及んでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ12cmの貼り床が施され、壁際でやや厚い。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁はいずれも緩やかに外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する南東側で82cmを測る。壁溝は南東辺～南西辺にかけて検出されている（不手際で平面記録を欠く）。また、Q3区床面近くから鉄製の鎌が1点出土している。

【カマド】 北東壁の南東寄り1/3のところに設置されている。カマド本体は良好に残存している。袖部および天井部に安山岩製の大形蝶を用いた石組のカマドであったと思われる。燃焼部焼土は56×39cmの範囲に形成され、最深部で12cmを測る。煙道は割り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約11度の下り勾配で北東側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下57cmを測る。煙道長は1.66m、幅は39cmである。

【柱穴・ピット】 柱穴は北隅から2個、東隅から2個、南隅から1個、西隅から1個の計6個検出された。

## 遺物（第33図、写真図版19・20）

【土師器】 10点出土した。内訳は床面1点、壁溝3点、埋土6点である。

【石器】 埋土、カマド崩落土から3点が出土している。

【鉄製品】 埋土から2点出土している。

【鉄滓】 埋土から2点出土している。

【炭化種子】 床面およびカマドから炭化種子が出土している（詳細は分析鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物から9世紀代と推定される。

## 4号竪穴住居（第13・14図、写真図版7）

【位置・調査過程】 4Cグリッドに位置し、東尾根の北西向き斜面下位に位置する。検出層位は1層直下のマサ土層上面で、地面の窪みと暗褐色シルトの広がりとして確認された。

【重複関係】 西側隅で7号土坑と重複し、これを切る。

【規模・平面形・主軸方向】 規模は北西—南東7.34m、北東—南西5.94mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-34°-Wである。

【埋土】 7層に分層される。第7層は貼り床である。埋土上位は暗褐色シルト、中位は黒褐色シルト、下位は明黄褐色シルト（マサ土）主体で構成される。第2層に炭化物粒を微量含む。埋土Q4埋土上位から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施している（分析・鑑定の項参照）。炭化材は肉眼観察の結果、イタヤカエデとの鑑定を得ている。

【壁・床面】 住居構築時の掘削はマサ土層中まで及んでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ

33cmの貼り床が施され、壁際でやや厚い。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁はいずれも緩やかに外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する北東側で81cmを測る。壁溝は北東半部を中心に認められる。

【カマド】 北西壁の中央部に設置されている。カマド本体は良好に残存している。袖部には流紋岩製の礫片が芯材に用いられており、芯材を黄褐色シルトで覆ってカマドが構築されている。燃焼部焼土は70×47cmの範囲に形成され、最深部で15cmを測る。燃焼部中央には小形の土師器壺を伏せた支脚が2点、並んで検出されている。煙道は割り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約11度の下り勾配で北西側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下1.14mを測る。煙道長は1.65m、幅は36cmである。

【柱穴・ピット】 柱穴は北隅から1個、東隅から1個、南隅から1個、西隅から1個、南東壁際中央から1個の計5個検出された。

遺物（第34・35図、写真図版20・21）

【土師器・須恵器】 土師器は20点、須恵器は6点出土した。内訳は床面7点、カマド支脚2点、埋土17点である。

【石器】 墓土中から3点が出土している。

【鉄製品】 墓土および床面から3点出土している。

【炭化種子】 床面およびカマドから炭化種子が出土している（詳細は分析鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物から8世紀後半代から9世紀代と推定される。

##### 5号竪穴住居（第15・16図、写真図版8）

【位置・調査過程】 3Cグリッドに位置し、東尾根の北西向き斜面下位に位置する。検出層位は1層戸下のマサ土層上面で、地面の窪みと黒褐色シルトの広がりとして確認された。

【重複関係】 北西側隅で6号竪穴住居、4号土坑、8号土坑、1号焼土造構と重複し、6号竪穴住居、8号土坑、1号焼土造構に切られる。また、4号土坑を切る。

【規模・平面形・主軸方向】 規模は北西—南東6.97m、北東—南西7.23mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-31°-Wである。

【埋土】 18層に分層される。第18層は貼り床である。埋土上位は黒褐色シルト、中位は暗褐色シルト、下位はぶい黄褐色シルト（マサ土）主体で構成される。

【壁・床面】 住居構築時の掘削はマサ土層中を掘りこんでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ33cmの貼り床が施される。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁はいずれも緩やかに外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する南東側で1.22mを測る。壁溝は北壁際と南東壁際で認められる。

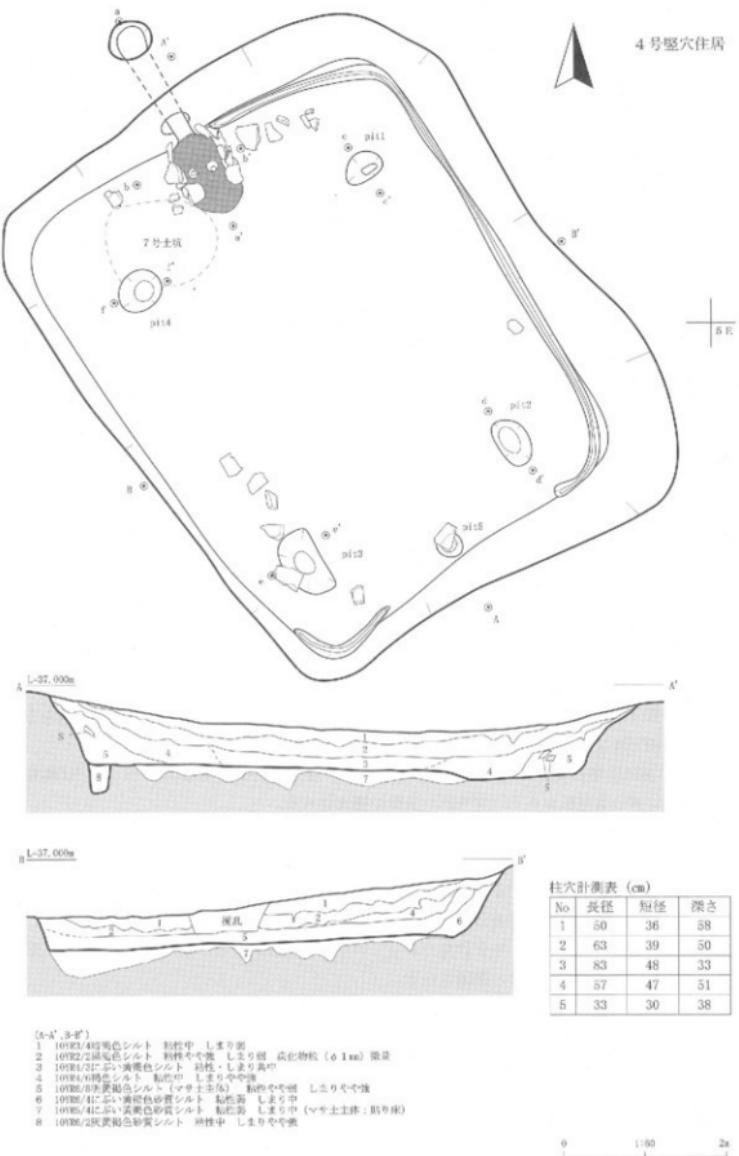
【カマド】 検出した範囲からカマドは見つかっていない。北西側が6号竪穴住居に切られており、新期造構構築時に破壊されたものと推測される。

【柱穴・ピット】 柱穴は計17個検出された。1~9はそれぞれ壁際に近いところを巡る。位置関係から主柱穴とみられる。10~17は南東半部の壁際沿うように巡る小柱穴で、壁柱穴と考えられる。

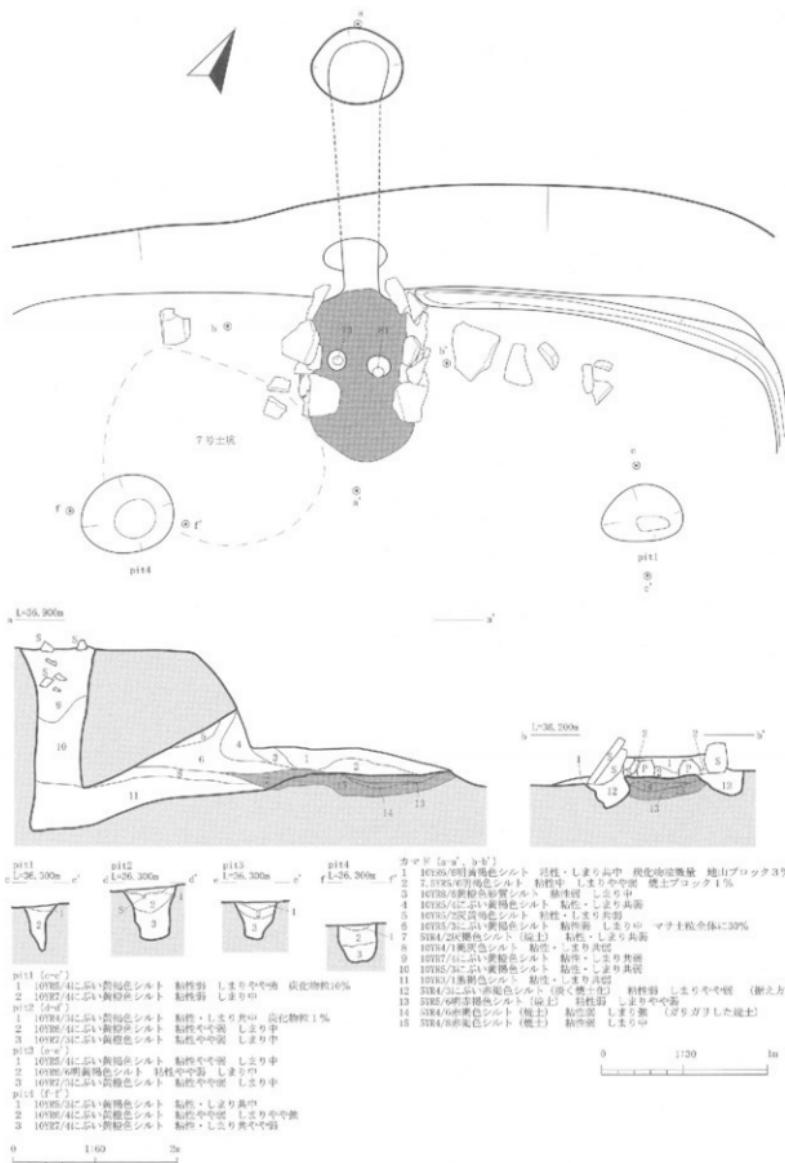
遺物（第36~38図、写真図版22・23）

【土師器・須恵器】 土師器は17点、須恵器は1点が出土している。内訳は床面5点、貼床1点、埋土12点である。

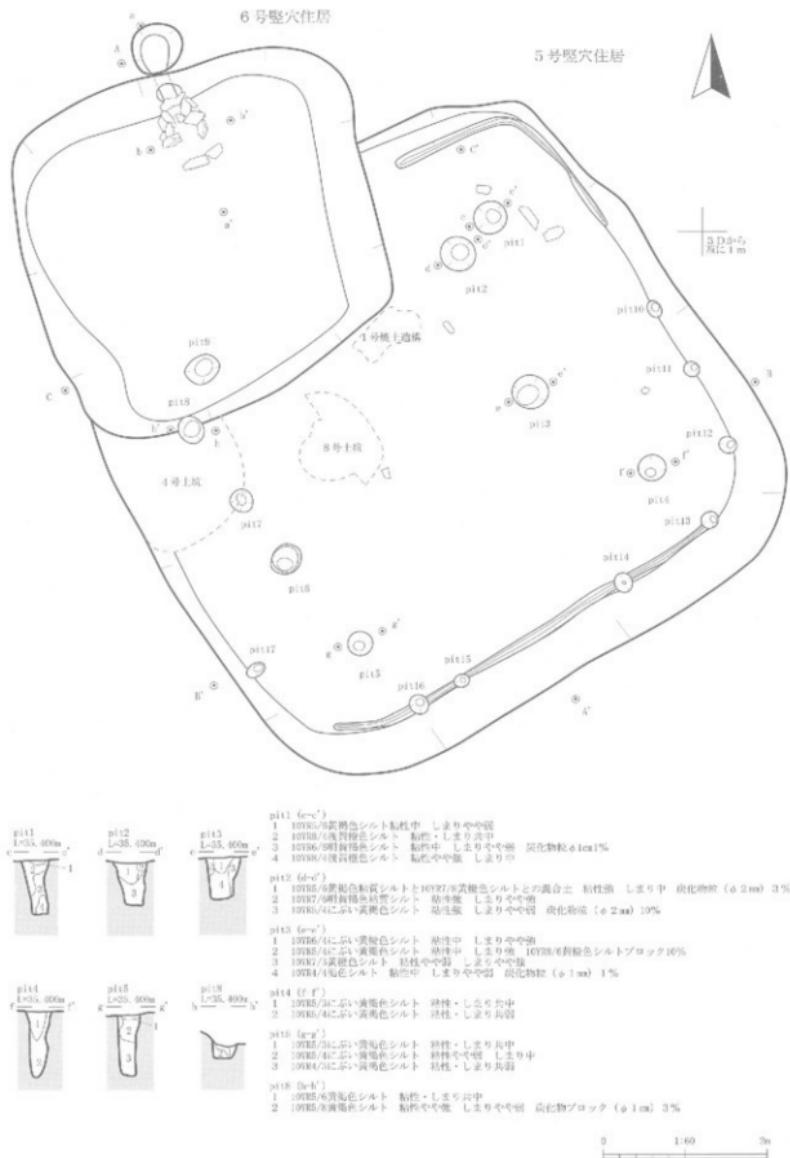
【石器】 墓土下位～床面にかけて6点が出土している。



第13図 4号窓穴住居 (1)



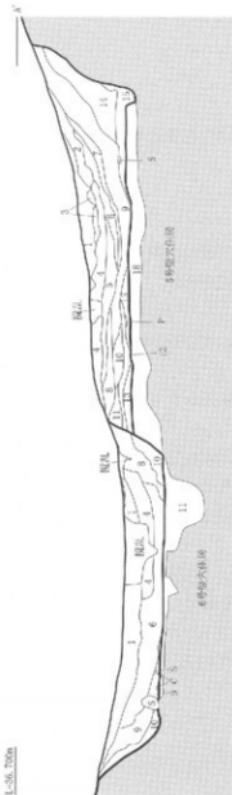
第14図 4号竪穴住居（2）



第15図 5・6号堅穴住居 (1)

柱穴計測表 (cm)

No.	長径	短径	深さ
1	42	39	68
2	44	42	53
3	45	41	53
4	34	32	80
5	30	29	76
6	39	34	19
7	29	27	42
8	35	30	23
9	40	33	17
10	22	16	34
11	19	18	32
12	22	19	52
13	21	20	39
14	24	21	41
15	18	15	31
16	25	22	27
17	24	16	50



第 16 図 5・6 号竪穴住居 (2)

5号竪穴住居 (5号、6号)、(a)、(b)、(c)  
柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。柱穴は、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
1 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
2 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
3 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
4 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
5 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
6 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
7 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
8 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
9 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
10 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
11 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。

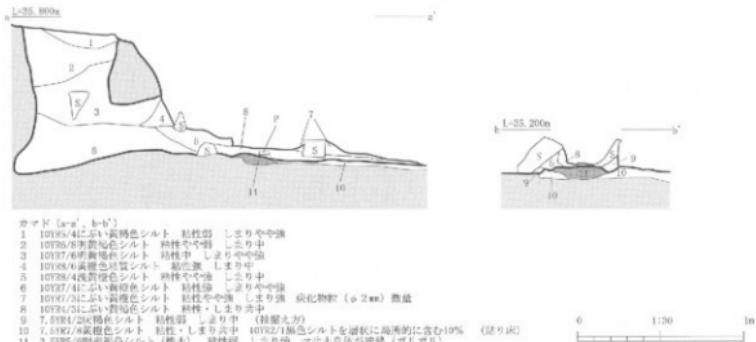
6号竪穴住居 (5号、6号)、(a)、(b)、(c)  
柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。柱穴は、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
1 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
2 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
3 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
4 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
5 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
6 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
7 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
8 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
9 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
10 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。  
11 101E-46.5-25.5 黄褐色シルト 地性やや強め、柱穴の位置と柱穴の大きさを示す。



0 1:250, 250m  
250 500 750 1km

0

1:250, 250m



第17図 6号竪穴住居カマド断面

[鉄製品] 墓土下位から1点出土している。

[炭化穀子] 床面およびカマドから炭化穀子が出土している（詳細は分析鑑定の項参照）。

時期 床面出土遺物から8世紀後半代から9世紀代と推定される。

### 6号竪穴住居（第15～17図、写真図版9）

[位置・調査過程] 2Bグリッドに位置し、東尾根の北西向き斜面下位に位置する。検出層位はI層直下のマサ土層上面で、地面の窪みと黒色シルトの広がりとして確認された。

[重複関係] 南半部で5号竪穴住居、南西隅で4号土坑と重複し、これらを切る。

[規模・平面形・主軸方向] 規模は北一南4.25m、東一西4.27mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-21°-Wである。

[埋土] 11層に分層される。第11層は貼り床である。埋土上位は黒色シルト、中位にはぶい黄褐色シルト、下位は黒褐色シルト主体で構成される。

[壁・床面] 住居構築時の掘削はマサ土層中を掘り込んでいる。床面にはほぼ全面に最深部で厚さ47cmの貼り床が施され、南壁際でやや厚い。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁はいずれも緩やかに外傾して立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する東側で84cmを測る。壁溝は認められない。

[カマド] 北壁の中央部に設置されている。袖部には流紋岩製とみられる礫片が芯材に用いられており、芯材をぶい黄褐色シルトで覆ってカマドが構築されている。燃焼部焼土は34×27cmの範囲に形成され、最深部で7cmを測る。煙道は割り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約10度の下り勾配で北側に傾斜する。煙出し部分の深さは検出面下90cmを測る。煙道長は1.04m、幅は34cmである。

[柱穴・ピット] 検出されていない。

遺物（第38図、写真図版23）

[土師器] 土師器は6点出土した。内訳は床面1点、埋土5点である。

時期 床面出土遺物から8世紀後半代から9世紀代と推定される。

## 7号竪穴住居（第18・19図、写真図版10）

【位置・調査過程】 8 E グリッドに位置し、東尾根部の斜面裾から谷部にかけて位置する。検出層位は1層直下のマサ土層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認された。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形・主軸方向】 規模は北一南3.77m、東一西3.72mで、平面形は隅丸方形である。住居主軸方向はN-22°-Wである。

【埋土】 5層に大別される。埋土上位は黒褐色シルト、中位に炭化物を30%程度含む黒色シルトの薄層が堆積する。このため、当初は炭窯の底面であると認識して一旦埋土の掘り下げを中断した。第4層以下は後に住居廻土と判明したため色調の記録を欠くが、黒褐色～褐色シルトを主体とするものである。

【壁・床面】 住居構築時の掘削はマサ土層中を掘り込んでいる。床面は全面的に硬くしまり、特に貼床は認められない。残存床面範囲はほぼ平坦である。壁は東一西方向では緩やかに外傾して立ち上がり、南一北方向の壁は床面から内湾するように丸みをもって立ち上がる。検出面から底面までの深さは最も残存する東側で119cmを測る。壁溝は認められない。

【カマド】 北壁の中央部に設置されている。袖部には流紋岩製の礫片が芯材に用いられており、芯材をにぶい黄橙色シルトで覆ってカマドが構築されている。燃焼部焼土は29×23cmの範囲に形成され、最深部で5cmを測る。煙道は例り貫き式でトンネル状に掘り込まれており、約8度の下り勾配で北側に傾斜する。掘出し部分の深さは検出面下82cmを測る。煙道長は1.3m、幅は30cmである。

【柱穴・ピット】 検出されていない。

遺物（第38～40図、写真図版23・24）

【土師器・須恵器】 土師器は14点、須恵器は1点出土した。内訳はカマド構成3点、貼床1点、埋土11点である。

時期 床面出土遺物から9世紀代と推定される。

(丸山)

## 1号掘立柱建物（第20図、写真図版11）

【位置・検出状況】 調査区谷部、9 F・9 G・10 Fグリッドに位置する。検出面はIX層上面で、黒褐色の円形プランとして確認した。遺物集中区1と重複し、本遺構が新しい。

【平面形式】 梁間3.03m（10尺）、桁行5.45m（18尺）の長方形を呈する。2間×2間の掘立柱建物で、面積は16.51m<sup>2</sup>（約5坪）である。使用した柱穴は10個である。

【建物方位】 衍行の方向はN-29°-Eである。

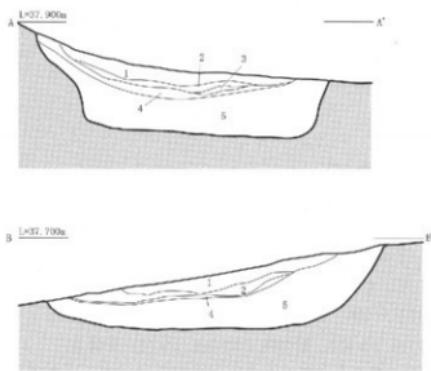
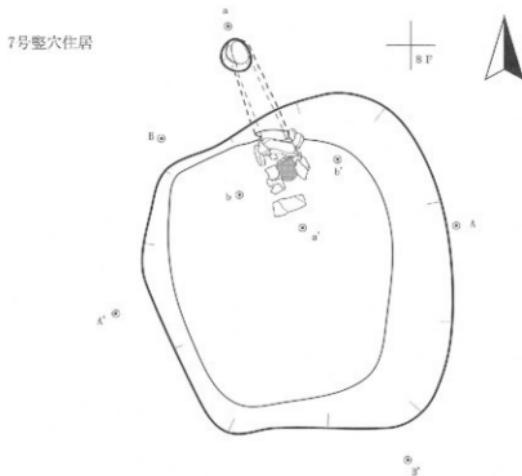
【柱間寸法】 梁方向で1.51m（5尺）、桁方向で2.73m（9尺）を測る。

【出土遺物・時期】 本遺構を構成する柱穴の1つであるpit5から、土師器長胴壺（153）の破片が出土している。しかし、出土位置が廻土上位であることと、本遺構の上位に遺物集中区が広がっていることから、流れ込みの可能性が考えられる。したがって、詳細な時期は不明である。

## 1号門跡（第21図、写真図版12）

【位置・検出状況】 調査区谷部、8 D・8 E・9 Dグリッドに位置する。検出面はIX層上面で、黒褐色の円形プランとして確認した。

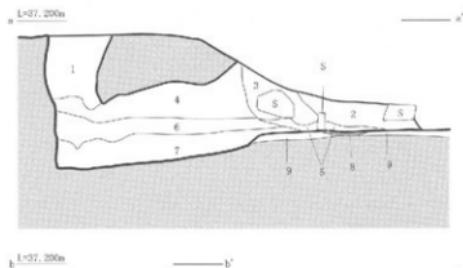
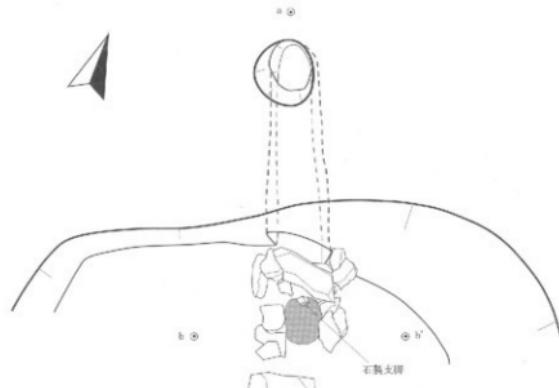
【規模】 径44×37cm、深さ80cmの柱穴（谷部小pit13）と、径53×45cm、深さ82cmの柱穴（谷



- (a, a', b, b')
- 1 10YR2/3淡褐色シルト 動物・しまり黄土 塗化物約1%
  - 2 10YR2/2淡褐色シルト 動物中・しまりやや暗 塗化物約3%
  - 3 10YR2/3シルト 基底・しまりやや暗 塗化物約3%
  - 4 10YR2/1灰色シルト 基底・しまり黄土 塗化物小ブロックを多く含む(30%)
  - 5 壁に住居柱上と判明した点、埋土の記載を多く。基底色～褐色シルトを主体とするもの

0 1:100 2m

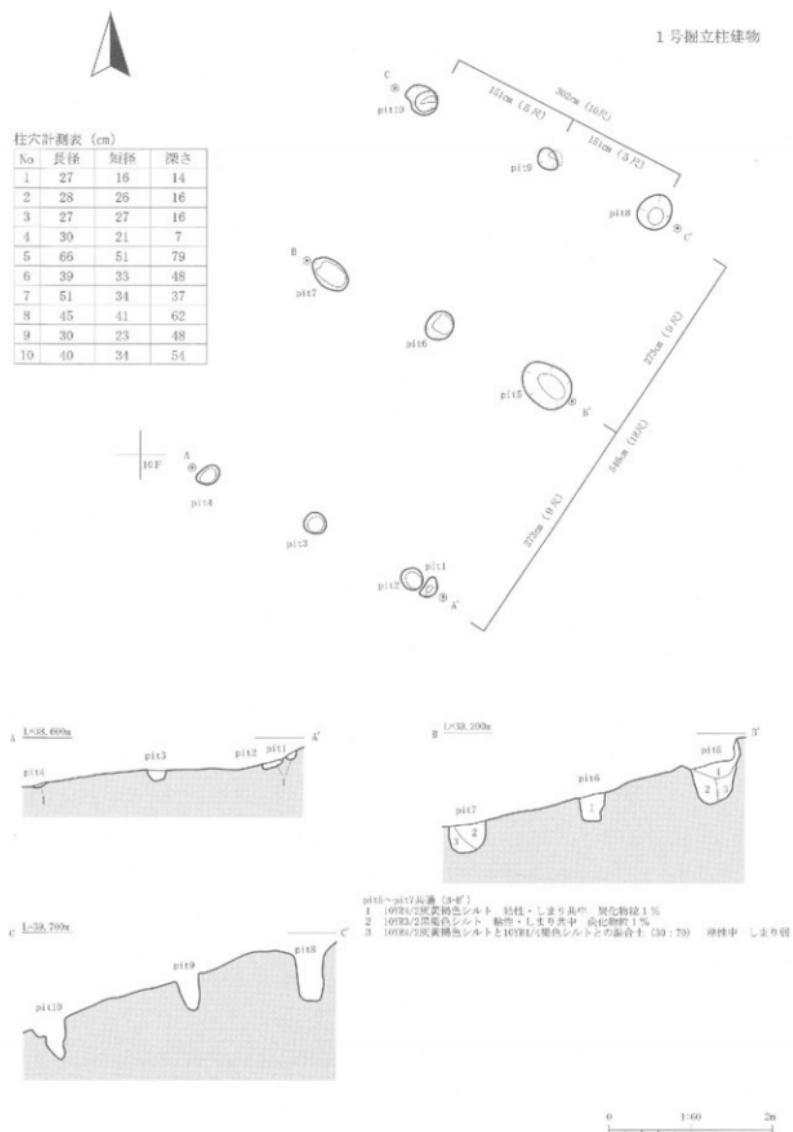
第18図 7号竪穴住居 (1)



- カマツ (a-a', b-b')
- 1 19TK4/2にらら・黄褐色シルト 粘性・しまり良やや硬・炭化物粒1%未満
  - 2 19TK4/2灰褐色シルト 粘性・しまり良や硬・炭化物粒1%未満
  - 3 19TK4/4褐色シルト 粘性・しまり良や硬・炭化物粒1%未満
  - 4 19TK4/4褐色シルト 粘性・しまり良や硬・炭化物粒1%未満
  - 5 19TK4/1黑色シルト 粘性・しまり良・炭化物粒2%
  - 6 19TK4/1こぶら・黄褐色シルト 粘性・しまり良やや硬・炭化物粒1%未満
  - 7 2,573/1黒褐色シルト 粘性・しまり良やや硬・炭化物粒1%未満
  - 8 3TK4/8灰褐色シルト (砂土) 黏性弱・しまり強・ササ土質が被膜
  - 9 19TK6/3にらら・黄褐色砂質シルトと19TK7/3にらら・黄褐色砂質シルトとの混合土 粘性弱・しまり中 (弱り度)

0 1:50 1m

第19図 7号竪穴住居 (2)



第20図 1号掘立柱建物

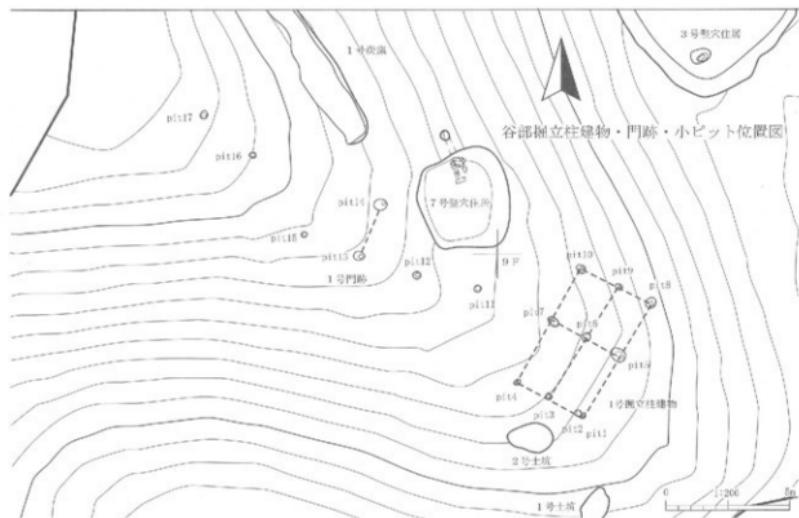
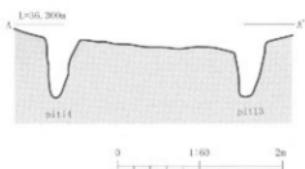


1号門跡柱穴計測表 (cm)

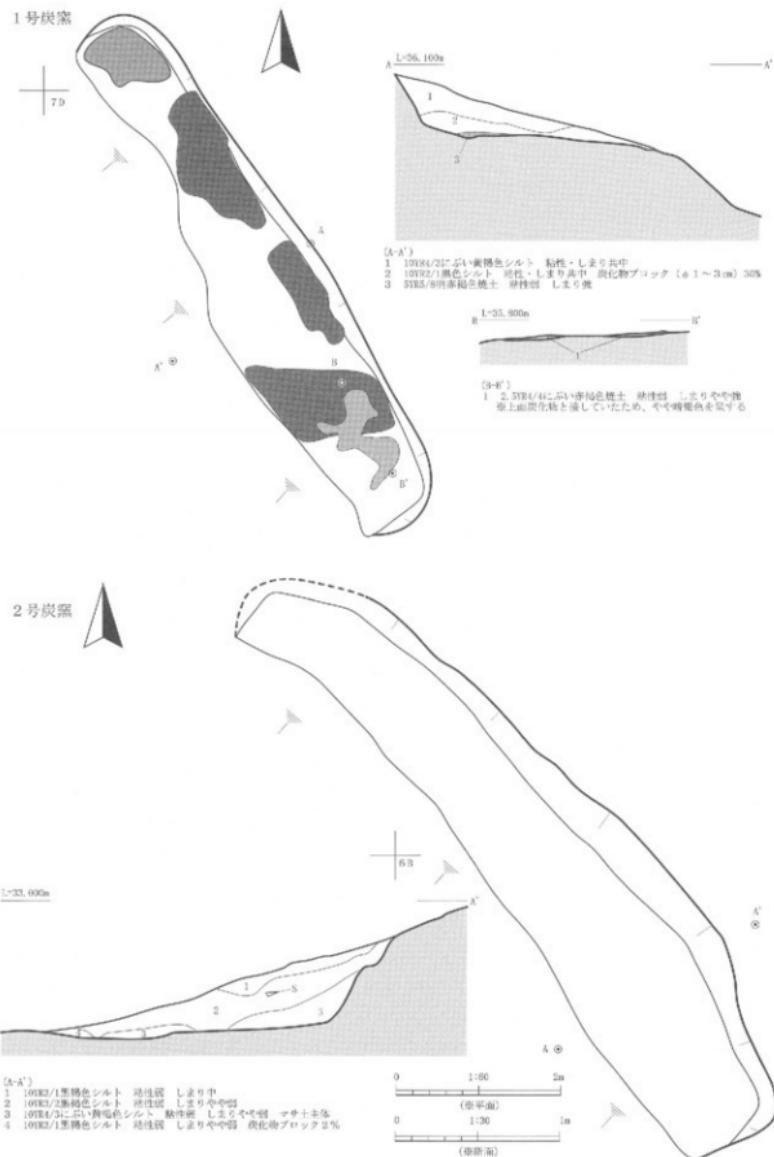
No	長径	短径	深さ
13	63	45	82
14	44	33	80

谷部小ピット計測表 (cm)

No	長径	短径	深さ
17	36	29	23
16	27	24	27
15	25	23	34
12	33	31	30
11	30	28	42



第21図 1号門跡、谷部小ピット



第22図 1・2号炭窯

部小pit14) で構成される。柱穴間の距離は2.3mを測り、軸方向はN-22°-Eである。

【性格】 1号掘立柱建物跡から北西方向に8.5mの場所に位置し、軸方向も1号掘立柱建物跡の建物方位とはほぼ一致することから、1号掘立柱建物跡に付随する、門のような性格を持った遺構であると想定される。

【遺物】 出土遺物なし。時期は不明である。

(鈴木)

## 炭窯

### 1号炭窯 (第22図、写真図版12)

【位置・検出状況】 7Dグリッドに位置し、東尾根部の斜面裾から谷部にかけて位置する。検出層位は1層直下のマサ土層上面で、にぶい黄褐色シルトの広がりとして確認された。

【規模・形状】 平面形は7.2×<1.57>mの長方形を呈する。長軸方向はN-32°-Wで、等高線と平行する。壁高の残存値は最大で38.4cmを測る。斜面地を削平して構築されており、南西側は崩落のため残存しない。

【埋土】 2層からなり、上位にはにぶい黄褐色シルト、下位には炭化物ブロックを30%程度含む黒色シルトが堆積する。底面には炭化材細片の薄層が広がっており、裂炭によって得られた木炭の残りである可能性が考えられる。底面は被熱により局所的に淡く赤変している。なお、底面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定をしている（分析・鑑定の項参照）。炭化材は肉眼観察の結果、センノキであるとの鑑定結果を得ている。

### 遺物 (第40図、写真図版24)

【土師器・須恵器】 土師器が5点、須恵器が1点出土している。いずれも埋土からの出土である。本地点は斜面上位からの廃土・整地層が形成されており、古代の土器片が比較的多く出土する。このため、本遺構埋土から出土した遺物も、本来廃土整地層に含まれていた遺物である可能性が高い。

時期 遺物による時期の検討は困難であるが、底面出土炭化材の年代測定結果から13世紀代の可能性を持つと推定される。

### 2号炭窯 (第22図、写真図版12)

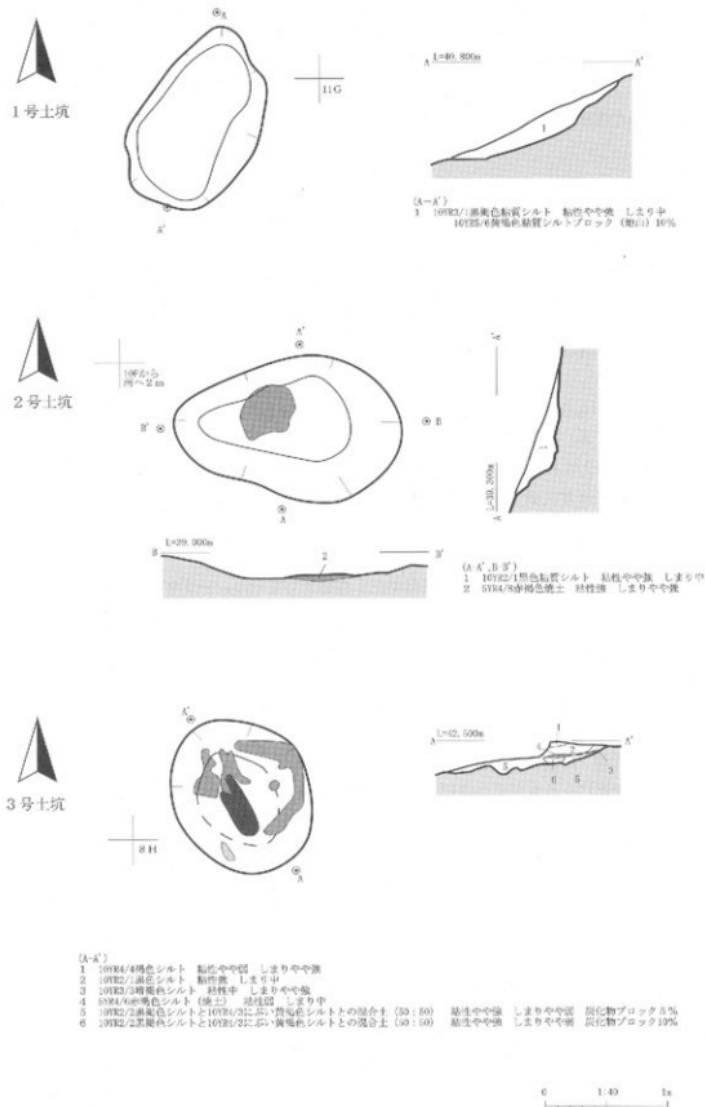
【位置・検出状況】 5Aグリッドに位置し、東尾根部の斜面裾から谷部にかけて位置する。検出層位は1層直下のマサ土層上面で、黒褐色シルトの広がりとして確認された。

【規模・形状】 平面形は8.97×<2.00>mの長方形を呈する。長軸方向はN-41°-Wで、等高線と平行する。壁高の残存値は最大で63.9cmを測る。斜面地を削平して構築されており、南西側は崩落のため残存しない。

【埋土】 4層からなり、上位は黒褐色シルト、下位にはにぶい黄褐色シルトが堆積する。第4層は炭化物ブロックを2%程度含む。底面には炭化材細片の薄層が広がっており、裂炭によって得られた木炭の残りである可能性が考えられる。炭化材は肉眼観察の結果、イタヤカエデとの鑑定結果を得ている。床面は被熱により局所的に淡く赤変している。

### 遺物 (第41図、写真図版24)

【土師器】 8点出土している。いずれも埋土からの出土である。本地点は斜面上位に遺物集中区2が形成されており、古代の土器片が比較的まとまって出土する。このため、本遺構埋土から出土した遺物も、本来遺物集中区に帰属する遺物である可能性が高い。



第23図 1～3号土坑

**時期** 遺物による時期の検討は困難であるが、近接する1号炭窯の底面出土炭化材の年代測定結果が13世紀代であることから、本遺構もこれと同時期の可能性がある。

(丸山)

#### 1号土坑（第23図、写真図版12）

**[位置・検出状況]** 調査区谷部、10F～11Fグリッドに位置する。検出面はIX層上面で、暗褐色の楕円形プランとして確認した。

**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $1.54 \times 0.97\text{m}$ の楕円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは最深部で21cmを測る。

**[埋土]** 粘性のやや強い黒褐色シルトの単層である。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。

#### 2号土坑（第23図、写真図版13）

**[位置・検出状況]** 調査区谷部、10Fグリッドに位置する。検出面はIX層上面で、黒褐色の楕円形プランとして確認した。

**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $1.87 \times 1.02\text{m}$ の楕円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは最深部で36cmを測る。

**[埋土]** 粘性のやや強い黒色シルト主体で構成され、底面には薄く焼土が存在する。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。

#### 3号土坑（第23図、写真図版13）

**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、7Hグリッドに位置する。2号竪穴住居の埋土掘削時に焼土粒と炭化物粒を伴う黒色～黒褐色の楕円形プランとして確認したものである。南半部は2号竪穴住居と重複し、これを切る。

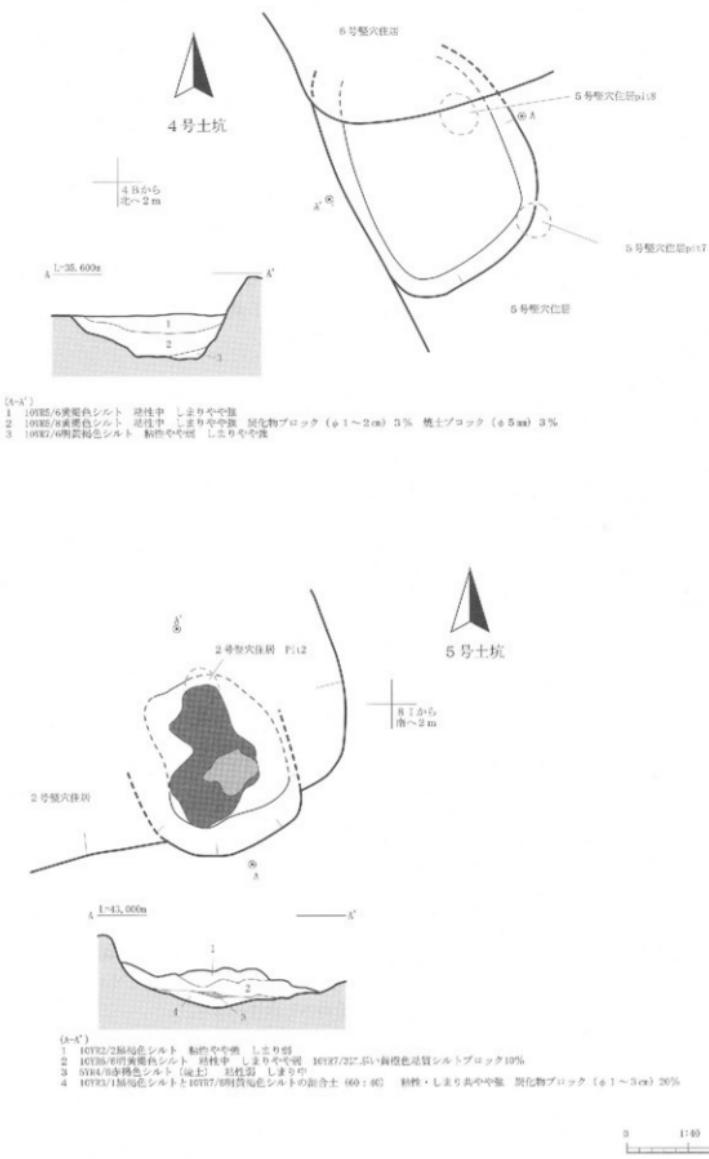
**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $1.33 \times 1.14\text{m}$ の円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは最深部で17cmを測る。

**[埋土]** 6層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。南半部の埋土上位は、2号竪穴住居の精査の際に消滅してしまった。焼土層（第4層）以下は炭化物をやや多く含む堆積である。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 埋土から出土した種子の炭化種子同定を実施している（分析・鑑定の項参照）。その結果、オオムギ・イネなどが検出されている。時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構で、炭窯に類似した性格を持つ可能性がある。

#### 4号土坑（第24図、写真図版13）

**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、3Bグリッドに位置する。検出面は5号竪穴住居の第18層（貼床）上面で、貼床とは様相の異なる黄褐色のプランとして確認した。重複関係は、5号竪穴住居と6号竪穴住居に切られている。



第24図 4・5号土坑

**[規模・形状]** 平面形は開口部径の残存値で $\varnothing 1.41 \times 1.52\text{m}$ の楕円形を呈するものと推定される。長軸の北半部は6号竪穴住居に切られているため、消滅している。断面形は椭形を呈し、深さは最深部で35cmを測る。

**[埋土]** 3層からなり、黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 土師器長胴壺（146）が出土している。出土遺物から、古代に属する遺構と考えられる。

#### 5号土坑（第24図、写真図版13）

**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、8Hグリッドに位置する。2号竪穴住居の壙上掘削時に焼土粒と炭化物粒を伴う黒色～黒褐色の楕円形プランとして確認したものである。南半部は2号竪穴住居と重複し、これを切る。

**[規模・形状]** 平面形は $\varnothing 1.44 \times (1.31)\text{m}$ で、楕円形を呈するものと推定される。長径は残存値、短径は推定値である。深さは最深部で55cm程度を測ると思われる。

**[埋土]** 残存している埋土は4層に細分される。下位の第3層は焼土、第4層は炭化物を多く含む埋土である。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 土師器壺（147）と土師器長胴壺（148・149）が出土している。古代に属する遺構で、炭窯に類似した性格を持つ可能性がある。

#### 6号土坑（第25図、写真図版14）

**[位置・検出状況]** 調査区谷部、8Cグリッドに位置する。検出面はIX層上面で、黒褐色の円形プランとして確認した。

**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $\varnothing 1.40 \times 1.23\text{m}$ のほぼ円形を呈する。断面形は皿形を呈するが、底面は根摺乱により凹凸が著しい。深さは最深部で28cmを測る。

**[埋土]** 黒褐色と灰黄褐色の混合土である。炭化物が少量混じる。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。

#### 7号土坑（第25図、写真図版14）

**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、4Cグリッドに位置する。4号竪穴住居と重複し、これにより切られる。4号竪穴住居埋土掘削前の床面Q4で、黒褐色の円形プランとして確認した。

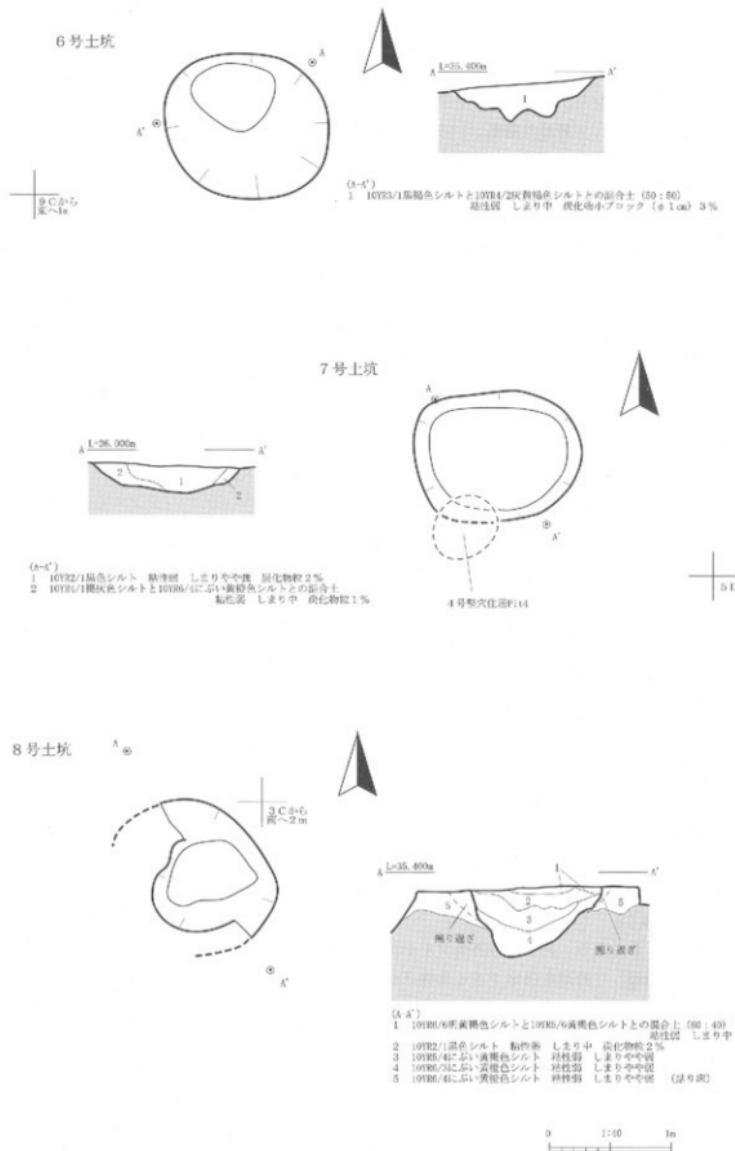
**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $\varnothing 1.38 \times 1.06\text{m}$ の楕円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは最深部で30cmを測る。

**[埋土]** 2層からなり、第1層の黒色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 時期を決定できる遺物は出土していないが、壙上の状態から古代に属する遺構と推測される。

#### 8号土坑（第25図、写真図版14）

**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、3Bグリッドに位置する。検出面は5号竪穴住居の第18層貼上面で、黄褐色シルトの周りを黑色シルトが包む円形プランとして確認した。5号竪穴住居の貼床を掘り込んで構築されていることから、本遺構が新しい。



第25図 6~8号土坑

**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $1.34 \times (1.09)$ mの楕円形を呈する。短径は推定値である。断面形は椀形を呈し、深さは最深部で55cmを測る。

**[埋土]** 上位は黄褐色シルトと黒色シルト、下位はにぶい黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

**[出土遺物・時期]** 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。

#### 9号土坑（第26図、写真図版14）

**[位置・検出状況]** 調査区谷部、8Bグリッドに位置する。検出面はIX層上面で黒褐色と黄褐色がマーブル状に混じる円形プランとして確認した。

**[規模・形状]** 平面形は開口部径 $1.60 \times 1.43$ mのほぼ円形を呈する。断面形は椀形を呈し、深さは最深部で69cmを測る。

**[埋土]** 黒色シルトと黄褐色砂質シルトの互層堆積である。

**[出土遺物・時期]** 埋土中から土師器（150）が出土している。器種は鉢と思われる。出土遺物から、古代に属する遺構と考えられる。

#### 10号土坑（第26図、写真図版15）

**[位置・検出状況]** 11Bグリッドに位置する。検出層位はI層直下のマサ土層上面で、褐色シルトの広がりとして確認された。

**[規模・形状]** 平面形は $2.79 \times (4.39)$ mの不整楕円形を呈する。深さは南東側の残存値で最大2.53mを測る。斜面地を削平して構築されており、南西側は残存しない。

**[埋土]** 5層からなり、上位は浅黄褐色シルト、中位は褐色シルト、下位にはマサ土を主体とするにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。

**時期** 遺物が出土していない為、時期など詳細については不明である。

#### 1号炉跡（第27図、写真図版15）

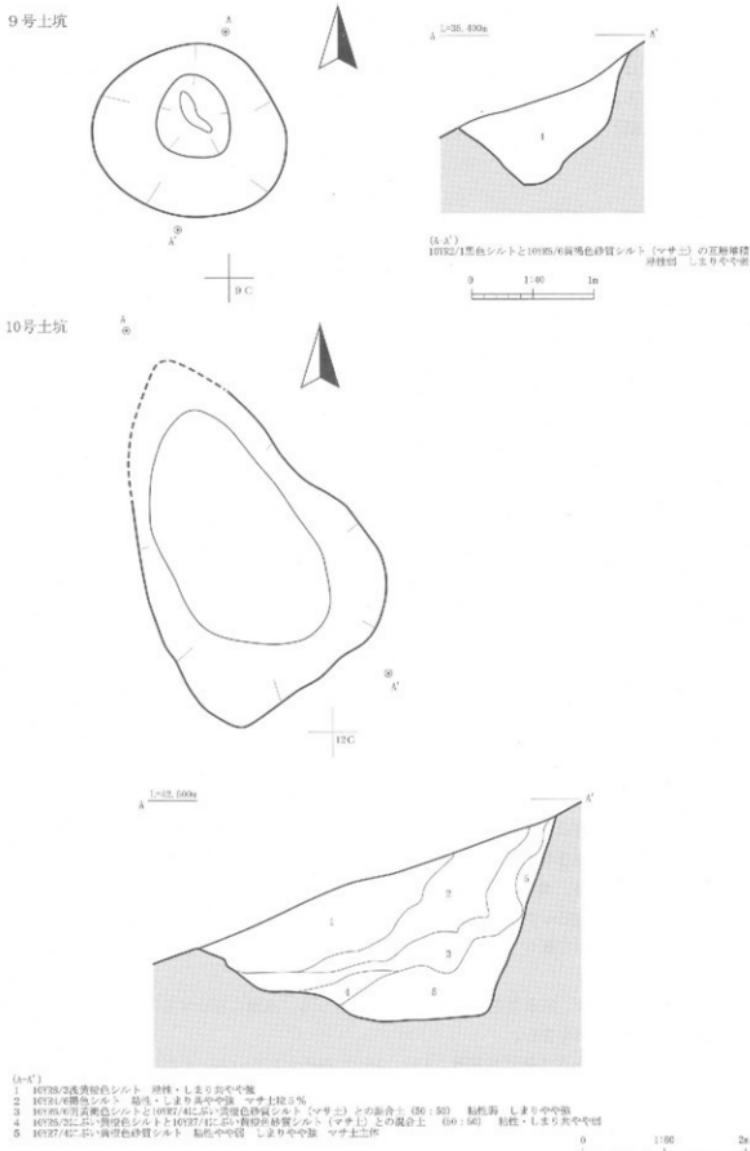
**[位置・検出状況]** 調査区東尾根部、5Dグリッドに位置する。検出面はI層直下のマサ土上面である。焼上粒と炭化物粒を少量含む灰黄褐色の瓢箪形プランとして確認した。

**[規模・形状]** 平面形は $1.75 \times 0.76$ mのやや歪な瓢箪形を呈する。遺構の東半部と西半部では大きく様相が異なる。遺構精査を進めたところ、遺構の東側はやや窪んでおり、底面から壁面にかけてのはば全面が被熱している。窪み部分の遺構表面からの深さは、最深部で14cmを測る。被熱している範囲の規模は $0.92 \times 0.86$ mで、平面形は円形を呈する。一方、西側は検出段階ではマウンド状に盛り上がっており、底面まで掘り下げても被熱した痕跡は見られなかった。検出面から底面までの厚さは23cmを測る。

**[埋土]** 5層からなり、灰黄褐色シルト主体で構成される。東側に存在する第5層は焼土である。埋土のほぼ全体に炭化物を含む。

**[出土遺物]** 埋土中から土師器長胴甌（151、152）が出土している。また、埋土から出土した種子の炭化種子同定を実施している（分析・鑑定の項参照）。その結果、オオムギ・ミズキと判明した。

**[時期・性格]** 出土遺物から古代に属する遺構と考えられる。詳細な性格は不明である。



第26図 9・10号土坑

## 2号炉跡（第27図、写真図版15）

【位置・検出状況】 調査区西尾根部、13E～14Eグリッドに位置する。検出面はI層直下のマサ土上面で、炭化物を多く含む暗褐色のプランとして確認した。

【規模・形状】 平面形は1.17×0.79mの楕円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは最深部で26cmを測る。

【埋土】 3層からなり、灰黄褐色シルト～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。底面と壁面は被熱しており、埋土下位～底面には炭化物が多く含まれる。

【出土遺物】 出土遺物なし。

【時期・性格】 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。炉跡の詳細な性格は不明である。

## 3号炉跡（第27図、写真図版15）

【位置・検出状況】 調査区東尾根部、6Dグリッドに位置する。検出面はI層直下のマサ土上面で、部分的に炭化物が混入する暗褐色の円形プランとして確認した。

【規模・形状】 平面形は0.90×0.88mの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で20cmを測る。

【埋土】 4層からなり、黒色シルト主体で構成される。主に壁面が被熱しており、炭化物は全体に少量混入する。

【出土遺物】 出土遺物なし。

【時期・性格】 時期を決定できる遺物は出土していないが、埋土の状態から古代に属する遺構と推測される。炉跡の詳細な性格は不明である。

(鈴木)

## 焼土遺構

## 1号焼土遺構（第28図、写真図版16）

【位置・検出状況】 III Cグリッドに位置し、東尾根部先端付近に位置する。5号竪穴住居の埋土掘削時に北側ベルトに現れた焼土プランとして確認した。

【重複】 5号竪穴住居の北半部、埋土中位に位置する。5号竪穴住居床面より浮いており、これより新しい。

【規模・形状】 平面形は20.6×11.7cmの不整な楕円形を呈する。断面形は皿状で、層厚は2.5cmを測る。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【時期・性格】 出土遺物はないが、検出地点から古代であると推測される。

## 遺物集中区

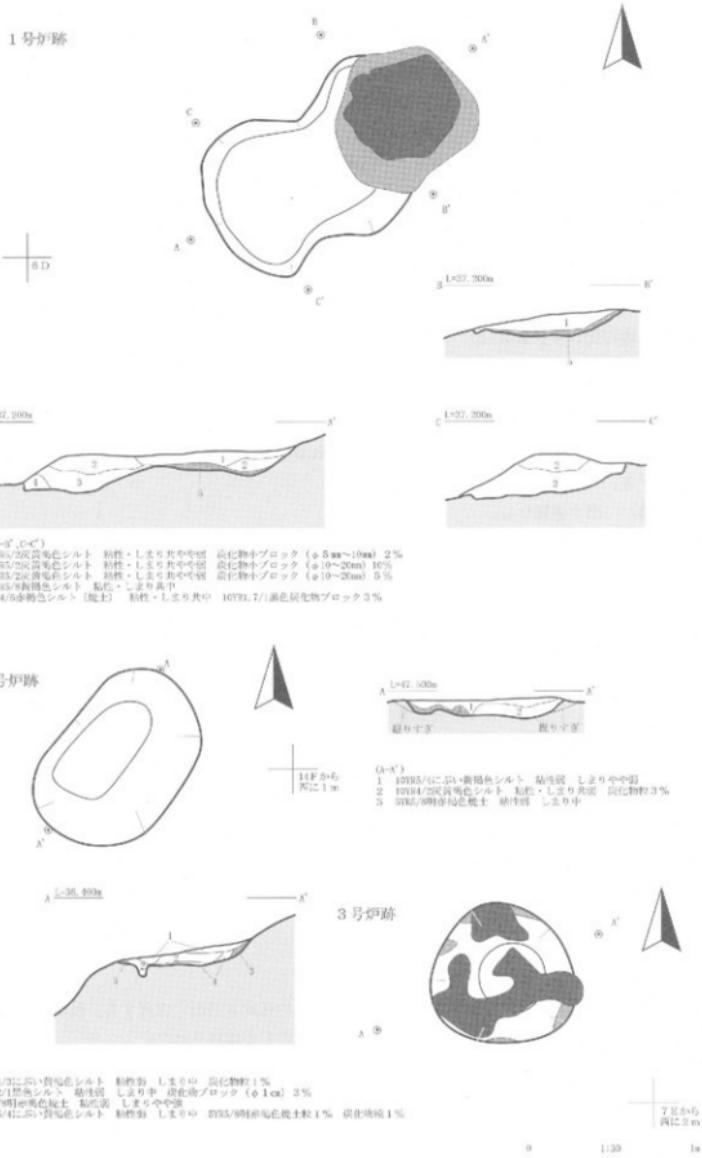
## 遺物集中区1（第4図、写真図版16）

【位置・検出状況】 9 Gグリッドに位置し、東尾根裾の西向き斜面に位置する。検出層位はI層直下で、古代遺物を多く含むにぶい黄褐色シルトの広がりとして確認された。

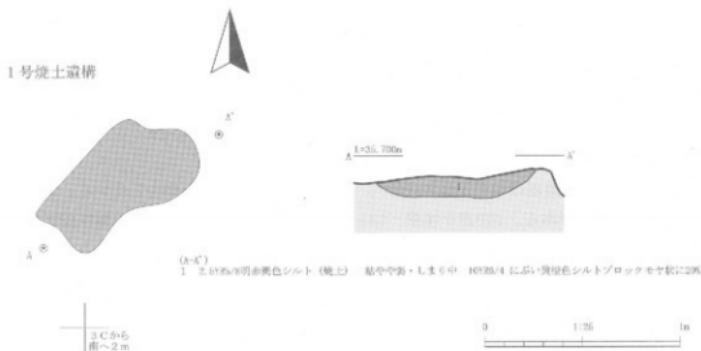
【重複】 西側で1号掘立柱建物と重複し、これによって切られる。

【規模・形状】 平面形は3.58×2.7mの不整な楕円形を呈する。断面形は皿状で、層厚は最大で41.3cmを測る。

【埋土】 3層からなり、炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色～褐色シルト主体で構成される。堆積



第27図 1～3号炉跡



第28図 1号焼土遺構

状況から斜面上位の遺構構築時の廃土および使用時に廃棄された遺物が堆積したものと推測される。埋土中に古代の土器片を多量に含む。

遺物（第41・42図、写真図版25）

〔土師器・須恵器〕 上師器が15点、須恵器が1点出土している。

〔石器〕 1点出土している。

〔土製品〕 1点出土している。

時期 出土遺物から8世紀から9世紀代にかけて形成された廃土整地層と推測される。

#### 遺物集中区2（第4図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 5Bグリッドに位置し、東尾根裾の南西向き斜面に位置する。検出層位はI層直下で、古代遺物を多く含むにびい黄褐色シルトの広がりとして確認された。

〔重複〕 なし。

〔規模・形状〕 平面形は $6.79 \times 3.24\text{m}$ の不整な梢円形を呈する。断面形は皿状で、層厚は34cmを測る。

〔埋土〕 3層からなり、炭化物粒を少量含むにびい黄褐色～褐色シルト主体で構成される。堆積状況から斜面上位の遺構構築時の廃土および使用時に廃棄された遺物が堆積したものと推測される。埋土中に古代の土器片を多量に含む。

遺物（第42～46図、写真図版26～28）

〔土師器・須恵器〕 上師器が29点、須恵器が2点出土している。

〔土製品〕 1点出土している。

時期 出土遺物から8世紀から9世紀代にかけて形成された廃土整地層と推測される。

(丸山)

## 3 出 土 遺 物

今回の調査による出土遺物の内訳は、土師器・須恵器、土製品、石製品、鉄製品である。総量は大コンテナ(40×30×30cm)でおよそ8箱分である。以下、種類ごとに概観する。

## 1 土師器・須恵器(第29~46図、写真図版17~28)

本遺跡の土師器・須恵器は殆どが堅穴住居内、および遺物集中区から出土している。総量は大コンテナでおよそ5箱分である。190点を掲載・141点を図示した。これらは器種・製作技法などの特徴から概ね8世紀代から9世紀代にかけての特徴を持つ。以下、器種毎に特徴を述べる。

## 【土師器】

壺 68点が出土しており、38点を図示した。製作に際し、ロクロを使用するものと不使用のものが存在する。以下、製作技法、器形、器面調整の特徴が確認できるものを簡易的に以下のようにまとめた。なお、残存状態が不良のもの、器面摩耗の為、調整不明のものは①~⑥から除外している。

ロクロを使用するもの(1・21・22・24・47~50・65~68・72・96・106・127・160・162・171・172・188・190・191・200・220・223)

- ① 底部回転糸切りされたもので、再調整を持たないもの: 67・160・190
- ② 底部回転糸切りされたもので、底部縁辺と体部下半、あるいはいずれかに再調整を持つもの: 49・72・106・191・220・223
- ③ 底部静止糸切りされた後、縁辺へラケズリ再調整されたもので、体部はロクロナデ後、ヘラケズリ調整がなされるもの: 70

なお、これらはいずれも外面ロクロナデ調整、内面ミガキ調整後、黒色処理されるものである。

ロクロを使用しないもの(18~20・23・64・66・69・70・71・97~105・107・121~124・147・161・163~165・168~170・187・189・192~199・219・221・222)

- ④ 底部丸底~丸底風平底を呈し、体部の段を持たない。外側調整はナデ、ケズリ、ミガキ、内面はミガキ調整後、黒色処理される。: 69・97・98・101・107・121・168・169・193・195・197
- ⑤ 底部丸底風平底~平底を呈し、体部の段は不明瞭~微かに凹む程度。外側調整はナデ、ケズリ、ミガキ、内面はミガキ調整されたのち黒色処理されるものが多いが、非内黒の個体も存在する。: 64・99・187・189・194・219・221
- ⑥ 底部丸底を呈し、体部に段を持つもの。外側調整はミガキ、ナデ、ケズリで、内面はミガキ調整後、黒色処理される。: 20・69・102・170・192・196

高台付壺 2点出土しており、すべて図示した。25は高台壺脚部と見られる。ロクロを使用して製作されており、上面に静止イトキリによる切り離し痕跡が認められる。201は遺物集中区2から出土した。外側ロクロナデ、内面ミガキ、黒色処理される。底部高台は欠損しており、高台部形状および底部切り離し技法は不明である。

小形壺 4点が出土しており、すべて図示した。製作に際し、ロクロが使用されるものはない。器形の判明するものは73の1点のみで、口径11.0cm、底径6.7cm、器高10.1cmを測る。これらは外側ナデ、もしくはケズリ調整、内面ナデ、もしくはハケメ調整されている。

小形鉢 1点のみ出土しており、図示した。製作に際し、ロクロは使用されない。155は底部からやや外傾して立ち上がり、口縁部に至って短く内傾する器形を呈する。内外面共にナデ調整される。

壺 2点出土している。このうち1点を図示した。26は壺の口縁部片である。器形は体部から内

湾し、頸部で括れて口縁部が外傾する。154は体部小片である。いずれも外面調整はロクロナデ、内面はミガキ・黒色処理される。

**球胴壺** 4点出土しており、すべて図示した。全体の器形が判明するものはない。外面の調整にはハケメ、ナデ、一部ミガキ調整、内面の調整にはナデ、ハケメ調整などが見られる。底部は木葉痕が付く。

**甕** 93点が出士しており、78点を図示した。製作に際し、ロクロは使用されない。全体の器形の判明するものは少ない。頸部から口縁部にかけての形状は、①頸部で一旦括れて、その後外傾するもの（32・33・177・181・207・215）、②頸部で括れたのち、短く外傾・もしくは外反するもの（2・3・5・10・39・73・81・133・139）、③頸部の括れが弱く、ルーズに外反するもの（76・112・134・156・229・230）などがある。器面調整はそれぞれ①外面ケズリ・ハケメ状のナデ、内面はナデ、ハケメ調整される。②外面ナデ・ケズリ、ハケメ、内面ナデ・ハケメ調整される。③外面ナデ、ケズリ、ナデ+一部ミガキ、内面ナデ、ハケメなどがあり、口縁部形状と器面調整の間に特に関連性は認められない。

**鍋** 2点が出士しており、すべて図示した。202・203は遺物集中区2から出土した。全体の器形は不明であるが、破片の傾きから判断して体部が緩やかに大きく開いて口縁部に至る器形を呈するものと思われる。外面ケズリ、内面ハケメ調整される。

#### [須恵器]

**壺** 1点のみ出土しており、図示した。200は遺物集中区2から出土した。全体の器形は不明であるが、底径4.9cmを測る。内外面共にロクロナデ調整され、底部は回転糸切りされる。

**長頸瓶** 1点のみ出土しており、図示した。216は遺物集中区2から出土した、長頸瓶の頭～口縁部片である。

**甕壺類** 11点出土しており、9点を図示した。全体の器形、口縁部形状が不明のため、本遺跡では須恵器の壺と長頸瓶、大甕以外のものを甕壺類と一括している。

**大甕** 1点のみ出土しており、図示した。184は遺物集中区1から出土した破片で、外面平行文タタキ、内面ナデ調整される。

#### 2 土製品（第33・42・45図、写真図版19・26・28）

3点を掲載、すべて図示した。46は2号竪穴住居から出土した。土製支脚と考えられる土製品で、内部が中空である。186は遺物集中区1から出土した土製紡錘車、218は遺物集中区2から出土した土製紡錘車である。いずれも器面はミガキ調整される。

#### 3 石器・石製品（第29・31～33・35・37・38・40・42・45図、写真図版17～19・21～24・26・27）

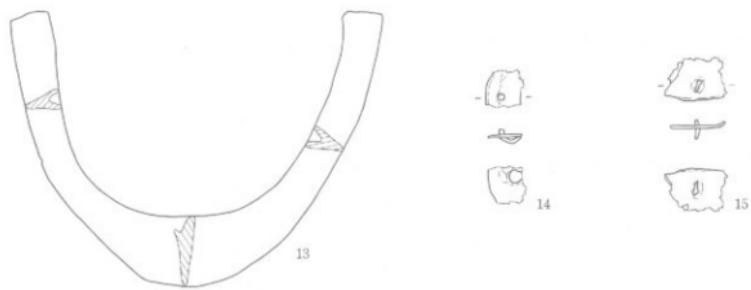
石器は23点を掲載、すべて図示した。内訳は磨石13点、砥石6点、敲磨器1点、磨製石斧1点、円鏃1点、支脚1点である。磨石の素材は花崗岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、砂岩などが多く、流紋岩は1点のみである。いっぽう砥石の素材はすべて流紋岩で、器種による素材の選択がなされている。本遺跡で検出された砥石は大形品が多く、最大で重さ6kgを超えるものもある。砥石表面には多数の条痕が付く。また、大形の2点（118・119）には黒色の炭化付着物が表面に付着している。

#### 4 鉄製品（第30・33・35・38・40・46図、写真図版17・19・21・23・24・28）

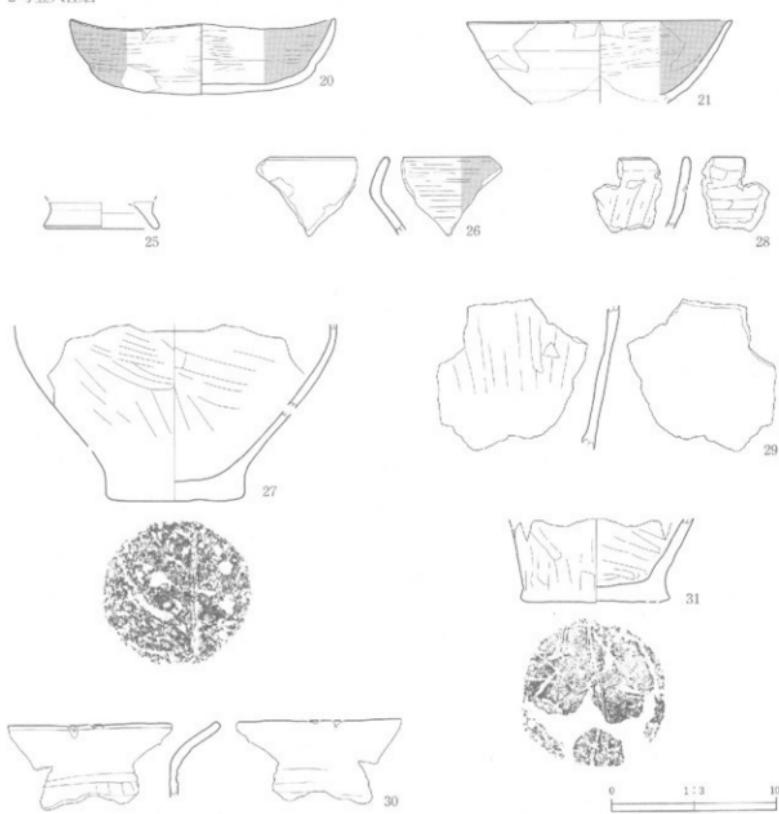
鉄製品は12点が出士しており、すべて図示した。232を除き、すべて竪穴住居内から出土している。13は1号竪穴住居床面から出土した鋤先である。14・15は器種不明の鉄製品であるが、表面に木質と釘が僅かに残存することから手鎌などの可能性が考えられる。60は3号竪穴住居床面から出土した鎌である。94・95は4号竪穴住居埋土中～下位から出土した台状双脚足金具である。232は谷部南端から出土した環状を呈する鉄製品で、刀の鞘口金具（筒金？）である可能性がある。



第29図 1号竪穴住居出土遺物（1）



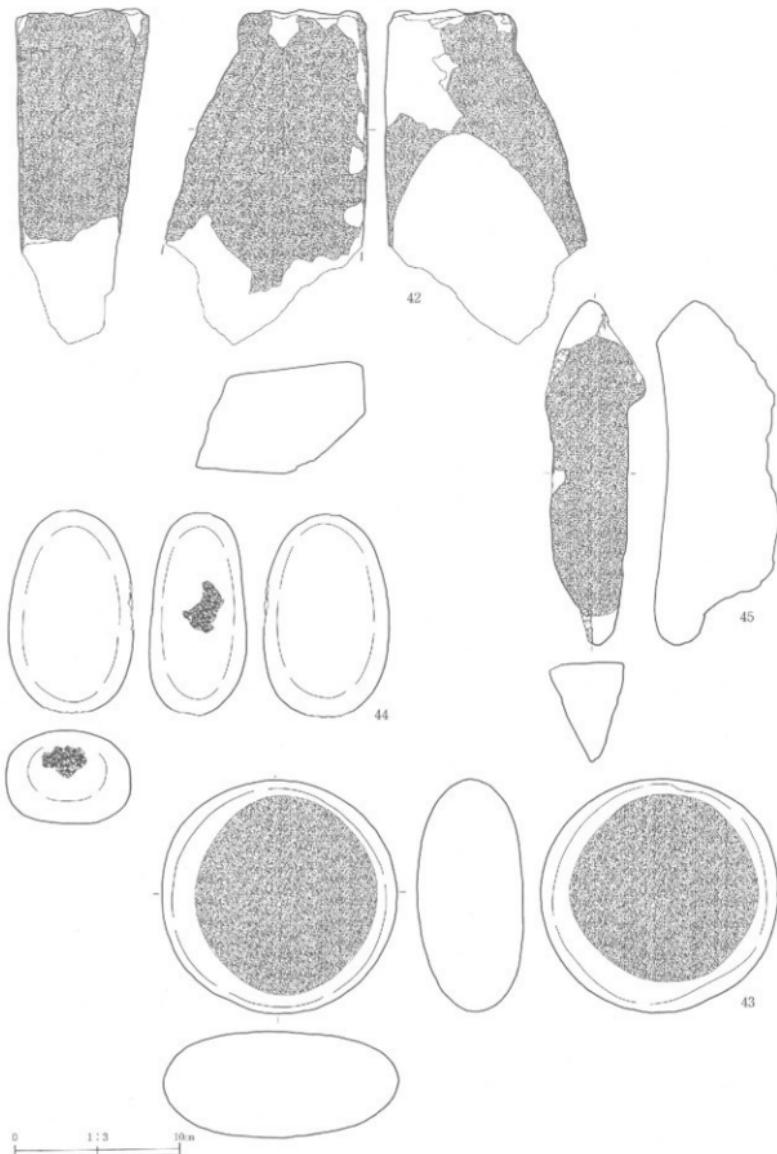
2号竪穴住居



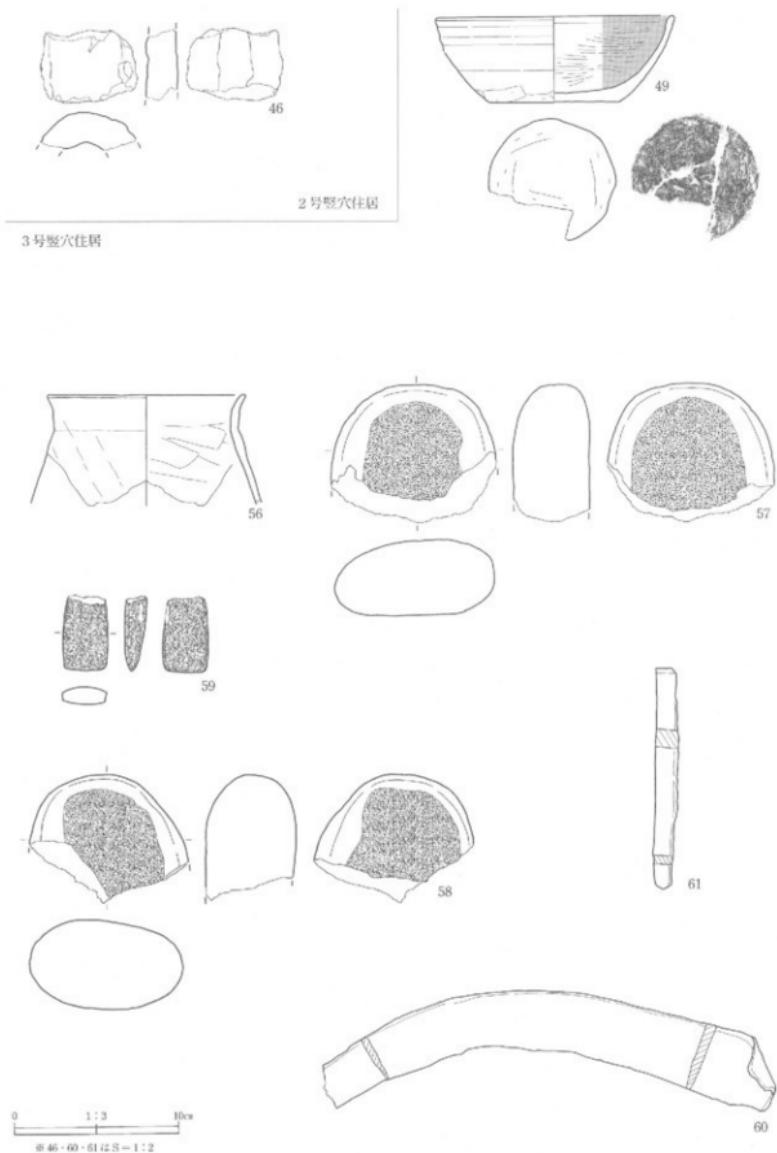
第30図 1号竪穴住居出土遺物 (2)、2号竪穴住居出土遺物 (1)



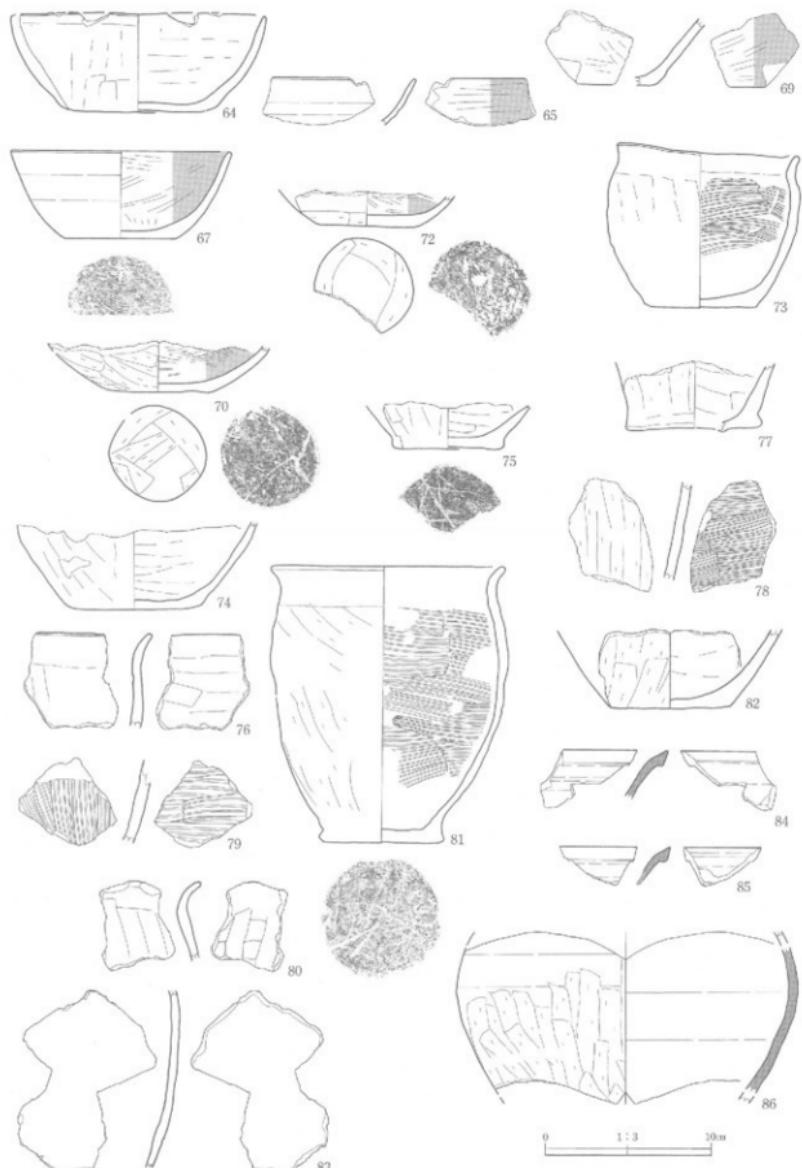
第31図 2号竪穴住居出土遺物 (2)



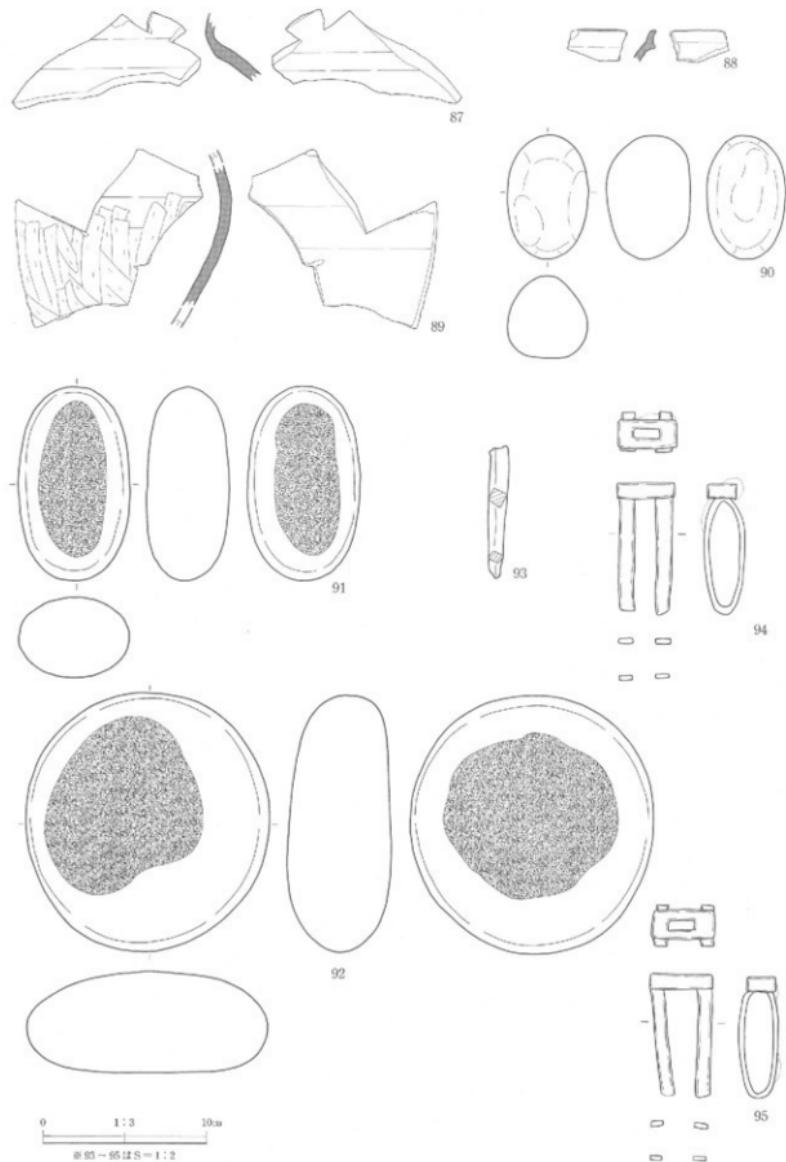
第32図 2号竖穴住居出土遺物 (3)



第33図 2号竪穴住居出土遺物(4)、3号竪穴住居出土遺物



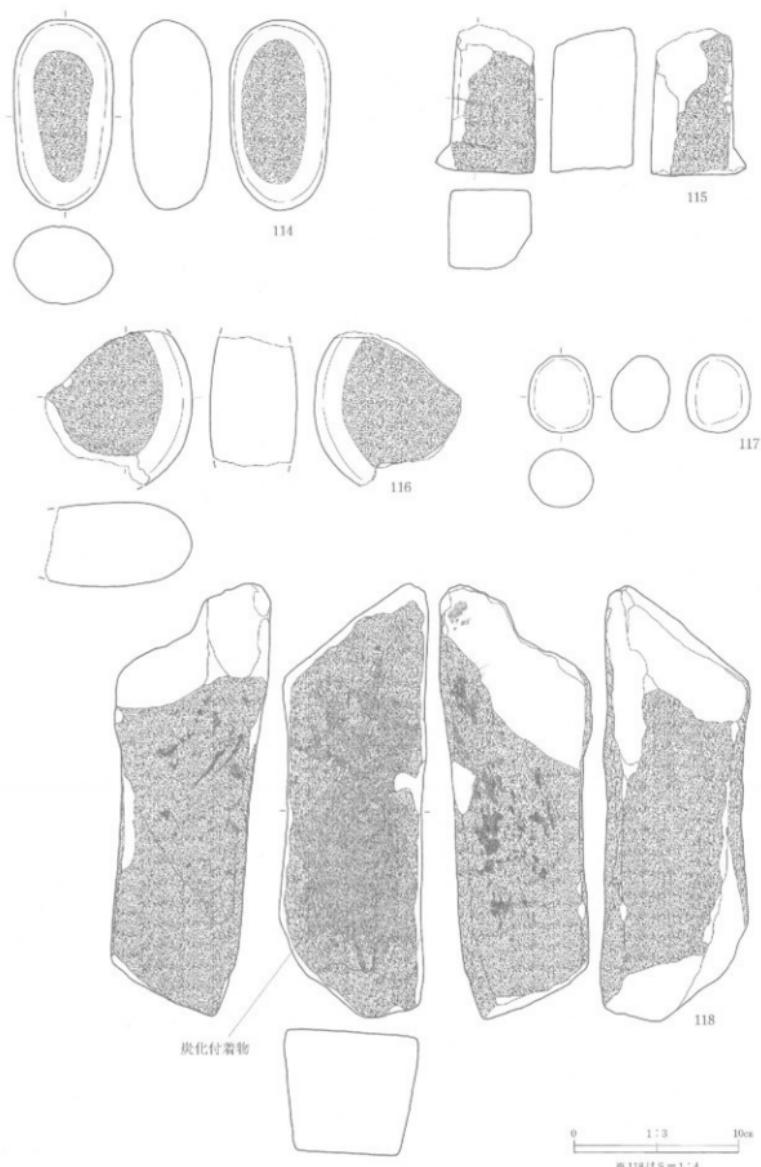
第34図 4号竖穴住居出土遺物 (1)



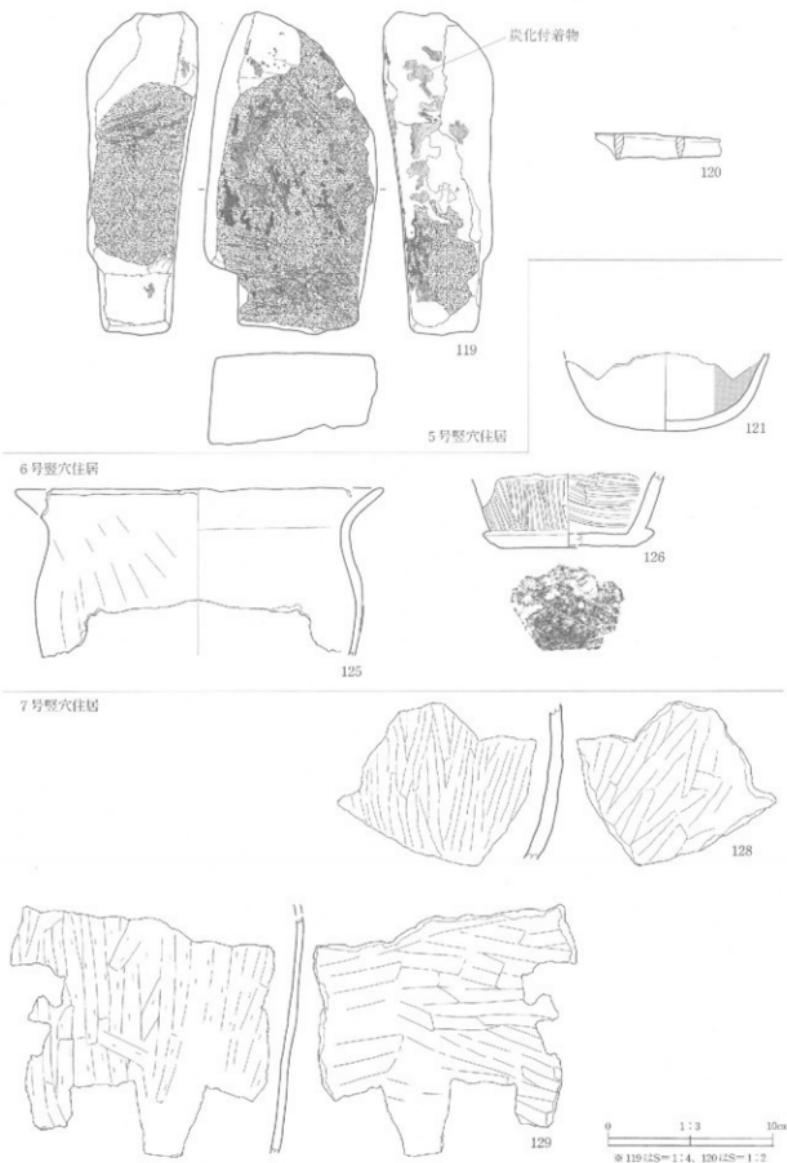
第35図 4号竪穴住居出土遺物 (2)



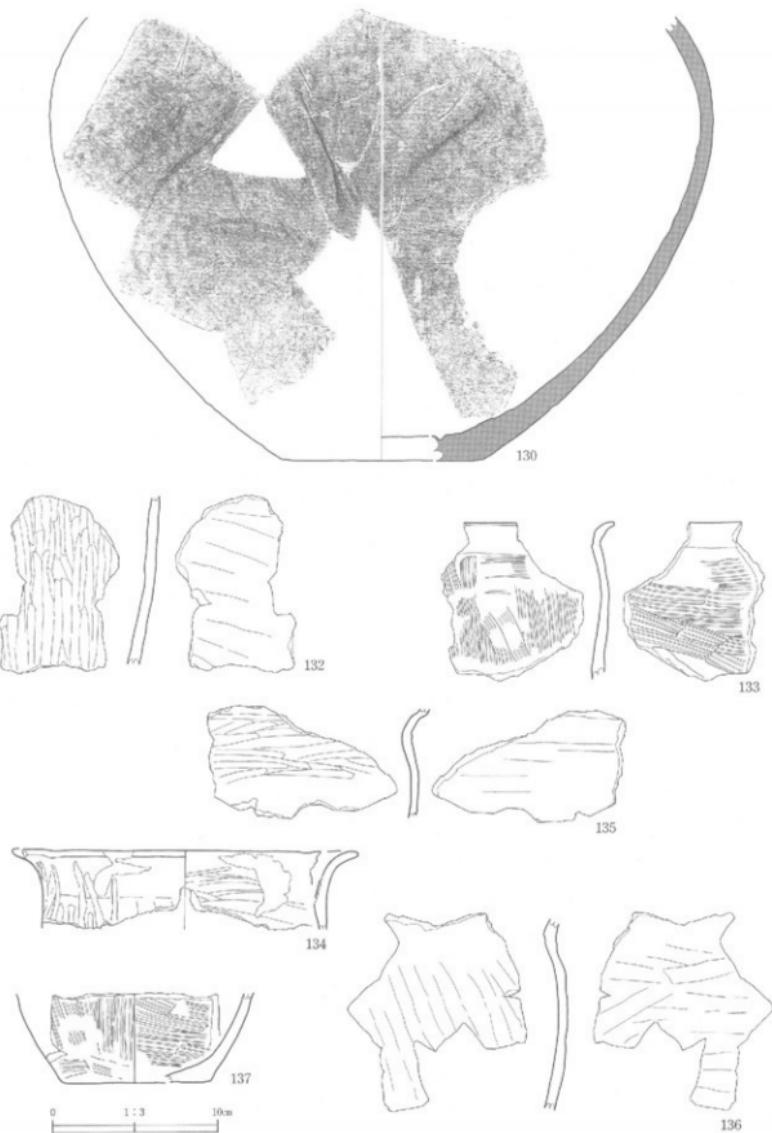
第36図 5号竪穴住居出土遺物（1）



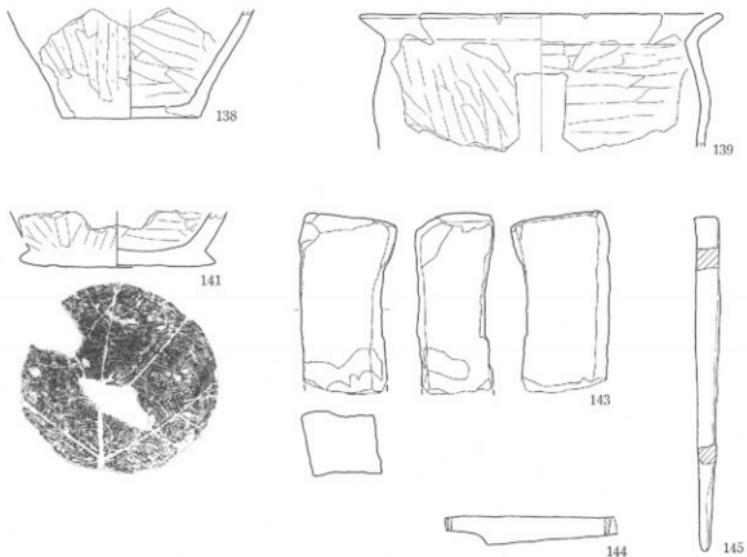
第37図 5号竪穴住居出土遺物（2）



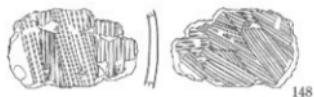
第38図 5号竪穴住居出土遺物(3)、6・7号竪穴住居出土遺物(1)



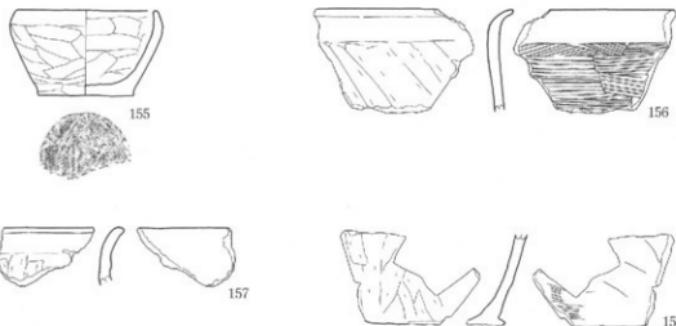
第39図 7号竪穴住居出土遺物（2）



7号竪穴住居



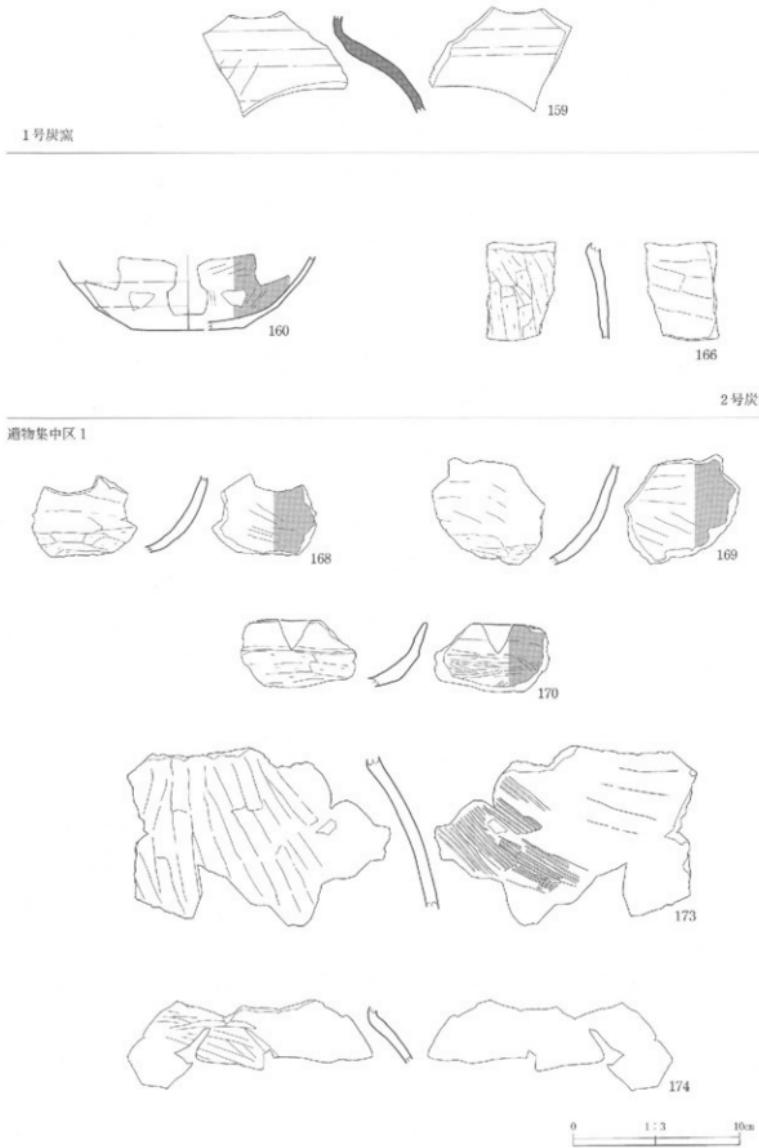
5号土坑



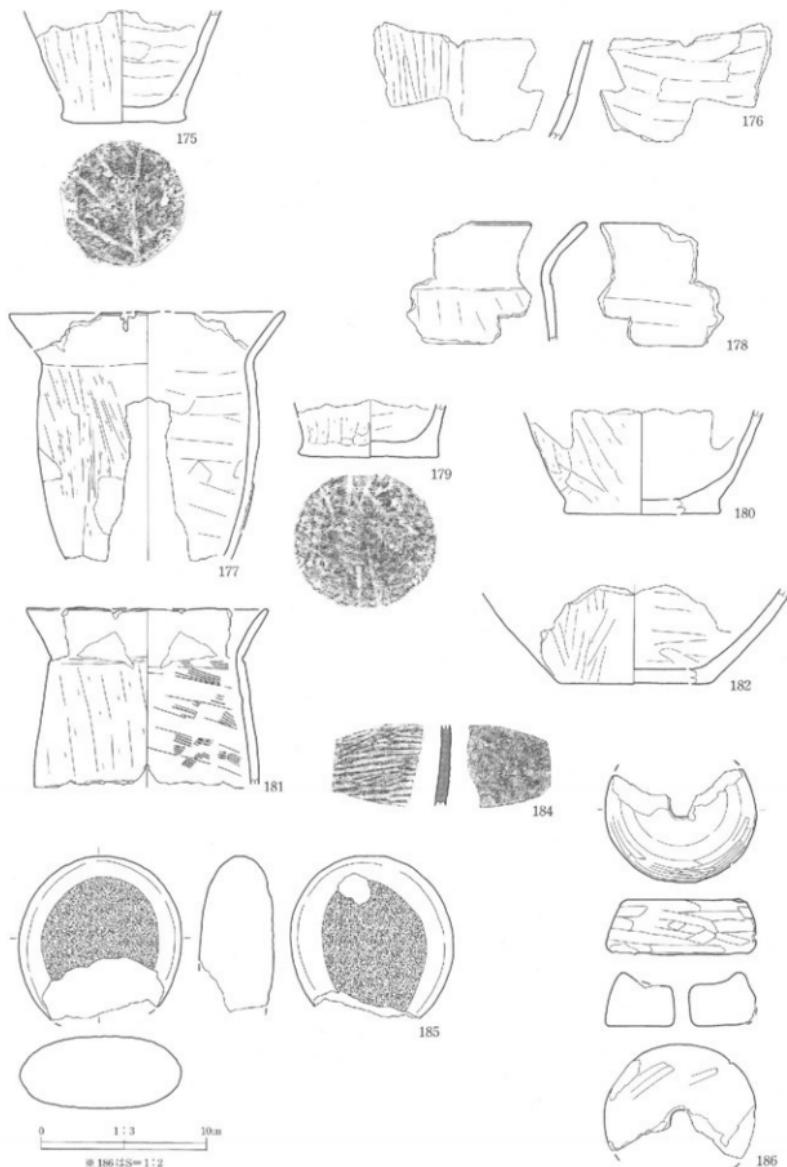
1号炭窯



第40図 7号竪穴住居出土遺物(3)、5号土坑・1号炭窯出土遺物

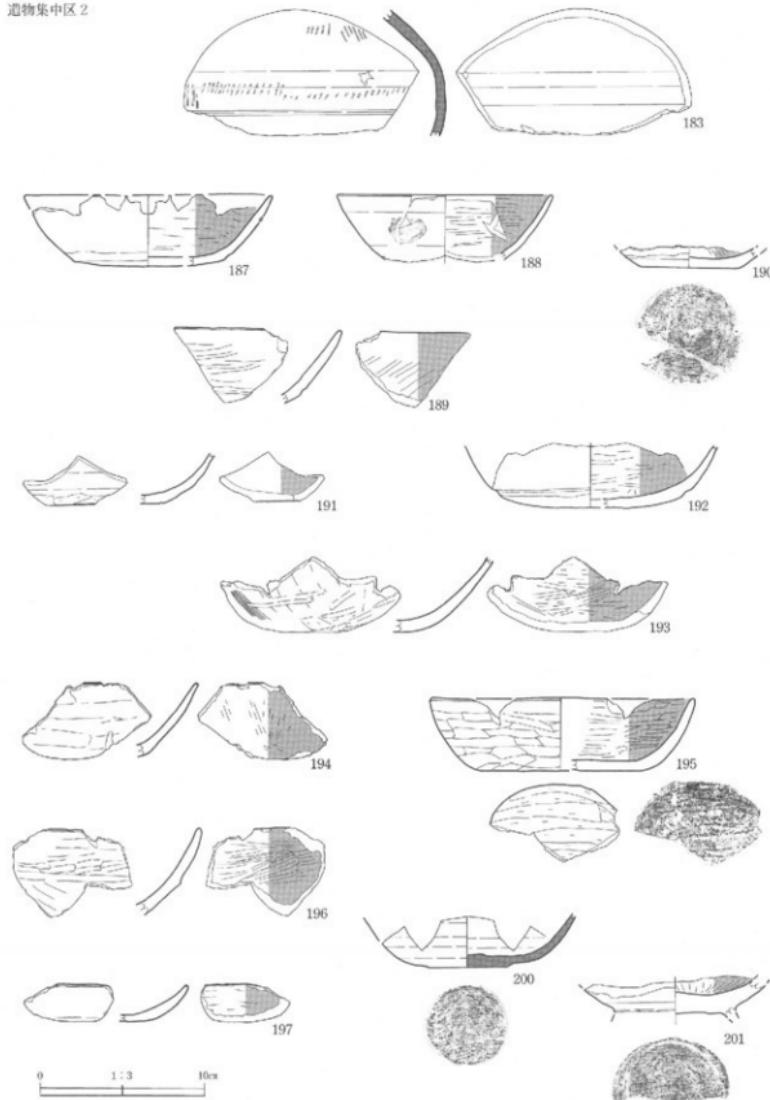


第41図 1号炭窯(2)・2号炭窯出土遺物、遺物集中区1出土遺物(1)

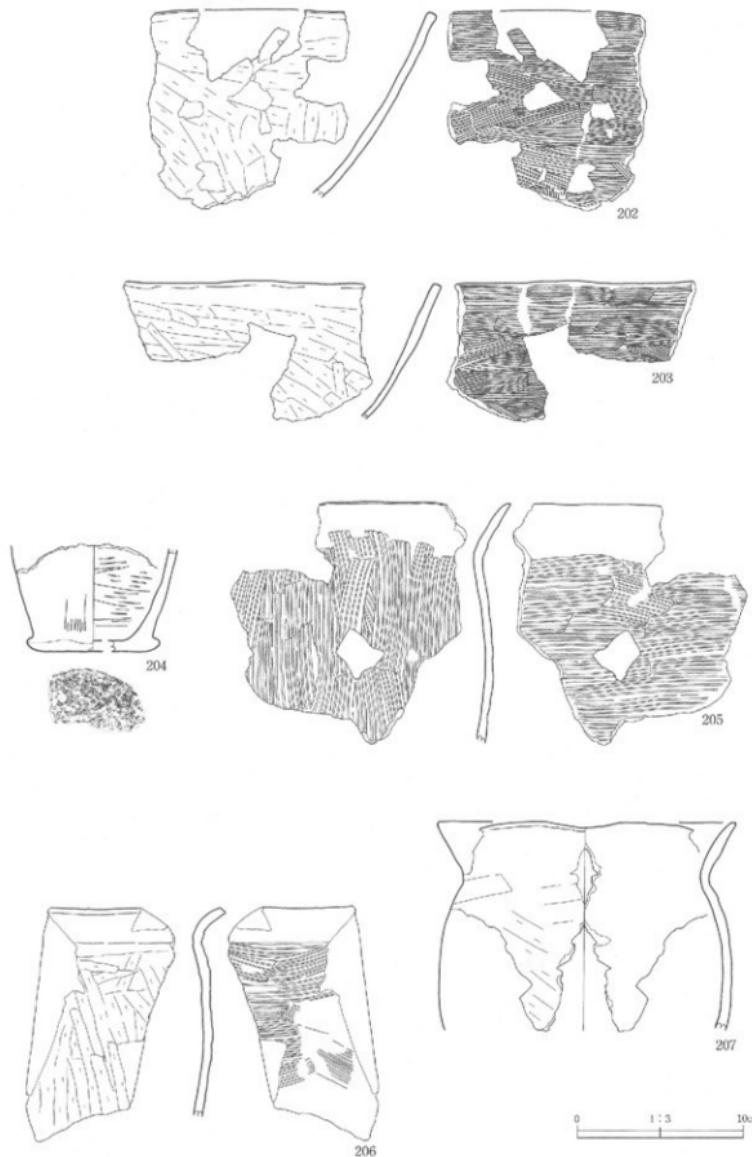


第42図 遺物集中区1出土遺物（2）

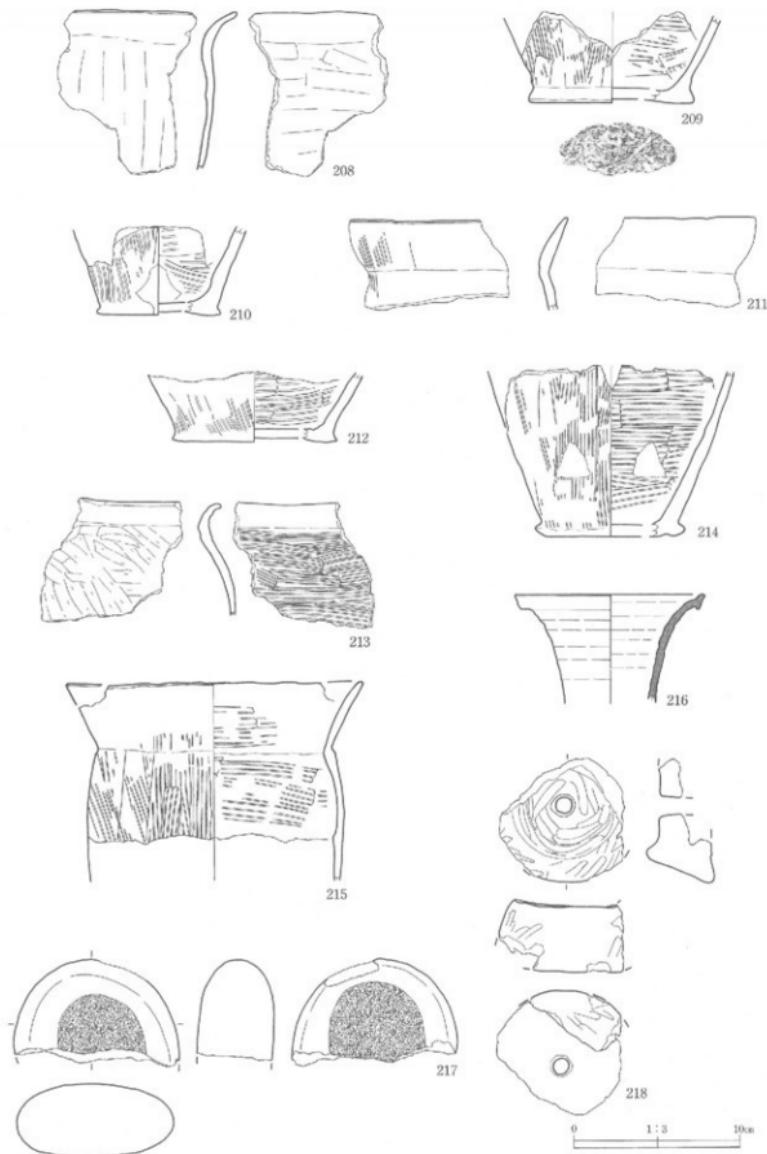
## 遺物集中区 2



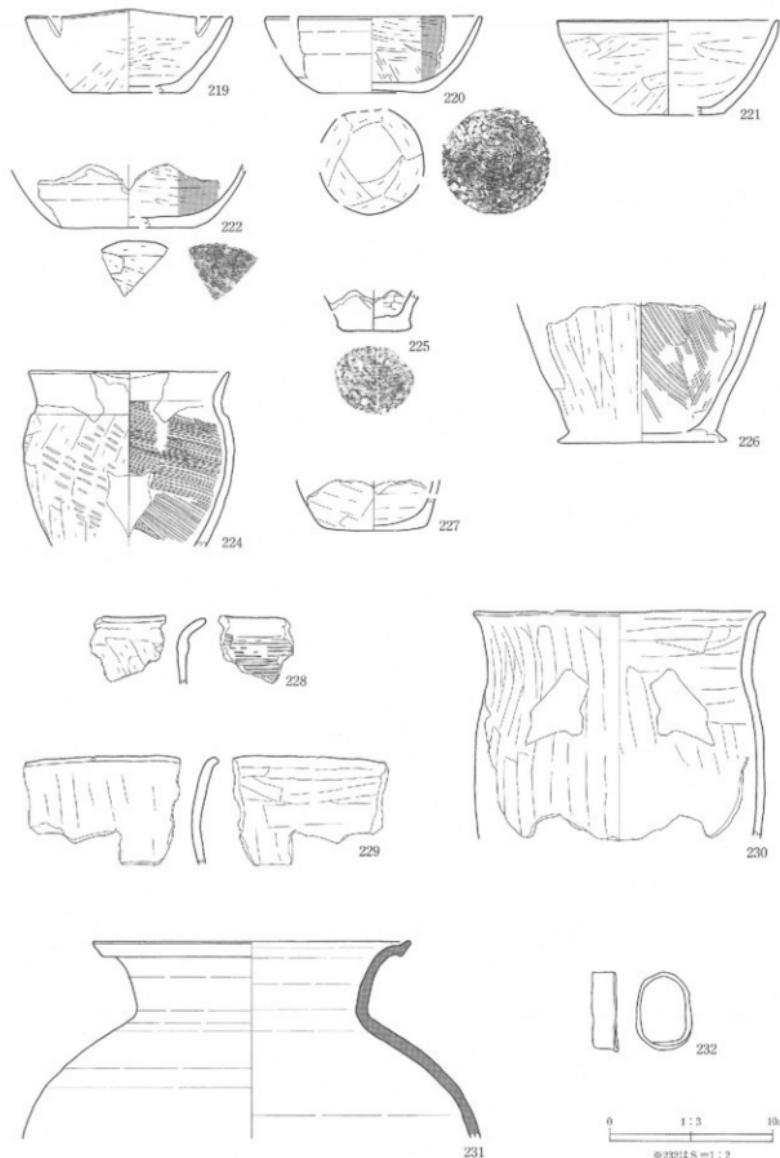
第43図 遺物集中区2出土遺物(1)



第44図 遺物集中区2出土遺物 (2)



第45図 遺物集中区2出土遺物（3）



第46図 遺構外出土遺物

第2表 土器・須器器觀察表

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調査(目+斜)	主な内面調査(目+斜)			法量(cm)	底径	器高	備考
							口径	底部	法量(cm)				
1	1号堅穴住居 Q 1 壁下	土器器	壺	70%	美しい黄褐色	(口~体) ロクロナダ (焼け跡) ロクロナダ	不規則	13.6	5.5	5.5	内面黒色處理 (開口焼け跡) 銀色		
2	1号堅穴住居 Q 1 床	土器器	十輪器	長頸壺	30%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (焼け跡) ヨコナダ	(体) ナダ	(14.0)	—	(9.5)	—	
3	1号堅穴住居 Q 1 床	土器器	長頸壺	長頸壺	20%	明黄色	(口~体) ヨコナダ	(体) ヨコナダ	(15.35)	—	(7.6)	—	
4	1号堅穴住居 Q 1 床	土器器	長頸壺	長頸壺	25%	美しい黄褐色	器内焼耗	—	—	7.8	(7.65)	—	
5	1号堅穴住居 カマド左袖	土器器	長頸壺	15%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(体) ヨコナダ	(体) ナダ	(19.4)	—	(10.6)	—	
6	1号堅穴住居 カマド右袖	土器器	長頸壺	10%以下	美しい黄褐色	(体) ケズリ	ケズリ	—	(6.6)	(6.05)	—	表面観	
7	1号堅穴住居 Q 4 理土下	土器器	長頸壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(体) ナダ	—	—	—	—	—	
8	1号堅穴住居 Q 4 理土	土器器	長頸壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(体) ナダ	—	—	—	—	外側灰化物付着	
9	1号堅穴住居 煙土	土器器	十輪器	長頸壺	20%	美しい黄褐色	(口~体) ナダ	木製模	—	(8.35)	(10.5)	—	
10	1号堅穴住居 壁上	土器器	長頸壺	20%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(体) ナダ	—	—	—	—	—	
11	2号堅穴住居 床P-1	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	(14.4)	—	(7.4)	—	
12	2号堅穴住居 Q 3 床	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	内面黒色見附、穿孔痕	
13	2号堅穴住居 Q 2 壁下~床	土器器	壺	50%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	ミガキ	(16.0)	—	(4.65)	外側灰化物見附	
14	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	20%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	(16.0)	—	(5.1)	内面黒色處理	
15	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	15%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	内面黒色見附、穿孔痕	
16	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	内面黒色處理、穿孔痕	
17	2号堅穴住居 Q 3 土	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
18	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
19	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
20	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
21	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
22	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
23	2号堅穴住居 Q 4 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
24	2号堅穴住居 Q 3 土	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	—	—	
25	2号堅穴住居 檻用	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(脚) ヨコナダ (脚) ヨコナダ	(脚) ヨコナダ	—	—	7.2	<1.7	停止イタキによる 切り離し	
26	2号堅穴住居 Q 1 壁下	土器器	壺	10%以下	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	<4.9	内面黒色處理	
27	2号堅穴住居 床P-2	土器器	壺	15%	橙	(体) ナダ?	(脚) ナダ?	木葉痕	—	8.4	<10.8	—	
28	2号堅穴住居 Q 2 土	土器器	壺	15%	美しい黄褐色	(口~体) ヨコナダ (口~体) ヨコナダ	(口~体) ヨコナダ	—	—	—	<4.6	—	

No	出土地点	種類	形	残存率	色	調	主な外面調整 (H→断)	土な内面調整 (H→断)	底部	LJ	底	直径 (cm)	法量 (cm)	備考
29	2号墓穴住居 カマド燃焼器	土師器	長胴壺	10%以上	灰	〔体〕ナデ	鋸面削耗	〔口〕摩耗 [〔体〕ナデ?]	—	—	—	(9.3)	—	—
30	2号墓穴住居 Q 2床	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕摩耗 [〔体〕ナデ?]	〔口〕摩耗 [〔体〕ナデ?]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ?]	〔体〕ナデ	木漆痕	—	—	(5.2)	—
31	2号墓穴住居 床P-1	土師器	長胴壺	20%	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	8.9	(5.1)	—
32	2号墓穴住居 床P-3	土師器	長胴壺	60%	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	(16.0)	—	(28.1) 集中区1と総合
33	2号墓穴住居 Q 3壇ト床	土師器	長胴壺	50%	黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	7.7	18.0	—
34	2号墓穴住居 Q 4壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(4.2)	—
35	2号墓穴住居 Q 4壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(5.7)	内面黒色处理付
36	2号墓穴住居 Q 4壇下	土師器	長胴壺	15%	浅	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(4.0)	—
37	2号墓穴住居 壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	(20.0)	—	(7.4)
38	2号墓穴住居 壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(1.1)	—
39	2号墓穴住居 壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(4.8)	—
47	3号墓穴住居 Q 1壇下	土師器	壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	内面黒色處理: 写真載
48	3号墓穴住居 Q 4壇下	土師器	壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	内面黒色處理: 写真載
49	3号墓穴住居 壇下	土師器	壺	40%	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	—
50	3号墓穴住居 Q 2壇下	土師器	壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	内面黒色處理: 写真載
51	3号墓穴住居 Q 3壇	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	写真載
52	3号墓穴住居 Q 4壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	写真載
53	3号墓穴住居 Q 2壇下	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	内面黒色處理: 写真載
54	3号墓穴住居 Q 3壇土	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	写真載
55	3号墓穴住居 Q 3壇土	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	—	写真載
56	3号墓穴住居 Q 1壇上	土師器	長胴壺	10%以下	純い黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(12.0)	—
64	4号墓穴住居 Q 1床	土師器	壺	50%	浅	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	(15.4)	8.5	5.9
65	4号墓穴住居 Q 3床	土師器	壺	10%以下	明黄褐色	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ケズリ]	〔口〕ヨコナダ [〔体〕ナデ]	木漆痕	—	—	(2.9)	内面黒色處理

No	山 土 地 点	種	類	器	残存率	色	調	キナ外側調整 (体) ケズリ?	(学毛)	主な内側調整 (山→筋)	底 部	法 直 (cm)	口 在 底 住 器 高	備 考
66	4号窓穴住居 Q3床P-2	土陶器	坏		10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ?	(学毛)	(体) ナデ	ケズリ?	—	—	—	—
67	4号窓穴住居 Q2廻下	土陶器	坏		40%	純い黄褐色	(口~体)	ロクロナナデ	(口~体)	ミガキ	十指込ベタナメ +指込ベタナメ +指込ベタナメ	(8.3)	(6.7)	5.4 内面黑色處理
68	4号窓穴住居 Q4廻下	土陶器	坏		10%以下	明黄褐色	(体) ロクロナナデ	(口~体)	ミガキ	—	—	—	— 内面黑色處理	
69	4号窓穴住居 Q4廻下	土陶器	坏?		10%以下	明黄褐色	(体) ミガキ	(体) ミガキ	(体) ミガキ	—	—	—	— 内面黑色處理?	
70	4号窓穴住居 Q2廻中	土陶器	坏		20%	明黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ミガキ	滑(ヒキ) +指込ベタナメ +指込ベタナメ	—	—	— (4.5) 内面黑色處理	
71	4号窓穴住居 Q2廻土	土陶器	坏		10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ?	(摩耗)	(体) ナデ?	滑(ヒキ) +指込ベタナメ +指込ベタナメ	—	—	— (3.15) 内面黑色處理	
72	4号窓穴住居 Q4廻上	土陶器	坏		25%	橙	(体) ロクロナナデ	(体) ミガキ	(体) ミガキ	滑(ヒキ) +指込ベタナメ +指込ベタナメ	—	—	— 外面擦り着・大溝痕	
73	4号窓穴住居 カマド支脚(左)	土陶器	小形器	100%	純い黄褐色	(口) ヨコナナデ	(体) ヨコナナデ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	摩 毛	11.0	6.7	10.1	
74	4号窓穴住居 Q3床P-1	土陶器	長脚器	20%	純い黄褐色	露面摩耗	(体) ヨコナナデ	(体) ヨコナナデ	(体) ヨコナナデ	摩 毛	—	—	— (5.35)	
75	4号窓穴住居 Q4床	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ?	(体) ナデ?	(体) ナデ?	(体) ナデ?	水要痕	—	(6.4)	(2.7)	
76	4号窓穴住居 Q3廻下	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	露面摩耗	(口) ヨコナナデ	(体) ハラス状のナナメ	(体) ハラス状のナナメ	—	—	—	— (5.9)	
77	4号窓穴住居 Q1廻上	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ?	(体) ナデ?	(体) ナデ?	(体) ナデ?	摩 毛	—	(8.2)	(4.3)	
78	4号窓穴住居 Q1廻上	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	—	—	—	— (6.9)	
79	4号窓穴住居 Q1廻上	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	—	—	—	— (5.3)	
80	4号窓穴住居 Q2廻上	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(口) ヨコナナデ	(体) ナデ	(口) ヨコナナデ	(体) ナデ	—	—	—	— (4.8)	
81	4号窓穴住居 カマド支脚(右)	土陶器	長脚器	70%	純い黄褐色	(口) ヨコナナデ	(体) ケズリ	(口) ヨコナナデ	(体) ハケメ	木要痕	(14.15)	7.6	17.0 内面炭化物付着	
82	4号窓穴住居 梁出	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	(7.0)	(4.8)	—	
83	4号窓穴住居 砂土	土陶器	長脚器	10%以下	純い黄褐色	露面摩耗	—	—	—	露面摩耗	—	—	— (10.9)	
84	4号窓穴住居 床	須毛器	—	—	10%以下	灰	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	—	—	—	— (3.6)	
85	4号窓穴住居 床	須毛器	—	—	10%以下	灰	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	—	—	—	— (2.4) 252と同-?	
86	4号窓穴住居 Q2廻下	須毛器	—	—	15%	灰	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	—	—	—	— (9.0) 252と同-?	
87	4号窓穴住居 Q3廻下	須毛器	—	—	10%以下	灰	(口~体)	ロクロナナデ	(口~体)	ロクロナナデ	—	—	— (5.85)	
88	4号窓穴住居 Q4廻下	須毛器	—	—	10%以下	灰	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	(口) ロクロナナデ	—	—	—	— (1.55)	

No	出土地点	種類	器種	保存率	色調	七な外面調整(旧→新)	七な内面調整(旧→新)	底幅	11径底径	法量(cm)	備考	
89	4号室六件居 Q 3	須恵器	壺蓋	10%以下	灰	[体] ロクロナダ+ケズリ	[体] ロクロナダ	-	-	<10.95	S113と接合	
96	5号室六件居 Q 1床	土師器	壺	15%	純い黄澄	[口~体] ケズリ	[口~体] ミガキ	-	-	<3.6	内面黒色處理	
97	5号室六件居 Q 1床	土師器	壺	25%	灰	灰	[口~体] ケズリ	[口~体] ミガキ	[12.0]	-	(4.6)	
98	5号室六件居 Q 3床	土師器	壺	65%	純い黄	[口~体] ケズリ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[12.6]	-	内面黒色處理	
99	5号室六件居 Q 3床	土師器	壺	20%	純い黄澄	[口~体] ケズリ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[10.6]	[6.5]	3.2 内面黒色處理	
100	5号室六件居 Q 1床下~床 上部器	土師器	壺	10%以下	黑 橙	[口~体] ナダ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[14.3]	[7.8]	(3.7) 内面黒色處理:写真載	
101	5号室六件居 Q 3床下~床 土師器	壺	85%	純い黄澄	[口~体] ナダ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[14.9]	10.4	4.15 内外削黒色處理	
102	5号室六件居 Q 3床下~床 土師器	壺	20%	褐 橙	[口~体] ナダ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	(5.1) 内外削黒色處理	
103	5号室六件居 Q 3床下~床 上部器	土師器	壺	15%	純い黄澄	[体] ケズリ	[体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	削黒色處理:写真載
104	5号室六件居 Q 3床下~床 土師器	壺	10%以下	黑 橙	[口~体] ナダ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	内面削黒色處理:写真載	
105	5号室六件居 Q 3種下	土師器	壺	10%以下	純い黄澄	[口~体] ナダ+一部ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	内面黒色處理
106	5号室六件居 Q 3種下	土師器	壺	35%	明黄澄	[口~体] ロクロナダ(摩耗)	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	内面黒色處理
107	5号室六件居 Q 4種土	土師器	壺	25%	黄 灰	[口] ミコロナダ(体)ハケヌ	[口~体] ハケヌ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	(2.7) 内面黒色處理
108	5号室六件居 床上~1	土師器	球形壺	30%	純い黄澄	[体] ハケヌ+ナダ	[体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	-	-	9.5 <10.05
109	5号室六件居 Q 3種下~床 土師器	長胴壺	10%以下	明黄澄	[体] ハケヌ(摩耗)	[体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	-	-	(9.6) -	
110	5号室六件居 Q 1點下	土師器	長胴壺	10%以下	褐	器皿軸孔	器皿軸孔	器皿軸孔	[20.0]	-	(6.7) -	
111	5号室六件居 Q 1	土師器	長胴壺	10%以下	黄 灰	[体] ケズリ	[体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	[口~体] ハケヌ	-	-	(7.65) (6.2)
112	5号室六件居 Q 3~4	土師器	長胴壺	25%	黄 橙	[口] ミコロナダ(体)ケズリ	[口] ロクロナダ	[口] ロクロナダ	[21.4]	-	(16.0) -	
113	5号室六件居 壁下	須恵器	壺蓋	10%以下	灰	[口] ロクロナダ	[口] ロクロナダ	[口] ロクロナダ	-	-	-	
121	6号室六件居 Q 2床	土師器	壺	70%	黄 橙	器皿軸孔	器皿軸孔	器皿軸孔	-	-	(4.8) 内面黒色處理	
122	6号室六件居 Q 3種下	土師器	壺	10%以下	明 橙	[口~体] ケズリ	[口~体] ミガキ	[口~体] ミガキ	-	-	内面黒色處理:写真載	
123	6号室六件居 Q 3種下	土師器	壺	10%以下	明黄澄	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	-	-	内面黒色處理:写真載	
124	6号室六件居 Q 3種下	土師器	壺	15%	純い黄澄	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	-	-	内面黒色處理:写真載	
125	6号室六件居 Q 4種土真下	土師器	長胴壺	15%	純い黄澄	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	[口~体] ナダ	[22.4]	-	(9.2) -	
126	6号室六件居 表1地下	土師器	長胴壺	10%以下	明黄澄	[体] ハケヌ	[体] ハケヌ	[体] ハケヌ	-	(10.4)	(4.55) -	

No	出土地点	種類	烟器	器種	残存率	色調	土な外観調査(H→断)	主な内面調査(H→断)	底部	口径	底径	器高	法量(cm)	備考
127	7号窓穴住居 桧山時	土師器	杯	10%以下	純い黄褐色	(体) ロクロナデ	(体) ミガキ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(9.9)	内面黒色處理:写真載
128	7号窓穴住居 カマド	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	—	(体) ケズリ	—	—	—	—	(14.5)	—
129	7号窓穴住居 カマド	土師器	長財壺	20%	純い黄褐色	(体) ケズリ	—	(体) ハケメ状のナデ	—	—	—	—	(12.2)	(27.25)
130	7号窓穴住居 カマド	須恵器	愛染壺	20%	オリーブ灰	(体) 俗なタタキ	—	(体) 円形撲文アゲメ	—	—	—	—	(10.85)	表面黒
131	7号窓穴住居 Q4 脊床	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	—	—	—	—	(9.7)	—
132	7号窓穴住居 脊下	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(4.8)	—
133	7号窓穴住居 脊上	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ヨコナデ	(体) ヨコナデ (体) ハケメ	(体) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(21.0)	—
134	7号窓穴住居 塗土	土師器	長財壺	10%以下	黒褐色	(体) ヨコナデ・一輪ミガキ	(体) ヨコナデ	(体) ヨコナデ (体) ナデ	—	—	—	—	(11.1)	—
135	7号窓穴住居 墓土	土師器	長財壺	10%以下	明黄褐色	(体) ヨコナデ	(体) ヨコナデ (体) ナデ	(体) ヨコナデ (体) ナデ	—	—	—	—	(6.7)	—
136	7号窓穴住居 墓上	土師器	長財壺	15%	灰黄褐色	(体) ナデ	(体) ナデ	(体) ナデ	—	—	—	—	(12.1)	—
137	7号窓穴住居 墓上	土師器	十輪器	10%以下	純い黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(9.0)	(5.5)
138	7号窓穴住居 墓上	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(8.4)	(6.6)
139	7号窓穴住居 墓上	土師器	長財壺	10%以下	灰黄褐色	(体) ヨコナデ (体) ナデ	(体) ヨコナデ (体) ナデ	(体) ヨコナデ (体) ナデ	—	—	—	—	(8.45)	—
141	7号窓穴住居 墓土	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ	(体) ナデ	(体) ナデ	—	—	—	—	(12.0)	—
142	7号窓穴住居 墓上	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ	(体) ナデ	(体) ナデ	—	—	—	—	(11.8)	(3.4)
146	4号土坑 墓土	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ? (摩耗)	(体) ナデ?	(体) ナデ?	—	—	—	—	(8.4)	表面黒色處理:写真載
147	5号土坑 墓上	土師器	杯	10%以下	灰黄褐色	(口~体) ミガキ	(口~体) ミガキ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	(4.8)	—
148	5号土坑 墓上	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	—	—	—	—	(11.8)	表面黒色處理:写真載
149	5号土坑 墓上	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(8.4)	表面黒色處理:写真載
150	1号土坑 墓土	土師器	杯?	10%以下	褐色	—	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(8.4)	表面黒色處理:写真載
151	1号土坑 地土	土師器	長財壺	10%以下	褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(11.8)	表面黒色處理:写真載
152	1号土坑 西側壁土	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ナデ	(体) ナデ	(体) ナデ	—	—	—	—	(8.4)	表面黒色處理:写真載
153	1号窓穴住居物 Pit5	土師器	長財壺	10%以下	純い黄褐色	(体) ケズリ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(8.4)	表面黒色處理:写真載
154	1号灰窯	土師器	杯?	10%以下	純い黄褐色	(体) ロクロナデ	(体) ミガキ	(体) ミガキ	—	—	—	—	(8.4)	内面黒色處理:写真載
155	1号灰窯	土師器	小形杯?	45%	純い黄褐色	(口~体) ナデ	(体) ケズリ	(体) ケズリ	—	—	—	—	(5.9)	5.25

No	出土地点	種類	器形	残存率	色調	土な外観調整 (H・断)	主な内面調整 (H・断)	底部	口径	底径	法盤 (cm)	備考
156 1号墓窓	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(6.2)	
157 1号墓窓	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(3.1)	
158 1号墓窓	土師器	十輪脚	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(5.6)	
159 1号墓窓	土師器	十輪脚	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ロクロナナデ	—	—	—	—	(6.4)	
160 2号墓窓	土師器	环	25%	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ロクロナナデ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(4.4)	内面黒色處理
161 2号墓窓	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.6)	内面黒色處理
162 2号墓窓	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.1)	内面黒色處理
163 2号墓窓	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(5.0)	内面黒色處理
164 2号墓窓	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.6)	内面黒色處理
165 2号墓窓	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.1)	内面黒色處理
166 2号墓窓	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	—	—	—	—	(6.1)	内面黒色處理
167 2号墓窓	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(5.0)	内面黒色處理
168 遺物集中区1	土師器	十輪脚	15%	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.6)	内面黒色處理
169 遺物集中区1	土師器	十輪脚	15%	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ハケメ	—	—	—	—	(4.15)	内面黒色處理
170 遺物集中区1	土師器	环	15%	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.6)	内面黒色處理
171 遺物集中区1	土師器	环	15%	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(6.6)	内面黒色處理
172 遺物集中区1	土師器	环	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ロクロナナデ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(11.0)	内面黒色處理
173 遺物集中区1	土師器	球形甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ミガキ	—	—	—	—	(5.5)	内面黒色處理
174 遺物集中区1	土師器	球形甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(6.9)	
175 遺物集中区1	土師器	長脚甕	20%	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	木裏瓶	—	7.5	—	(6.25)	
176 遺物集中区1	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(15.2)	
177 遺物集中区1	土師器	長脚甕	25%	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(7.2)	
178 遺物集中区1	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	木裏瓶?	—	8.5	—	(3.5)	
179 遺物集中区1	土師器	長脚甕	10%以下	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	壺	—	(9.5)	—	(6.4)	
180 遺物集中区1	土師器	十輪脚	10%以下	深黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ケズリ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(10.8)	
181 遺物集中区1	土師器	十輪脚	15%	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(9.2)	内面炭化物付着
182 遺物集中区1	土師器	长脚甕	15%	純い黄褐色	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	(1) ヨコナデ (体) ナナデ	—	—	—	—	(7.8)	
183 遺物集中区2	須恵器	蓋	15%	暗灰質	(1) ヨコナデ (体) タタキ→ロクロナナデ	(1) ヨコナデ (体) タタキ→ロクロナナデ	—	—	—	—		

No	用 土 地 点	種	類	器	種	残存率	色	調	牛な外筋調整 (H1→H)	主な内筋調整 (H1→H)	底 部	H1 底 法	法 量 (cm)	高 器	備 考	
184	畜物集中区1	土飼器	人	要	10%以下	灰	(体) 平行文タキ	(体) ナダ	—	—	(15.0)	(9.2)	4.3	(5.0)	内面黒色處理	
187	畜物集中区2	土飼器	人	要	35%	純い黄緑	凹面撲打	(体) ナダ	(体) ミガキ	—	—	(13.1)	—	(4.15)	内面黒色處理	
188	畜物集中区2	土飼器	人	要	20%	純い黄緑	(口)→(体) ロクロナダ	(口)→(体) ミガキ	(体) ナダ	—	—	—	—	(4.15)	内面黒色處理	
189	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	(口) ミガキ	(体) ナダ	(口)→(体) ミガキ	(体) ナダ	—	—	—	—	(4.6)	内面黒色處理
190	畜物集中区2	土飼器	人	要	30%	綠	(体) ロクロナダ	(体) ミガキ	同上(ナダ)	同上(ナダ)	—	—	6.0	<1.3	内面黒色處理	
191	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	(体) ロクロナダ・下端部	(体) ミガキ	同上(ナダ)	同上(ナダ)	—	—	(3.05)	内面黒色處理		
192	畜物集中区2	土飼器	人	要	40%	純い黄緑	凹面撲打	(体) ミガキ (後托)	庫 軋	—	(6.0)	—	(4.0)	内面黒色處理		
193	畜物集中区2	土飼器	人	要	25%	純い黄緑	(体) ハケメ・ケズリ・一 幅ミガキ	(体) ミガキ	—	—	—	—	(4.5)	内面黒色處理		
194	畜物集中区2	土飼器	人	要	20%	純い黄緑	(口) ミガキ	(口)→(体) ミガキ	(口)→(体) ミガキ	—	—	—	(4.55)	内面黒色處理		
195	畜物集中区2	土飼器	人	要	23%	純い黄緑	(口)→(体) ナダ	(体) ミガキ	(体) ナダ	—	—	—	—	4.5	内面黒色處理	
196	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	純い黄緑	(口) ミガキ (体) ナダ	(口) ミガキ	(口)→(体) ナダ	(体) ナダ	(16.0)	(9.6)	4.5	内面黒色處理		
197	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	凹面撲打	(体) ミガキ	(体) ナダ	—	—	—	(5.4)	内面黒色處理		
198	畜物集中区2	土飼器	人	要	20%	純い黄緑	(体) ミガキ	(体) ナダ	(体) ナダ	—	—	—	(2.3)	内面黒色處理		
199	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	純い黄緑	(口)→(体) ナダ	(体) ミガキ	(体) ナダ	—	—	—	—	—	内面黒色處理：劣化現象	
200	畜物集中区2	土飼器	人	要	50%	灰	(口) ロクロナダ	(体) ロクロナダ	(口) ロクロナダ	同上(ナダ)	—	—	4.9	(3.1)	内面黒色處理：劣化現象	
201	畜物集中区2	土飼器	人	要	25%	綠	(体) ロクロナダ	(体) ミガキ	—	不明	—	—	(2.6)	内面黒色處理		
202	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	褐	疾	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	(口)→(体) ハケメ	—	—	—	(11.4)	内面黒色處理		
203	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	褐	疾	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	(口)→(体) ハケメ	—	—	—	(8.3)	内面黒色處理		
204	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	明黄褐色	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	木葉痕	—	(8.0)	(6.4)	—		
205	畜物集中区2	土飼器	人	要	20%	純い黄緑	(口) ヨコナダ (体) ハメ	(口) ヨコナダ (体) ハメ	(口) ヨコナダ (体) ハメ	—	—	—	(4.8)	—		
206	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	純い黄緑	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	(口) ヨコナダ (体) ハメ	(口) ヨコナダ (体) ハメ	—	—	—	(14.4)	—		
207	畜物集中区2	土飼器	人	要	15%	純い黄緑	(口) ヨコナダ (体) ケズリ (後托)	筋白塗托	(口) ヨコナダ (体) ケズリ (後托)	(口) ヨコナダ (体) ケズリ (後托)	(18.0)	—	(12.8)	—		
208	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	(口) ヨコナダ (体) ナダ	(口) ヨコナダ (体) ナダ	(口) ヨコナダ (体) ナダ	—	—	—	(9.6)	—		
209	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄	(体) ハケメ	(体) ナダ	(体) ナダ	木葉痕	—	(10.0)	(5.4)	—		
210	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	明黄褐色	(体) ハケメ	(体) ナダ	(体) ナダ	木葉痕？	—	(7.5)	(5.5)	—		
211	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	明黄褐色	(口) ヨコナダ (体) ハメ	體體對	(口) ヨコナダ (体) ハメ	木葉痕	—	—	(5.55)	—		
212	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	(体) ハケメ	(体) ハケメ	(体) ハケメ	木葉痕	—	(9.9)	(4.3)	—		
213	畜物集中区2	土飼器	人	要	10%以下	純い黄緑	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	(口) ヨコナダ (体) ケズリ	—	—	—	(7.6)	—		

No	出上地點	種類	恐竜	残存率	色調	純い黄橙	主な内面調整 (Ht×W)		底面	上径底	法量 (cm)	備考
							(体) ハケメ	(口) ハケメ				
214	遺物集中区2	土師器	長脚瓶	15%	純い黄橙	(体) ハケメ			木彫頭	—	(9.0)	(10.1)
215	遺物集中区2	土師器	長脚瓶	25%	明黄褐	(口) ハケメ・ヨコナデ→ハケメ (体) ハケメ			—	(18.0)	—	(12.2)
216	遺物集中区2	須惠器	長脚瓶	10%以下	純灰黃	(L.) ヨクロナデ			—	(11.5)	—	(6.65)
219	谷郷砂場	土師器	灰	20%	純い黄橙	(口～体) ケスリ(摩耗)	(口～体) ミガキ(摩耗)		磨地	(12.6)	(6.9)	5.1 内面黒色處理
220	谷郷砂場 表土以下	土師器	灰	50%	純い黄橙	(L.) ヨコナデ	(L.) ミガキ		磨地(付キ) 鏡面(付キ) 再磨耗	(13.4)	6.3	4.7 内面黒色處理
221	谷郷砂場 表土以下	土師器	灰	30%	純い黄橙	(L.) ヨコナデ (体) ケズリ	(L.) ヨコナデ (体) ナデ		ケズリ	(12.6)	(6.7)	(5.85)
222	谷郷砂場 表土以下	土師器	灰	20%	灰黄褐	(体) ナデ	(体) ミガキ		ケズリ	—	(8.0)	(3.9) 内面黒色處理
223	谷郷砂場	土師器	灰	20%	黑褐	(体) ヨクロナデ・ミガキ	(体) ミガキ		固乾(付キ)	—	—	内部黒色處理:写真後
224	谷郷砂場 表土以下	土師器	小形甕	40%	純い黄橙	(口) ヨコナデ (体) ケズリ	(口) ヨコナデ (体) ハケメ?		—	(12.3)	—	(10.7) 工只模研磨
225	谷郷砂場	土師器	小形甕?	10%以上	純い黄橙	(体) ナデ	(体) ナデ		木彫頭	—	4.5	(2.5)
226	谷郷砂場	土師器	長脚甕	15%	純い黄橙	(体) ケズリ	(体) ハケメ		木彫頭	—	(10.4)	(8.5)
227	谷郷砂場	土師器	長脚甕	10%以下	浅黄	(口) ヨコナデ (体) ケズリ	(口) ヨコナデ (体) ハケメ		ナデ	—	(6.5)	(2.0)
228	谷郷砂場	土師器	長脚甕	10%以下	浅黄	(口～体) ナデ	(口～体) ナデ		—	—	(3.6)	—
229	東尾根部中央	土師器	長脚甕	10%以下	明黄褐	(L.) ヨコナデ・ナデ	(L.) ヨコナデ・ナデ		—	—	(6.7)	—
230	東尾根部中央	土師器	長脚甕	25%	純い黄橙	(L.) ヨコナデ・ナデ	(L.) ヨコナデ・ナデ		—	(17.9)	—	(14.0)
231	谷郷中央	須惠器	蓋造頭	20%	オリーブ灰	(L.) ヨクロナデ	(L.) ヨクロナデ		—	(19.4)	—	(12.15)

第3表 石器・石製品調査表

No	出土地点	基層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石種	埋地	備考
11	1号窓穴住居 Q.2床	磨石	(15.4)	(8.4)	6.1	913.1	花崗岩・1番・中生代白堊紀	北上山地	
12	1号窓穴住居 Q.2床	砥石	(15.1)	(10.8)	5.55	1106.8	流紋岩・新生代古第三紀	松山	2面使用。
40	2号窓穴住居 Q.2床	磨石	(6.1)	(9.7)	(4.5)	339.7	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	
41	2号窓穴住居 Q.3塊下	磨石	12.8	8.4	6.8	1020.6	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	
42	2号窓穴住居 Q.3床	砥石	(26.0)	(12.3)	8.1	1711.7	流紋岩・新生代古第三紀	松山	4面使用。
43	2号窓穴住居 Q.2床	磨石	14.3	14.3	6.5	1900.9	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	
44	2号窓穴住居 Q.1 2層	燧石	(12.4)	7.4	5.7	729.2	流紋岩・新生代古第三紀	松山	
45	2号窓穴住居 Q.2床	砥石	(21.1)	(6.0)	5.9	714.1	流紋岩・新生代古第三紀	松山	1面使用。
57	3号窓穴住居 Q.2塊上	磨石	(8.5)	(10.05)	4.7	579.2	花崗閃長岩・中生代白堊紀	北上山地	
58	3号窓穴住居 カマド周辺土	磨石	(7.9)	(9.8)	5.5	492.3	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	
59	3号窓穴住居 葉ベラ上床	磨製石斧	(4.6)	2.8	1.3	27.8	燧藻性岩・古生代オーピス紀	早池峰山周辺	
90	4号窓穴住居 Q.2塊下	磨石	7.6	4.8	5.0	268.6	花崗岩・中生代白堊紀	北上山地	
91	4号窓穴住居 Q.3塊下	磨石	11.95	6.85	5.0	611.2	安山岩・中生代白堊紀	北上山地	
92	4号窓穴住居 Q.4塊下	磨石・砥石	15.7	14.6	6.2	1969.6	砂岩・中生代	北上山地	表面に垂直多數
114	5号窓穴住居 Q.3塊下	磨石	11.75	6.1	4.9	542.9	安山岩・新生代山第三紀	北上山地	
115	5号窓穴住居 Q.3塊下	砥石	(9.0)	(5.9)	5.0	380.7	流紋岩・新生代古第三紀	松山	1面使用。
116	5号窓穴住居 S-4	磨石	(9.5)	(8.9)	5.3	603.2	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	
117	5号窓穴住居 Q.4塊下	円錐	4.7	3.95	3.6	96.4	安山岩・新生代山第三紀	北上山地	
118	5号窓穴住居 S-2	砥石	35.5	11.9	12.4	6200.0	流紋岩・新生代古第三紀	松山	4面使用。表面炭化物有り。
119	5号窓穴住居 S-3	砥石	26.65	13.7	6.1	3500.0	流紋岩・新生代古第三紀	松山	3面使用。表面炭化物有り。
143	7号窓穴住居 カマド周辺	支脚	(11.2)	5.95	4.8	421.7	流紋岩・新生代古第三紀	松山	微少に板熱による赤色変化有り。
185	遺物集Ⅰ 屋上	磨石	(10.05)	9.8	4.45	614.9	流紋岩・新生代古第三紀	松山	
217	遺物集Ⅱ 下位	磨石	(6.6)	(10.1)	(4.7)	398.0	安山岩・新生代古第三紀	北上山地	

第4表 細製品調査表

No	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
13	1号窓穴住居 Q.4床	鉤先	11.7	15.3	0.9		
14	1号窓穴住居 Q.1塊上	不明	(1.5)	(1.4)	0.5		表面に少々質残存。手縫の一部?
15	1号窓穴住居 Q.1塊土	不明	(1.8)	(2.5)	0.7		手縫の一部?
60	3号窓穴住居 Q.4塊下	縫	(18.4)	2.8	0.4		

( ) は既定値、( &lt; ) は残存値を表す

No	出 土 地 点	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考
61	3号季次住居 墓土上位	刀子	(9.2)	1.1	0.8	16.3	
93	4号季次住居 Q4床	棒状鉄製品	(5.45)	1.4	0.6	4.5	
94	4号季次住居 Q3櫛中	足金具	6.0	2.5	0.1	17.4	
95	4号季次住居 Q3櫛下	足金具	5.3	3.0	0.15	16.2	
120	5号季次住居 Q1櫛下	刀子	(5.25)	1.25	0.4	2.8	
144	7号季次住居 墓下	刀子	(6.9)	1.2	0.2	6.4	
145	7号季次住居 墓下	棒状鉄製品	13.95	1.4	0.9	41.6	
232	谷部地 II-Ⅲ層	棒状鉄製品	3.4	2.5	0.15	7.8	刀子類?

第5表 錐洋類觀察表  
( ) は推定値、( ) は残存部を表す

No	出 土 地 点	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考
16	1号季次住居 Q4床	漆着漆	4.8	3.8	2.25	21.0	粘状漆物要が漆汁と風化してガラス化している。
17	1号季次住居 Q4脚床	合張漆器	6.9	6.6	2.65	77.2	表面全体が赤茶色の漆で覆われる。炭化物、漆のぬみ込み多い。
62	3号季次住居 ベルト脚上	漆狀漆 (大)	7.2	6.6	1.65	128.3	2方向からの塗断面を持つ。上面美しい漆絵。底面漆青灰色を呈する。
63	3号季次住居 Q2屋下	漆瓶 (中)	5.1	6.6	3.3	156.8	4方向からの塗断面を持つ。底面に漆付着。

第6表 土製品觀察表

No	出 土 地 点	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考
46	2号季次住居	土器支撑?	(4.4)	5.8	1.9	5.16	内部中空。
186	漆物集中区 1	土器防護板	(4.65)	6.0	2.3	49.6	ミガキ調査(右)。
218	漆物集中区 2	土器防護板	(5.1)	5.0	(3.0)	42.2	ミガキ調査(左)。

## V 自然科学的分析

### 1 松山大地田沢遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

#### (1) 測定対象試料

松山大地山沢遺跡は、岩手県宮古市松山第7地割字大地田沢112-64ほか（北緯 $39^{\circ}37'21''$ 、東経 $141^{\circ}55'17''$ ）に所在する。測定対象試料は、1号竪穴住居の床面（Q2）から出土した木炭（No.1: IAAA-81710）、4号竪穴住居の埋土上位（Q4）から出土した木炭（No.2: IAAA-81711）、1号炭窯の底面から出土した木炭（No.3: IAAA-81712）、合計3点である。すべて木炭の年輪最外部から試料を採取している。

#### (2) 測定の意義

遺構・遺物の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

#### (3) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ② 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA: Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- ③ 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- ④ 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

#### (4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO<sub>x</sub>II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### (5) 算出方法

- ① 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- ② <sup>14</sup>C年代（Libby Age: yrBP）は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年（0 yrBP）として過る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- ③  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- ④ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。
- ⑤ 暈年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暈年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暈年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。暈年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暈年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## (6) 測定結果

$^{14}\text{C}$ 年代は、1号竪穴住居床面（Q 2）の木炭が $1270 \pm 30$ yrBP、4号竪穴住居裏土上位（Q 4）の木炭が $100 \pm 30$ yrBP、1号炭窯底面の木炭が $790 \pm 30$ yrBPである。暈年較正年代 ( $1\sigma$ ) から判断すれば、No. 1 が $689 \sim 772$ AD、No. 2 が江戸時代から明治時代、No. 3 が $1225 \sim 1263$ ADに該当する。試料の炭素含有率はすべて70%前後であり、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題が無く、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり
					(AMS)	Libby Age (yrBP)
IAAA-81710	No.1	遺構:1号竪穴住居 層位:床面(Q2)	木炭	AAA	$-27.60 \pm 0.34$	$1,270 \pm 30$ 85.39±0.39
IAAA-81711	No.2	遺構:4号竪穴住居 層位:埋上(Q4)	木炭	AAA	$-26.07 \pm 0.31$	$100 \pm 30$ 98.75±0.33
IAAA-80712	No.3	遺構:1号炭窯 底面	木炭	AAA	$-27.16 \pm 0.33$	$790 \pm 30$ 90.65±0.31

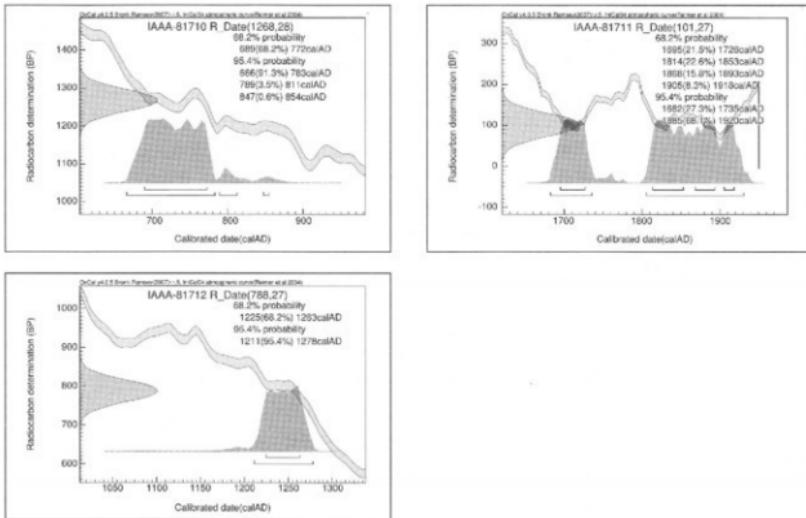
[#2514]

測定番号	$^{14}\text{C}$ 補正なし		暈年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暈年代範囲	2 $\sigma$ 暈年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81710	$1,310 \pm 30$	$84.94 \pm 0.29$	$1,268 \pm 28$	689AD-772AD (68.2%)	666AD-783AD (91.3%) 789AD-811AD ( 3.5%) 847AD-854AD ( 0.6%)
IAAA-81711	$120 \pm 30$	$98.53 \pm 0.33$	$101 \pm 27$	1695AD-1726AD (21.5%) 1814AD-1853AD (22.6%) 1868AD-1893AD (15.8%) 1905AD-1918AD ( 8.3%)	1682AD-1735AD (27.3%) 1805AD-1930AD (68.1%)
IAAA-80712	$820 \pm 30$	$90.25 \pm 0.31$	$788 \pm 27$	1225AD-1263AD (68.2%)	1211AD-1278AD (95.4%)

[参考値]

## 参考文献

- Sluiter M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



## 2 松山大地田沢遺跡より出土した種実

吉川純子（古代の森研究会）

### （1）はじめに

松山大地田沢遺跡は、宮古湾から西へ約3.8kmの山地に位置し、調査区からは竪穴住居のほか炉跡、焼土遺構、土坑などが見つかっている。分析試料はいずれもほぼ古代とみられ、1・6号竪穴住居と1・2号炉跡、3・6・7号土坑、尾根部南端の各試料を水洗して得られた種実である。

### （2）同定結果

表1～3に各遺構より出土した種実の同定結果をまとめた。1号竪穴住居では竈試料よりも床面試料に多くの炭化種実が確認され、総数ではイネが最も多くついでオオムギ、アワ、ヒエの雑穀が大半を占め、コムギもわずかに出土した。木本種実は少なく、ミズナラ、サクラ属、ニワトコなどを出土したがわずかである。2号竪穴住居ではやはり炉跡や竈煙道よりも床面試料に炭化種実が多く、オオムギがイネよりも圧倒的に多く、アワ、ヒエは少なかった。また木本ではクリを少し出土した。3号土坑は2号竪穴住居のあとに形成された土坑ではないかとされているが、ここではオオムギを多く出土している。また、5号竪穴住居では多量のオオムギを出土した。

### （3）考察

本遺跡ではイネとオオムギが住居跡から比較的多く出土し、これに若干の雑穀をともなうため、これらを食糧として利用していたと考えられる。住居跡では竈や炉の内部よりも周囲の床面などに炭化種実が多い傾向にある。また、本遺跡で多量の出土が見られたのは、1・2号竪穴住居と3号土坑で、1号竪穴住居ではイネが多く、それ以外ではオオムギが多かった。

近隣の古代の遺跡は、隠里Ⅶ遺跡があげられるが、そこでは焼土関連の遺構と竪穴住居の出土種類に若干の違いが見られ、焼土関連の遺構では樹木がほとんどであるのに対し、住居からは穀類に少量の樹木種実を随伴している。本遺跡ではそのような違いが見られず樹木種実をほとんど出土しないため、住居以外の上坑の用途が違っていた可能性がある。

また、近隣遺跡の食糧事情を比較すると、木戸井内IVはオオムギ、コムギにキビ、ヒエと雑穀に依存した傾向が見られたが、隠里Ⅲおよび隠里Ⅸはイネとオオムギ、アワなどで雑穀への依存度はやや低い傾向にあった。本遺跡では住居により出土種類に若干の違いが見られるが、イネが多かった1号竪穴住居の時期がかけ離れているということではなく、この違いが時期的要因か住居の規模によるものかは不明である。

表1 松山大地田沢遺跡1号竪穴住居より出土した種実

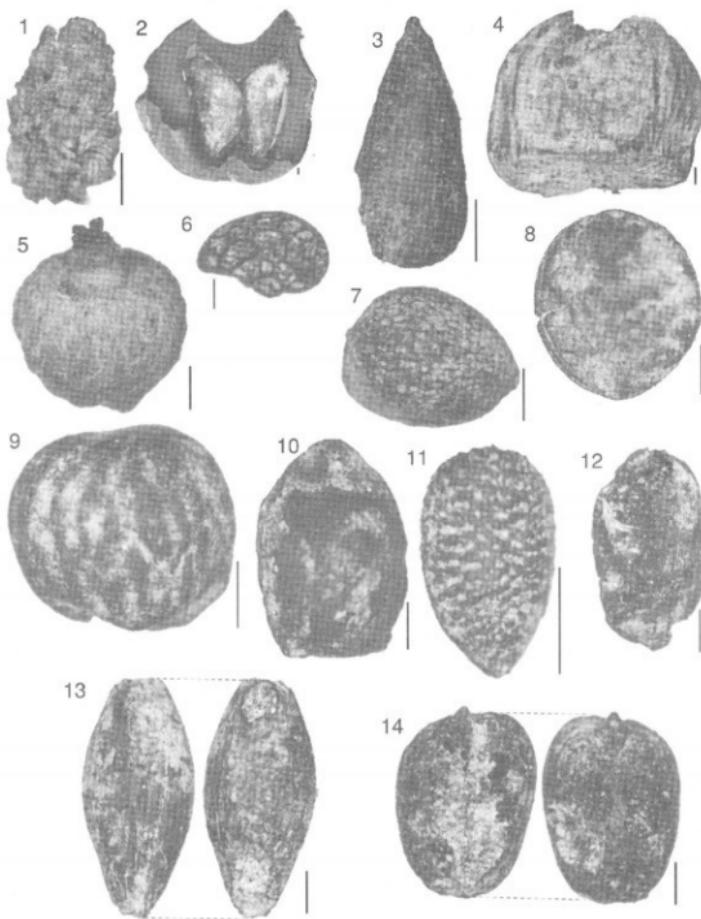
分類群	学名	遺構 1号竪穴住居										東側地帯	
		時期 8後～9世紀代											
		出土部位	地點等	層	底面	ベルト	Q1	Q2	Q3	Q4	地土		
木本	スピギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.) D.Don	未炭化椎花序	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	オニグルミ	<i>Juglans sieboldiana</i> Matsum.	炭化内果皮平分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アサダ		<i>Ostrya japonica</i> Miq.	炭化内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クリ		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	炭化果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズナラ		<i>Quercus crispula</i> Blume	炭化果壳	-	-	-	2	1	-	-	1	-	
コナラ属		<i>Quercus</i>	幼化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サクラ属		<i>Prunus</i>	炭化果壳	-	-	-	4	-	-	-	1	-	
キイチゴ属		<i>Rubus</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンショウ		<i>Zanthoxylum piperitum</i> (L.) DC.	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガムデ属		<i>Acer</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズキ		<i>Sassafras contorta</i> (Hemsl.) Soják	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
クマノミズキ		<i>Sassafras macropoda</i> (Wall.) Soják	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニワトコ		<i>Sorbus racemosa</i> L.	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
		subsp. <i>sieboldiana</i> (Miq.) Hira	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
広葉樹			炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
草本	イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	炭化胚乳	1	3	7	1	33	221	16	1	103	10
オオムギ		<i>Hordeum vulgare</i> L.	炭化胚子	-	16	2	-	-	33	17	1	96	2
コムギ		<i>Triticum aestivum</i> L.	炭化胚子	-	1	1	-	-	1	-	-	8	-
アワ		<i>Setaria italica</i> Beauv.	炭化胚子	-	1	1	1	65	-	-	-	3	-
ヒエ		<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno	炭化胚子	1	4	5	2	44	1	-	-	11	-
イヌイチゴ属		<i>Echinochloa</i>	炭化胚子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウキヤガラ		<i>Scirpus fluviatilis</i> (Tort.) A. Gray	炭化果壳	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
小穀類		<i>Cannabis sativa</i> L.	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アザ		<i>Cannabis sativa</i> L.	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イシミカラ		<i>Persicaria perfoliata</i> (L.) Gross	炭化果壳	-	5	-	1	-	-	-	-	1	-
ミソゾバ		<i>Persicaria thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) H.Gross	果壳	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
タデ属		<i>Persicaria</i>	炭化果壳	3	-	1	4	-	-	-	-	4	-
マメ科		<i>Leguminosae</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
豆子属			子莢	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
不明			炭化秆类	2	-	4	-	1	4	4	1	-	3

表2 松山大地田沢遺跡2号、3号、4号竪穴住居より出土した種実

分類群	学名	遺構 2号竪穴住居										3号住居			
		時期 8世紀後～9世紀代										4号竪穴住居			
		出土部位	地點等	仰斜	層	底面	ベルト	北	東	南	西	地盤	地帶	地土	-
木本	スピギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.) D.Don	未炭化椎花序	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	オニグルミ	<i>Juglans sieboldiana</i> Matsum.	炭化内果皮平分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサダ		<i>Ostrya japonica</i> Miq.	炭化内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
クリ		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズナラ		<i>Quercus crispula</i> Blume	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属		<i>Quercus</i>	幼化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属		<i>Prunus</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キイチゴ属		<i>Rubus</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ		<i>Zanthoxylum piperitum</i> (L.) DC.	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガムデ属		<i>Acer</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ		<i>Sassafras contorta</i> (Hemsl.) Soják	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマノミズキ		<i>Sassafras macropoda</i> (Wall.) Soják	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ		<i>Sorbus racemosa</i> L.	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		subsp. <i>sieboldiana</i> (Miq.) Hira	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
広葉樹			炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本	イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	炭化胚乳	2	3	8	1	2	10	1	12	1	9	3	2
オオムギ		<i>Hordeum vulgare</i> L.	炭化胚子	-	-	24	1	1175	3	22	1	1	33	3	2
コムギ		<i>Triticum aestivum</i> L.	炭化胚子	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アワ		<i>Setaria italica</i> Beauv.	炭化胚子	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-	-	1
ヒエ		<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno	炭化胚子	-	4	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イヌイチゴ属		<i>Echinochloa</i>	炭化果壳	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ウキヤガラ		<i>Scirpus fluviatilis</i> (Tort.) A. Gray	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
小穀類		<i>Cannabis sativa</i> L.	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イシミカラ		<i>Persicaria perfoliata</i> (L.) Gross	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミゾバ		<i>Persicaria thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) H.Gross	果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属		<i>Persicaria</i>	炭化果壳	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科		<i>Leguminosae</i>	炭化果壳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
豆子属			子莢	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
不明			炭化秆类	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-

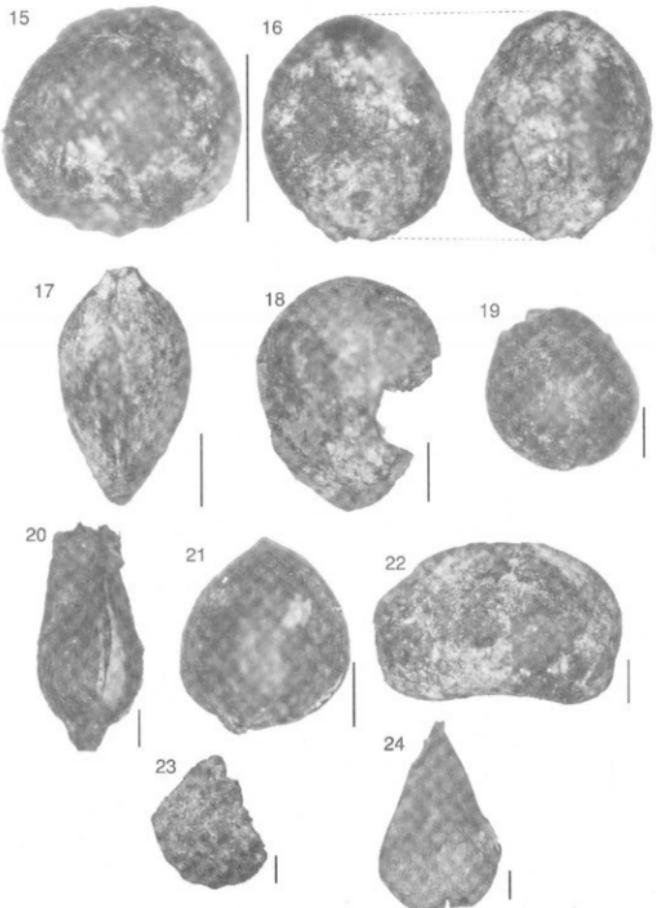
表3 松山大地田沢遺跡5号、6号竪穴住居および土坑より出土した種実

分類群	出土部位	Q4 石造部	剖面七 8世紀後~9世紀初 素	遺構		5号住 6号住		1号掘 2号掘		3号土坑 古代		6号土坑 古代		7号土坑 古代		発掘調 査			
				時期	地点等	6号住		1号掘		2号掘		3号土坑 古代		6号土坑 古代		7号土坑 古代		発掘調 査	
						8世紀後~9世紀初 素	古代	古代	古代	6号土坑 古代	7号土坑 古代	発掘調 査	古代	古代	古代	古代	古代		
木本																			
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) D. Don		未炭化葉花序	1		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オニグルミ	<i>Juglans sieboldiana</i> Maxim.		炭化内果皮半分	-		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
アサガ	<i>Ostrya japonica</i> Miq.		炭化内果皮破片	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.		炭化不熟果実	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズナラ	<i>Quercus crispula</i> Blume		炭化幼果	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
コナラ属	<i>Quercus</i>		幼果破片	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サクラ属	<i>Prunus</i>		炭化核	1		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
キイチゴ属	<i>Rubus</i>		炭化核	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンショウ属	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (L.) DC.		炭化内果皮	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	<i>Acer</i>		炭化果實	1		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズキ	<i>Swida controversa</i> (Houtt.) Soják		炭化内果皮	3		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマノミズキ	<i>Swida macrocephala</i> (Wall.) Soják		炭化内果皮	-		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ニワトリコ	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> (Miq.) Hara		炭化内果皮	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
広葉樹			炭化芽	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
丹木																			
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.		炭化胚乳	3	1	-	-	4	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L.		炭化種子	2120	-	1	-	313	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	
コムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.		炭化種子	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アワ	<i>Setaria italica</i> Beauvois		炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒツジエンドウ	<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Ohashi		炭化種子	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イヌヒエンドウ	<i>Echinochloa</i>		炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウキヤガラ	<i>Scirpus jauanalis</i> (Trev.) A. Gray		炭化葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明被植物			炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アサ	<i>Convolvulus sativa</i> L.		炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イシミカワ	<i>Paricaria perfoliata</i> (L.) H. Gross		炭化葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミゾリバ	<i>Pericaria thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) H. Gross		葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タデ属	<i>Paricaria</i>		炭化葉	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
マメ科	<i>Leguminosae</i>		炭化種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
豆子植物			子座	3	-	-	2	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	
不明			炭化葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	



図版1 松山大地田沢遺跡より出土した種実(1)

1. シギ、雄花序（5号住）
  2. オニグルミ、炭化内果皮半分（尾根部）
  3. アサダ、炭化果実（2号住加跡）
  4. クリ、炭化不熟果（2号住Q4）
  5. ミズナラ、幼果（1号住Q1）
  6. キイチゴ属、炭化核（2号住北ベルト）
  7. サンショウ、炭化内果皮（2号住Q2）
  8. サクラ属、炭化核（1号住床面）
  9. ミズキ、炭化内果皮（1号住床面）
  10. カエデ属、炭化果実（5号住）
  11. ニワトコ、炭化内果皮（1号住床面）
  12. イネ、炭化穎付着胚乳（1号住床面）
  13. オオムギ、炭化種子（1号住床面）
  14. コムギ、炭化種子（1号住床面）
- スケールは1mm



図版2 松山大地田沢遺跡より出土した種実(2)

15. アワ、炭化種子（1号住床面） 16. ヒエ、炭化種子（1号住Q 1） 17. ウキヤガラ、炭化果実（1号住塗理土） 18. アサ、炭化種子（1号住床面） 19. イシミカワ、炭化果実（1号住床面） 20. ミゾソバ、果実（1号住Q 2） 21. タデ属、炭化果実（1号住床面） 22. マメ科、炭化種子（1号住床面） 23. 担子菌、子座（1号住Q 2） 24. 不明（1号住Q 2） スケールは1mm

## VI 総 括

今回の発掘調査、および整理作業で明らかになった事項は下記のとおりである。

### 1 立 地

遺跡は、宮古湾から西へ約3.8kmの地点に位置する小起伏山地に立地する。調査区は北西向き尾根とその斜面、および谷部に位置する。この地は『松山館出土の藤手刀に関する調査報告書』(田村1979)<sup>注1</sup>に、「尾根先端部に土地の人にエゾケ窪と呼ばれている、明らかに堅穴住居址と思われる三個の窪地が残されており、足元の小さな沢に出来た平地には土器類の散布を見る」と記述された地点に該当する。今回の調査においても「エゾケ窪」の名の通り、調査着手以前から複数の堅穴住居が地表面の森みとして視認できる状況であった。調査の結果、奈良から平安時代の遺構や遺物が多数確認され、遺構は東尾根頂部～西向きの緩斜面に集中する傾向が見られた。

### 2 遺 構

検出した遺構は、奈良から平安時代の堅穴住居7棟、土坑10基、炉跡3基、焼土遺構1基、遺物集中区2箇所、時期不明の掘立柱建物1棟、門跡1箇所、炭窯2基である。

#### (1) 堅 穴 住 居

**立地・規模：**検出された7棟のうち、6棟は北西向きの尾根頂部に、1棟は谷部に位置する。堅穴住居の規模は7.23～3.72mの幅に収まる。

**カマド：**構築方位は北西向き5棟、北東向き1棟で、北西に延びる尾根の形状に沿うように、斜面下位に向かって構築されるものが殆どである。カマド本体は流紋岩製の礫を芯材として黄褐色粘土で構築されるものが多く、このほか石組みのみのものも存在する。支脚には小形壺を2つ伏せて転用したもの（4号堅穴住居）や、流紋岩製の角礫を立てて用いたもの（7号堅穴住居）などが見られる。1号堅穴住居のカマドははじめ北西壁の中央西寄りに構築されるが、後に埋め戻され、北西壁中央に作りかえられている。この際、煙道の構造は変化せず、割り抜き式で構築される。

**柱穴と住居構造：**主柱穴を持つもの（1～5号堅穴住居）と持たないもの（6・7号堅穴住居）があり、本遺跡においては床面積18m<sup>2</sup>前後を境にして主柱穴の有無がわかる傾向が認められる。東尾根先端部に位置する5号堅穴住居は床面積50.39m<sup>2</sup>を測る大形の住居で、主柱穴のほか、壁際を巡るような準柱穴を持つ。本住居のN-W～S-E方向の土層ベルト観察によると、5号堅穴住居の廃絶後に人為的な埋め戻しがなされた後、北側に少し位置をずらして6号堅穴住居が新たに構築されていることが判明した。その際、住居規模は18.15m<sup>2</sup>に縮小し、主柱穴を持たない構造へと変化している。また、1棟のみ谷部に位置し、須恵器を伴う平安時代の7号堅穴住居は、床面積14m<sup>2</sup>と小形で、主柱穴を持たない。この現象は時代・時期による住居の選地・規模が、柱穴の有無という構造の違いに反映されたためと考えられる。

**土壤の水洗選別：**7棟の堅穴住居の床面およびカマド、煙道堆積土を対象に土壤の水洗選別を実施している（実施量の詳細は第III章（4）2参照）。その結果、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなど多種の炭化種子が検出されている。内訳は、1号堅穴住居においてはイネの出土量が多く、5号堅穴住居においてはオオムギが卓越する傾向が看取された。

**鉄製生産具：**奈良～平安時代前期の堅穴住居2棟から、農耕に関わる遺物が得られた。すなわち、1号堅穴住居床面から出土した鉄製鋤先と、3号堅穴住居床面から出土した鉄製鎌である。前述のよう

に、両堅穴住居からはイネ・オオムギはじめ多種の炭化種子が出土しており、該期の畠作に関する生産具と生産作物の関係を考える上で良好な資料といえる。

**足金具：**4号堅穴住居の埋土中からは、鉄製の台状双脚足金具が1対分出土している。本住居の居住者が所有していたものか、製作し一次的に保管していたものかは不明であるが、足金具を所有できるような人物がこの地に存在したことを示している。また、從来古墳から出土することの多い足金具が、堅穴住居内から出土したことも注目に値する。台状双脚足金具の時期は、形状の特徴から8世紀中～後葉頃に該当するものである（八木氏分類二期：柄頭2・3：八木1996）。

**放射性炭素年代測定：**今回の調査では、堅穴住居の所属時期を明らかにするため床面出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS測定）を実施している。その結果、1号堅穴住居床面出土の炭化材（ケヤキ）から曆年較正年代で689～772ADの値が得られた。7号堅穴住居およびその周辺から出土した須恵器坏・大甕の年代観は9世紀代と捉えられることから、これらを併考すれば集落の時期はおおむね8世紀代から9世紀代の奈良から平安時代であると考えられる。

## （2）土 坑

調査区全域から10基を検出した。平面形は、円形もしくは梢円形基剣で断面皿状を呈し、規模は4.39～0.97mの範囲に収まる。本遺跡で検出された土坑には、埋土が黒色～黒褐色シルト主体で構成されるものの7基（1・2・4・6～10号土坑）と、埋土がにぶい黄褐色～灰黃褐色シルト主体で構成され、底面に炭化材片が散在し壁面が弱く被熱しているもの2基（3・5号土坑）が含まれる。後者については鍛冶炉の可能性を想定し、鍛造剥片抽出を目的として土壤水洗選別を行っている。その結果、いずれの土坑からも鍛造剥片は発見されず、小規模な炭窯であった可能性も想定される。

いっぽう、3号土坑の埋土上を対象に土壤水洗選別を実施した結果、イネ・オオムギなどの炭化種子が得られている。のことから、遺構内で加熱調理などが行われた可能性も想定される。これらの詳細な時期は不明であるが、重複関係から堅穴住居よりはやや新しいものと考えられる。

## （3）炭 窯

西向き斜面から2基を検出した。残存する底面プランは長方形を呈する。これらの底面からは炭化材小ブロックが少量検出されており、樹種同定の結果、1号炭窯の炭化材がセンノキ、2号炭窯の炭化材がイタヤカエデであることが判明した。同形態の炭窯については沿岸部での調査例が複数あり、その多くが鉄生産に関わる遺構との関連性が指摘されている。近接する木戸井内II・III遺跡で2基、隠里III遺跡でも2基が確認されており、周辺の遺跡分布などから、鉄生産に関連する施設に木炭を供給する目的で運営された古代の炭窯と推定されるものである。なお、遺構の所属時期を明らかにするために底面炭化材に対し放射性炭素年代測定を実施しており、その結果は曆年較正年代で1225～1263ADである。これにより、本形体の炭窯の年代が13世紀代まで下る可能性があることが判明した。

## （4）掘立柱建物と門跡？

掘立柱建物は谷部で1棟検出した。規模は梁間3.03m・桁行5.45m、2間×2間である。柱間寸法は梁方向で1.51m・桁方向で2.73mで、5尺・9尺を基本としている。桁行の方向はN-29°-Eを測る。埋土からは土師器片が1片出土しているが、重複する遺物集中X1からの混入の可能性が高く、正確な所属時期は不明である。いっぽう、掘立柱建物の北西8.5mにはpit13・14が位置している。柱穴規模は径44～53cm・深さ80～82cmに収まり、柱穴間の距離は2.3m（7.6尺）を測る。これも共伴遺物がないため時期は不明である。輪方位はN-22°-Eで、1号掘立柱建物とはほぼ同じ角度を持って正対する。位置関係から、1号掘立柱建物に付随する門跡であった可能性が想定される。

### (5) 廃土・整地層（遺物集中区）

東尾根構の斜面から2箇所確認した。遺物集中区1は西向き斜面に立地し、1号竪穴住居下位にある西方4.4mに位置する。平面規模は3.58×2.7m、層厚は最大で41.3cmを測る。遺物集中区2は南西向き斜面に立地し、4号竪穴住居下位にあたる南西1.2mに位置する。平面規模は6.79×3.24m、層厚は34cmを測る。遺物集中区1からは土師器15点、須恵器1点、石器1点、土製品1点が、遺物集中区2からは土師器29点、須恵器2点、土製品1点がそれぞれ出土しているが、これらの製作年代は8世紀から9世紀代に比定される。この年代は斜面上位にある竪穴住居群と一致することから、本遺構は竪穴住居構築時および使用時の廃土層と推定される。本遺構の成因は、居住域に適する場所を狭い尾根頂部にしか求められないという立地環境下で、1世紀以上にわたり活動が続いた結果、重複構築による旧遺構掘削や、埋め戻しによる整地行為が繰り返されたためと考えられる。

### 3 まとめ

松山大寺田沢遺跡は、1979年の田村忠博氏著『松山館出土の藤手刀に関する調査報告書』によると地元住民から「エゾケ窓」と呼び慣わされており、その当時すでに複数の竪穴住居の窓みの存在も認識されていたようである。「エゾケ窓」の名の通り、調査区は表土除去以前から竪穴住居の窓みが視認できた。発掘調査の結果、竪穴住居を主体とする8世紀から9世紀代にかけての遺構・遺物が確認され、本遺跡が古代の集落跡であったことが判明した。遺構は殆どが東側尾根筋に沿って作られるが、平面形が長方形を呈する炭窯と平安時代の竪穴住居は西向きの谷斜面に作られており、時代による遺構の種別と占地に異なる傾向が看取された。また、尾根部竪穴住居の下方にあたる斜面では、1層直下の黄褐色土中から奈良時代～平安時代を主体とする土師器・須恵器がまとまって出土しており、周囲の竪穴住居構築時および使用時に尾根上位から斜面下位に廻棄されたものが堆積したものと考えられる。このほかにも、竪穴住居を人為的に埋め戻して新たに住居を構築したものなど、廃土・整地の痕跡が確認された。これは、狭い尾根上に継続して居住するために古代の人々が行った工夫と考えられる。いっぽう、西尾根においては炉跡と土坑が検出されたのみで、居住にかかわる遺構は未検出であった。これは、西尾根斜面が急峻で狭く、居住域としては不向きな立地であった為と考えられる。谷部沢筋は、上師器・須恵器片のほか鉄滓などの遺物が少量出土しており、斜面上位の遺構から流れ込んだ様相を示す。検出された竪穴住居の出土遺物による時期検討は、資料数が僅少であるため大別程度に止めたが、床面遺物の放射線炭素年代測定（AMS測定）の結果からは、曆年較正年代で689～772ADの値が得られている。両者を考慮すると、奈良時代から平安時代前期にかけて営まれた集落と推定される。なお、竪穴住居埋土からは鉄製の足金具が1対分出土している。県内においては古墳以外から足金具が出土した例は稀であり、貴重な出土例として注目される。

(丸山)

### 註および参考文献

- (註1) 田村忠博 1979 「松山館出土の藤手刀に関する調査報告書」私刊
- 岩手県宮古市教育委員会 1986 「宮古市遺跡分布調査報告書4」宮古市埋蔵文化財調査報告書8
- 岩手県宮古市教育委員会 1990 「孤崎遺跡 平成元年度発掘調査報告書」宮古市埋蔵文化財調査報告書22
- 岩手県宮古市教育委員会 1991 「払川I遺跡 平成2年度発掘調査報告書」宮古市埋蔵文化財調査報告書29
- 岩手県宮古市教育委員会 1992 「鶴沢遺跡 平成2年度発掘調査報告書」宮古市埋蔵文化財調査報告書34
- 岩手県宮古市教育委員会 1995 「硫鷦鷯山遺跡 発掘調査報告書」宮古市埋蔵文化財調査報告書43
- 岩手県宮古市教育委員会 1999 「赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚山遺跡 赤前V鷹沢遺跡 赤前VI若原ヶ沢遺跡 小屋内Ⅱ遺跡 宮古市水産課津軽石槽境整備事業関係」宮古市埋蔵文化財調査報告書53
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009 「木戸井内IV遺跡・鶴里Ⅲ遺跡発掘調査報告書」岩文埋調報第529集

# 写 真 図 版





遺跡遠景（西から）



調査区全景（西から）

写真図版1 遺跡遠景、調査区全景（航空写真）



西尾根から沖積地を望む



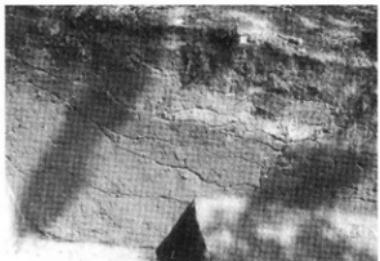
調査前現況（北西から）



試掘作業（南東から）



表土除去作業（南から）



基本層序①断面（北から）



基本層序②断面（北東から）



現地説明会風景①



現地説明会風景②

#### 写真図版2 調査前現況、試掘、表土除去、基本層序



平面（南から）



断面（東から）



古期カマド断面（南西から）



新期カマド平面（南から）

写真図版3 1号竪穴住居 (1)



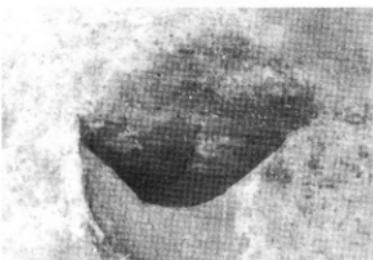
新開カマド断面（南東から）



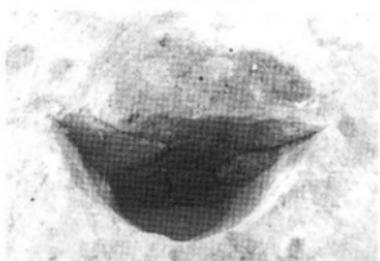
鉢先出土状況（南西から）



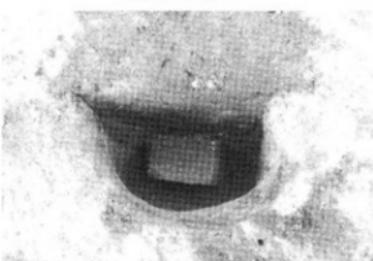
PP1 断面（南から）



PP2 断面（南から）



PP3 断面（西から）



PP4 断面（西から）



プラン検出状況（南東から）

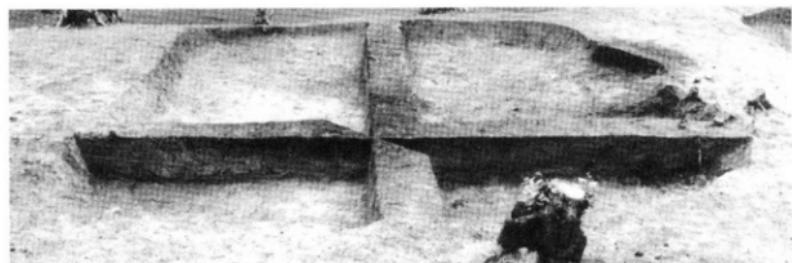


埋土掘削作業（南から）

写真図版4 1号竪穴住居（2）



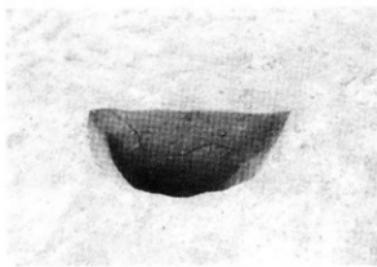
平面（南から）



断面（東から）



カマド平面（南から）

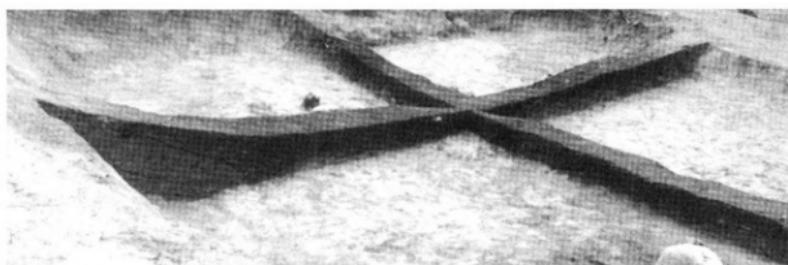


PP4 断面（南から）

写真図版5 2号竪穴住居



平面（北西から）



断面（東から）



カマト断面（南西から）

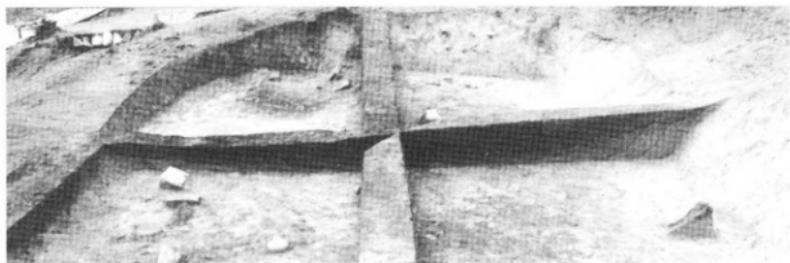


床面跡出土状況（西から）

写真図版 6 3号竪穴住居



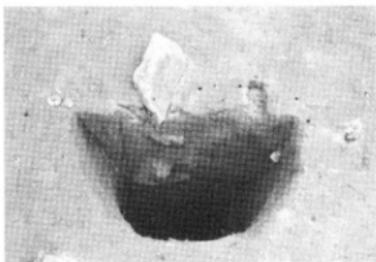
平面（南東から）



断面（南東から）



カマド断面（南東から）



カマド煙道（西から）



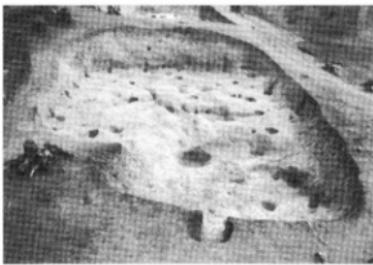
平面（北西から）



断面（北西から）



断面（南西から）

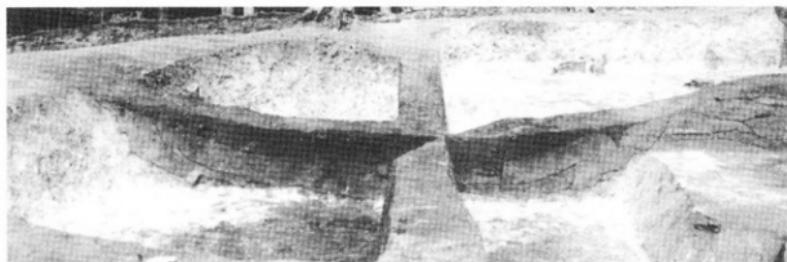


貼り床完掘状況（北西から）

写真図版 8 5号竪穴住居



平面（南から）



断面（西から）



カマド断面（南西から）

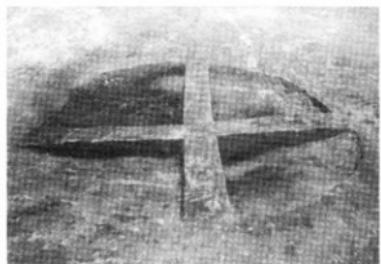


作業風景

写真図版9 6号竪穴住居



平面（南から）



断面（西から）



カマド平面（南から）



カマド断面（南から）



現地説明会風景

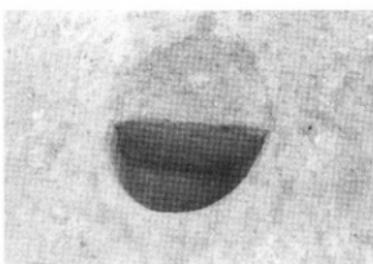
写真図版 10 7号竪穴住居



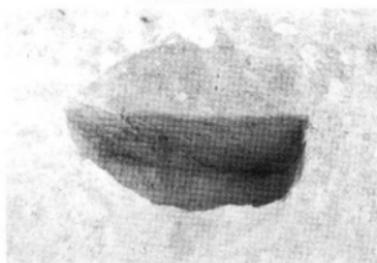
完掘（北西から）



PP5断面（西から）



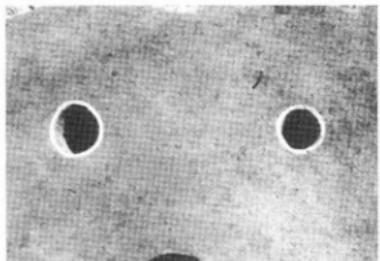
PP6断面（西から）



PP7断面（西から）



PP10断面（西から）



1号門跡平面（北から）



1号炭窯平面（南から）



1号炭窯断面（北西から）



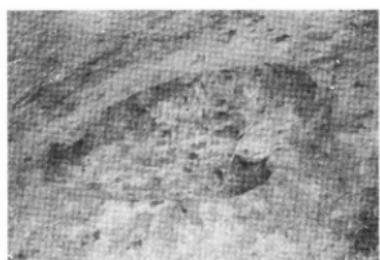
1号炭窯底面焼土（南西から）



2号炭窯平面（南から）



2号炭窯断面（南東から）

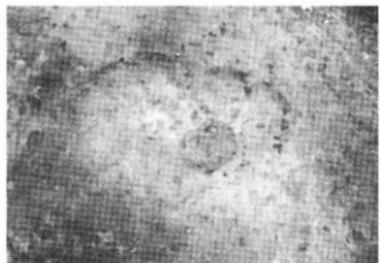


1号土坑完掘（北西から）

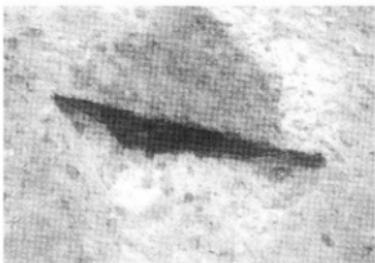


1号土坑断面（北西から）

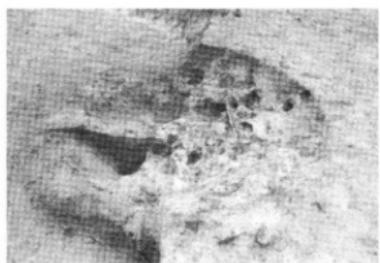
写真図版12 1号門跡、1・2号炭窯、1号土坑



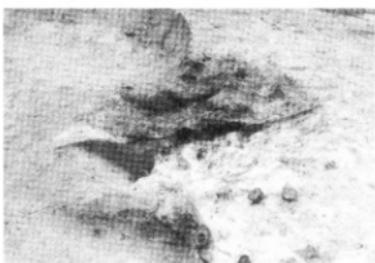
2号土坑平面（北から）



2号土坑断面（東から）



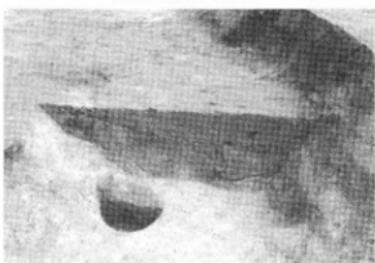
3号土坑平面（東から）



3号土坑断面（東から）



4号土坑平面（北から）



4号土坑断面（北から）

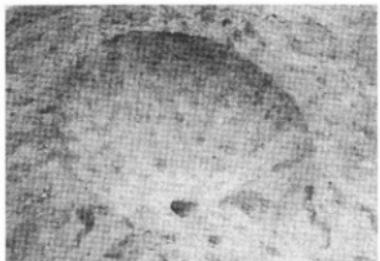


5号土坑平面（東から）

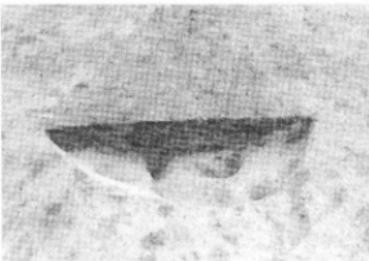


5号土坑断面（東から）

写真図版 13 2～5号土坑



6号土坑平面（北から）



6号土坑断面（北から）



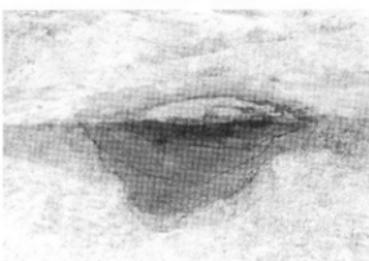
7号土坑平面（東から）



7号土坑断面（西から）



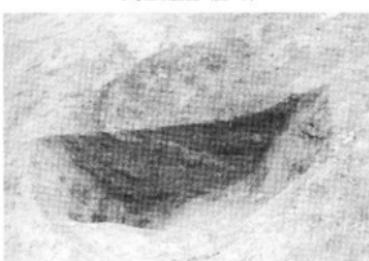
8号土坑平面（西から）



8号土坑断面（西から）



9号土坑平面（北から）

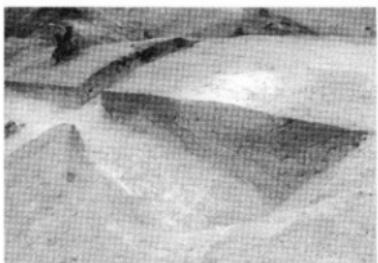


9号土坑断面（北から）

写真図版 14 6～9号土坑



10号土坑完掘（南西から）



10号土坑断面（西から）



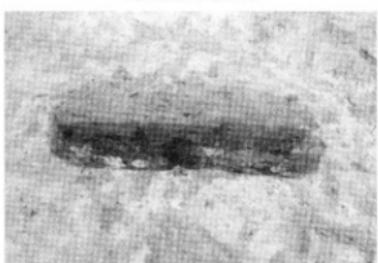
1号炉跡平面（西から）



1号炉跡断面（西から）



2号炉跡平面（北から）



2号炉跡断面（北から）



3号炉跡平面（南から）



3号炉跡断面（南から）

写真図版 15 10号土坑、1～3号炉跡



1号焼土造構平面（東から）



1号焼土造構断面（南から）



遺物集中区1断面（南から）

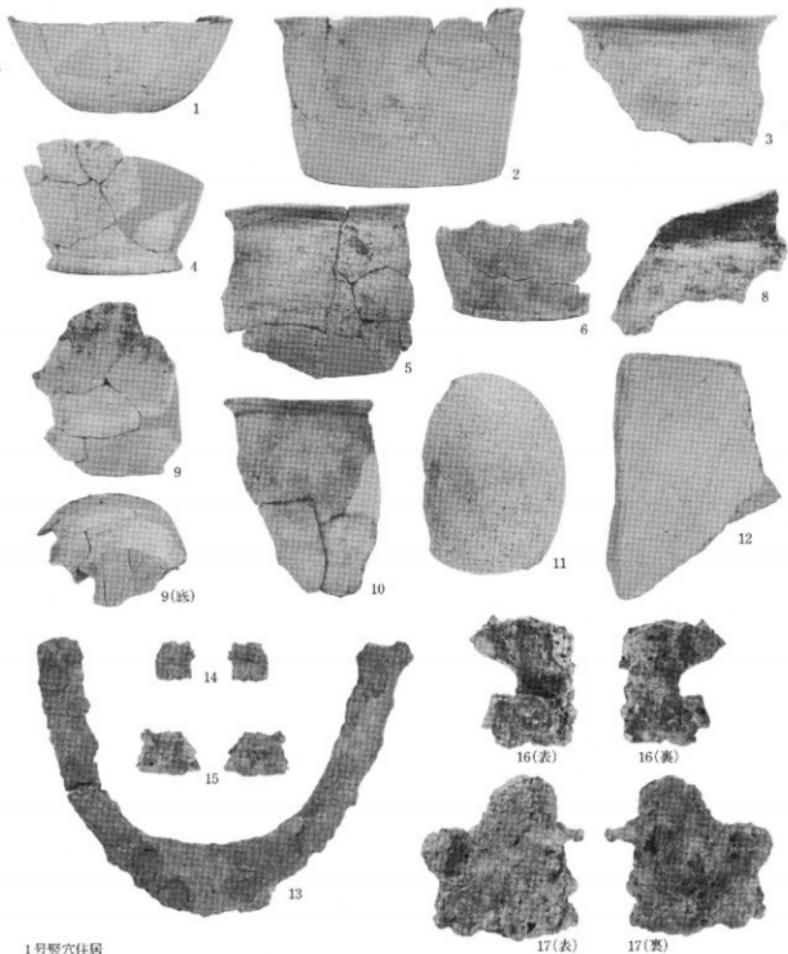


遺物集中区2断面（南から）

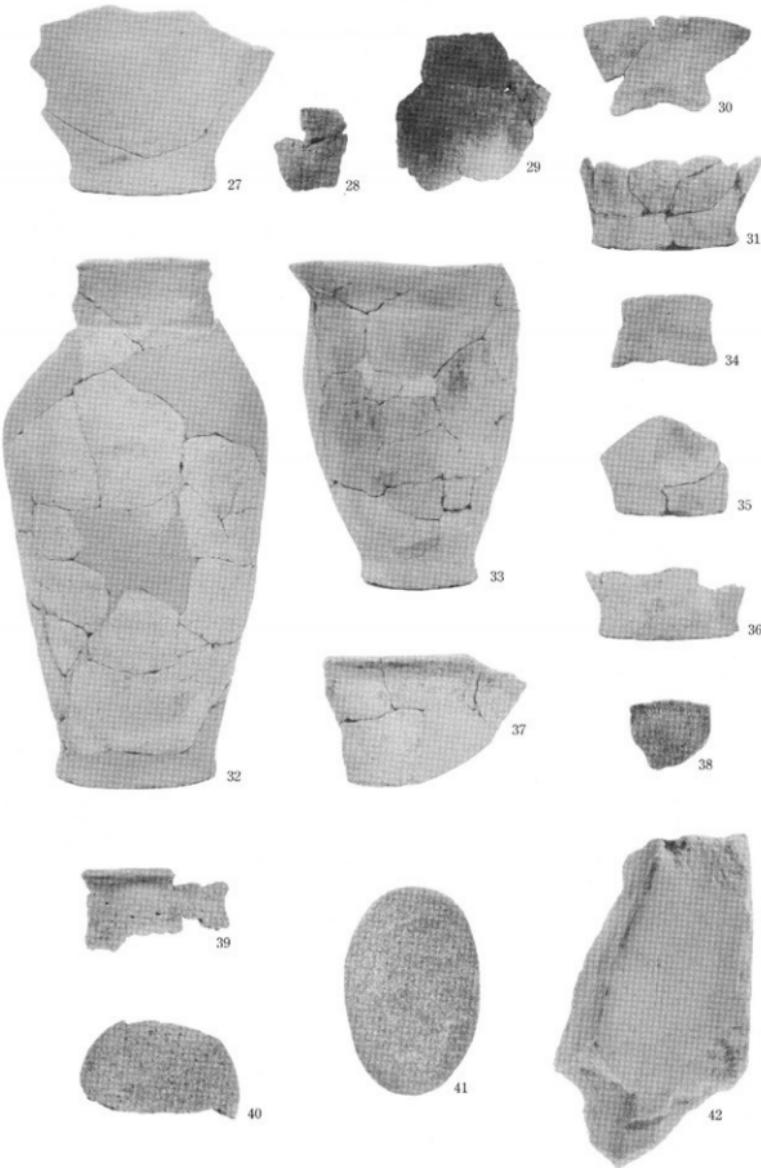


東尾根造構掘削状況（南から）

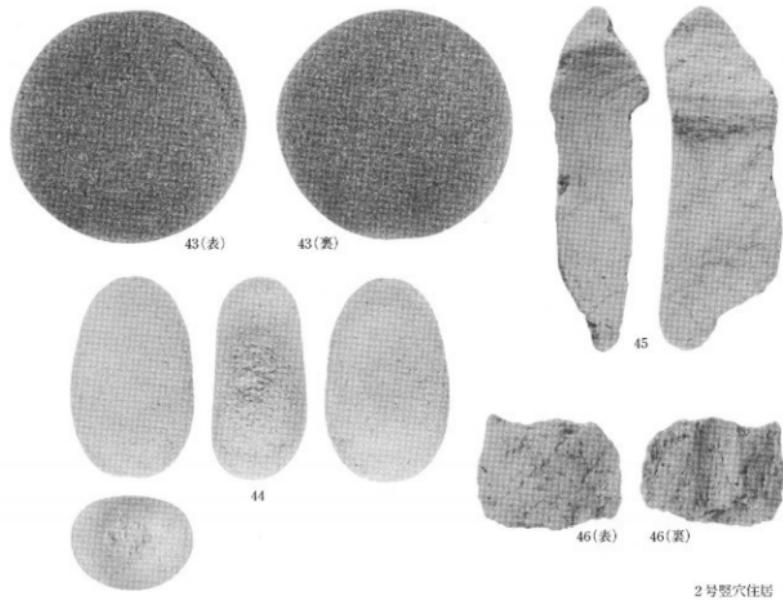
写真図版 16 1号焼土造構、遺物集中区1・2



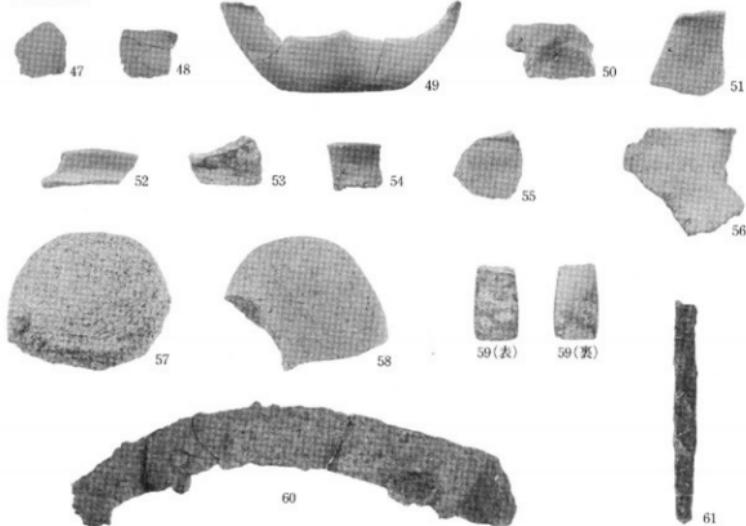
写真図版 17 1・2号竪穴住居出土遺物 (1)



写真図版 18 2号竪穴住居出土遺物 (2)



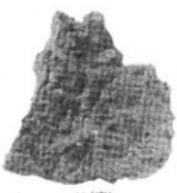
3号竖穴住居



写真図版 19 2号竖穴住居出土遺物 (3)、3号竖穴住居出土遺物 (1)



62(表)



62(裏)



62(側面)



63(表)



63(裏)



63(側面)

## 3号竪穴住居

## 4号竪穴住居



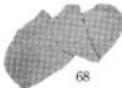
64



65



67



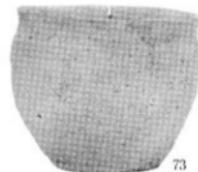
68



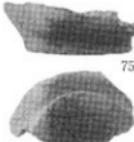
69



72



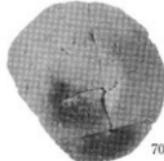
73



75



70



70(底)



74



76



77



78

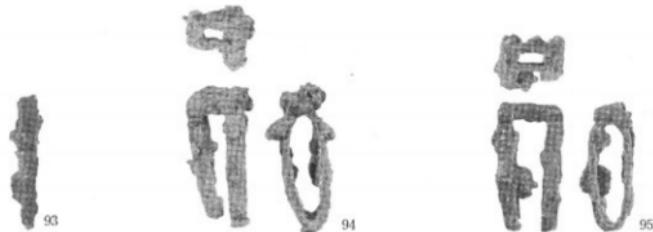


79

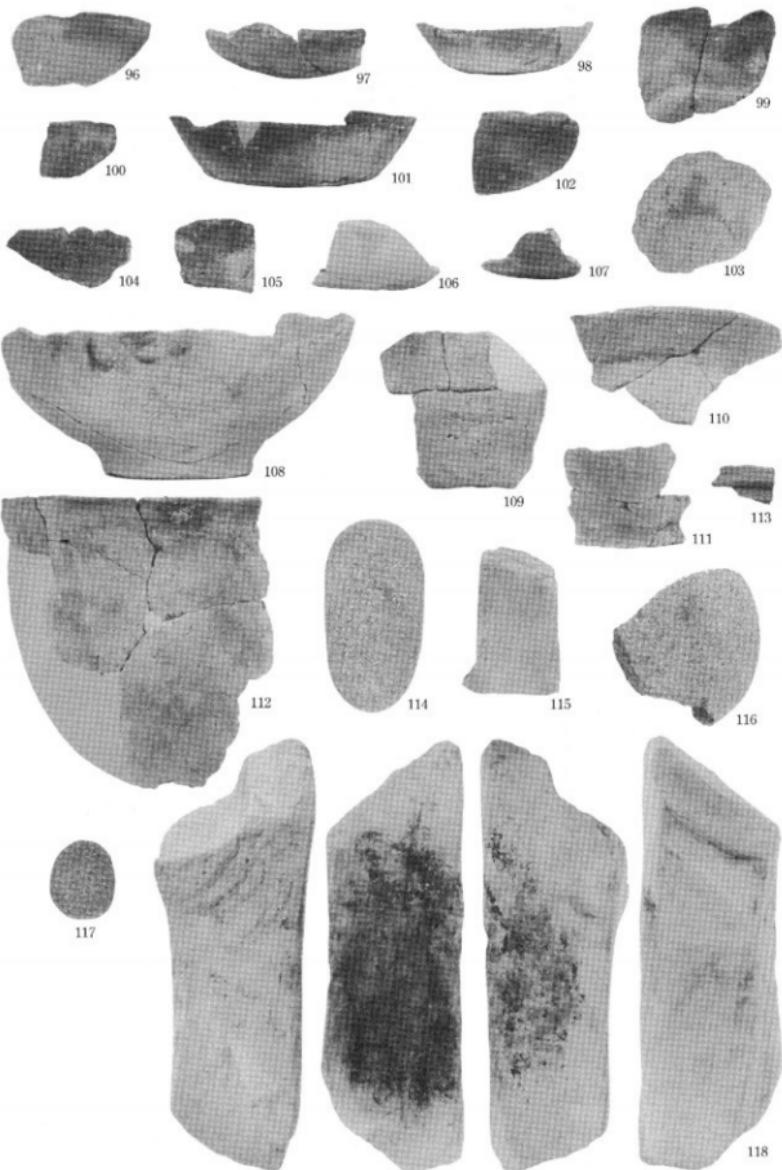


80

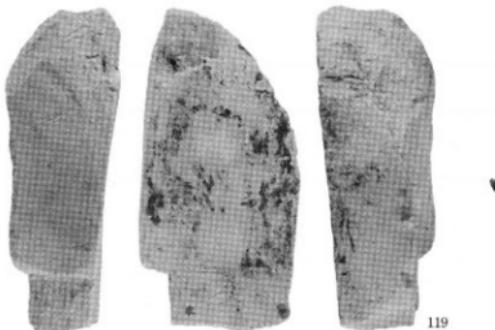
写真図版 20 3号竪穴住居出土遺物 (2)、4号竪穴住居出土遺物 (1)



写真図版 21 4号竪穴住居出土遺物（2）

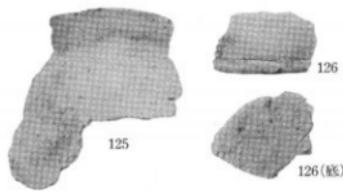
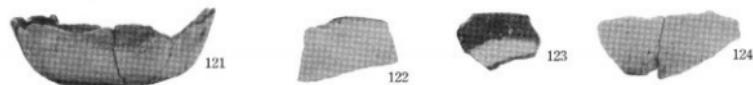


写真図版 22 5号竪穴住居出土遺物 (1)

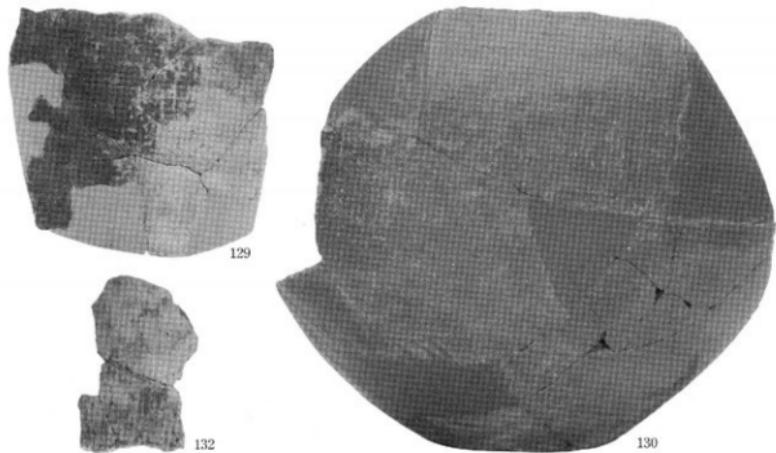
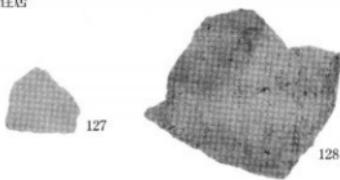


5号竖穴住居

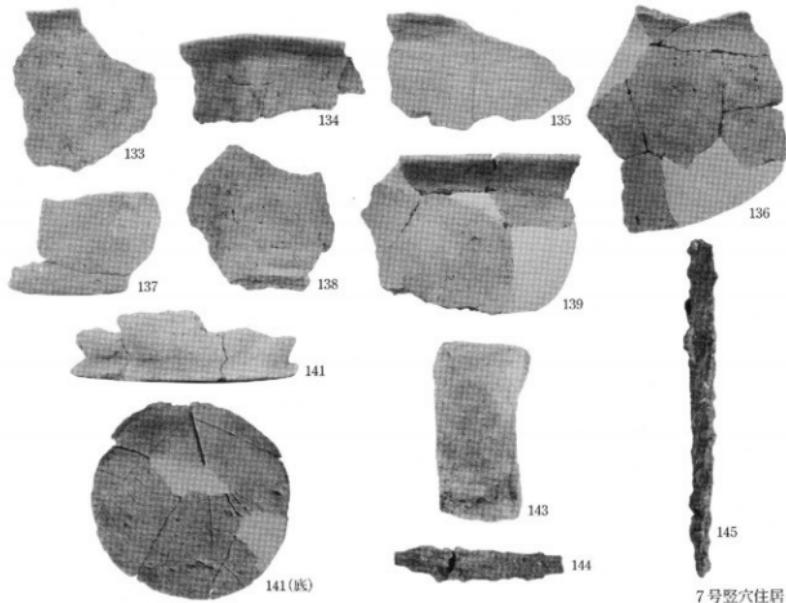
6号竖穴住居



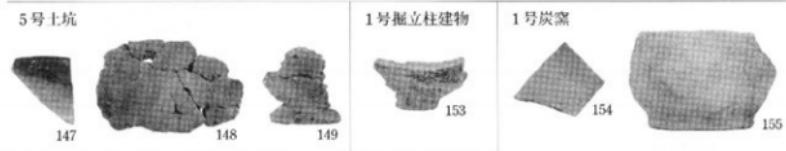
7号竖穴住居



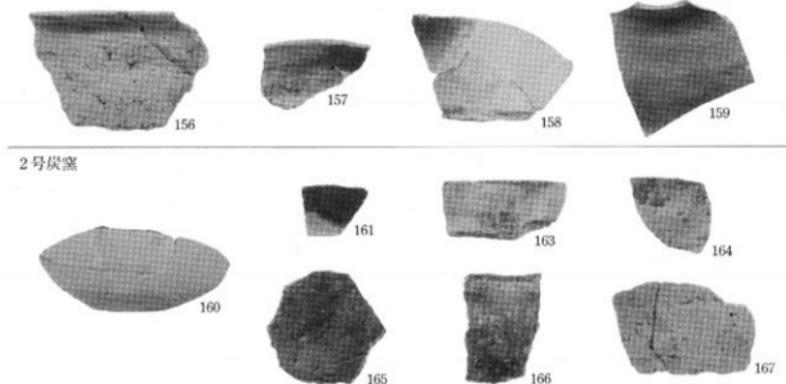
写真図版 23 5号竖穴住居出土遺物(2)、6号竖穴住居出土遺物、7号竖穴住居出土遺物(1)



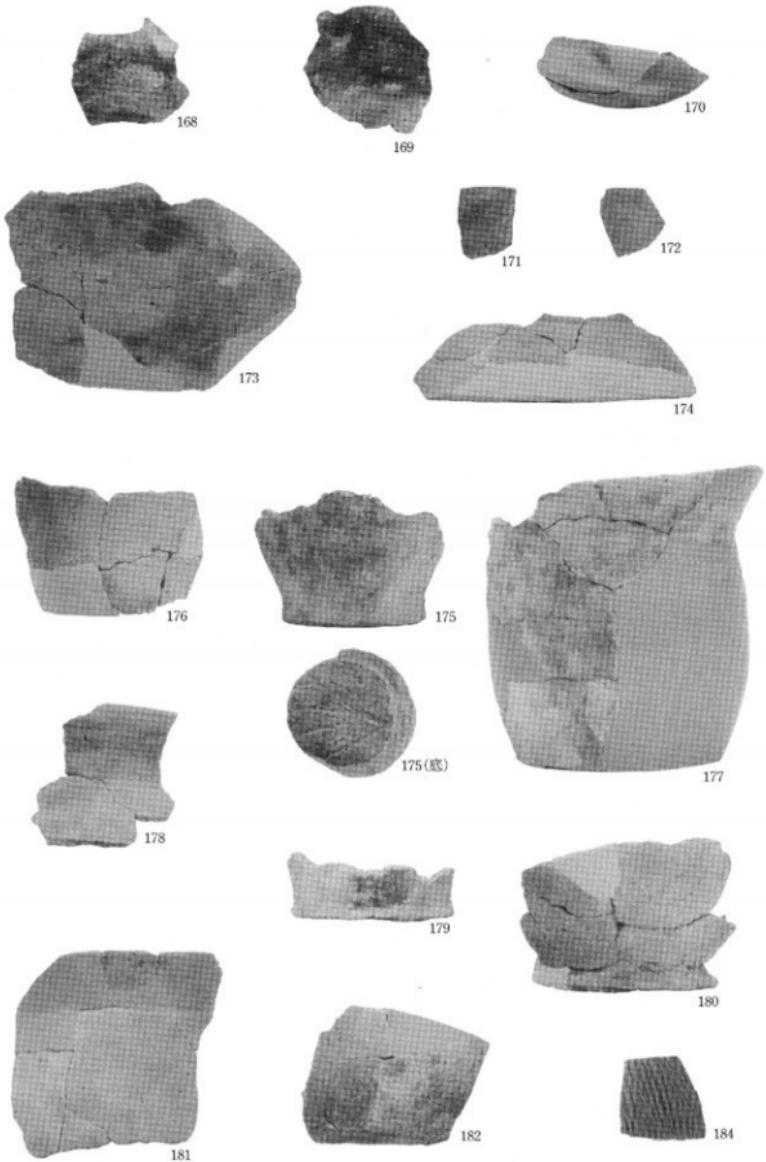
7号竖穴住居



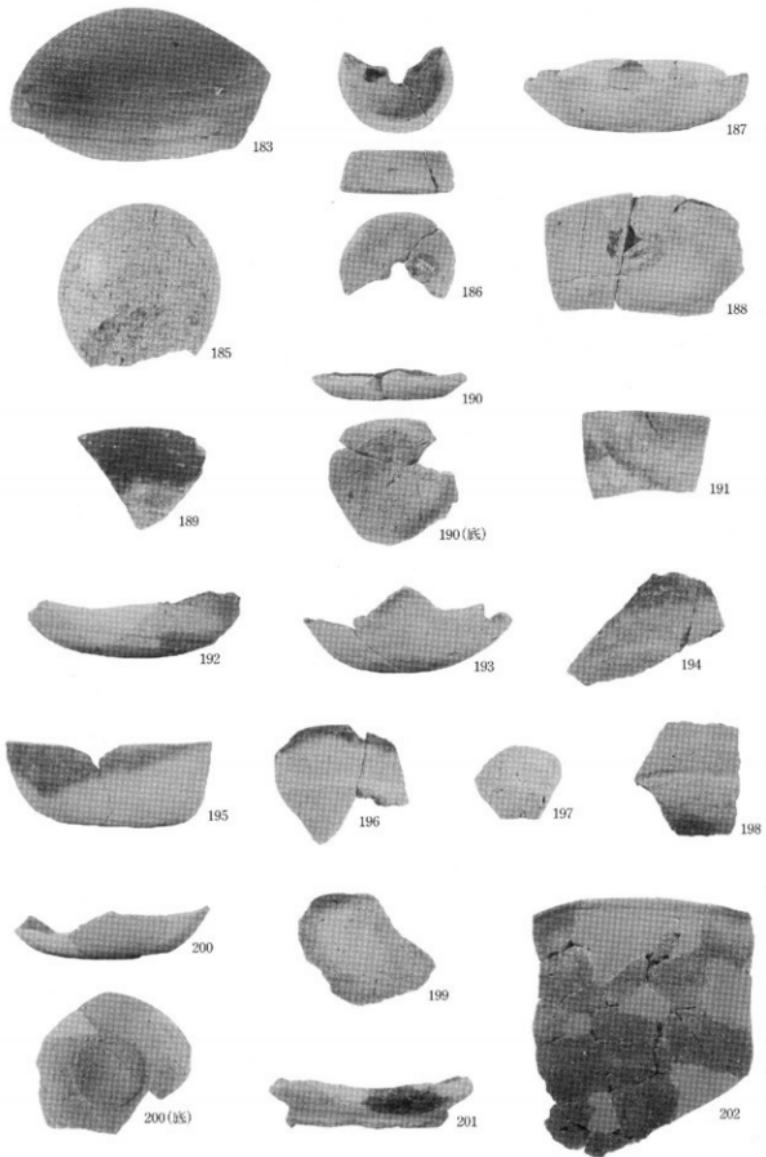
2号炭窑



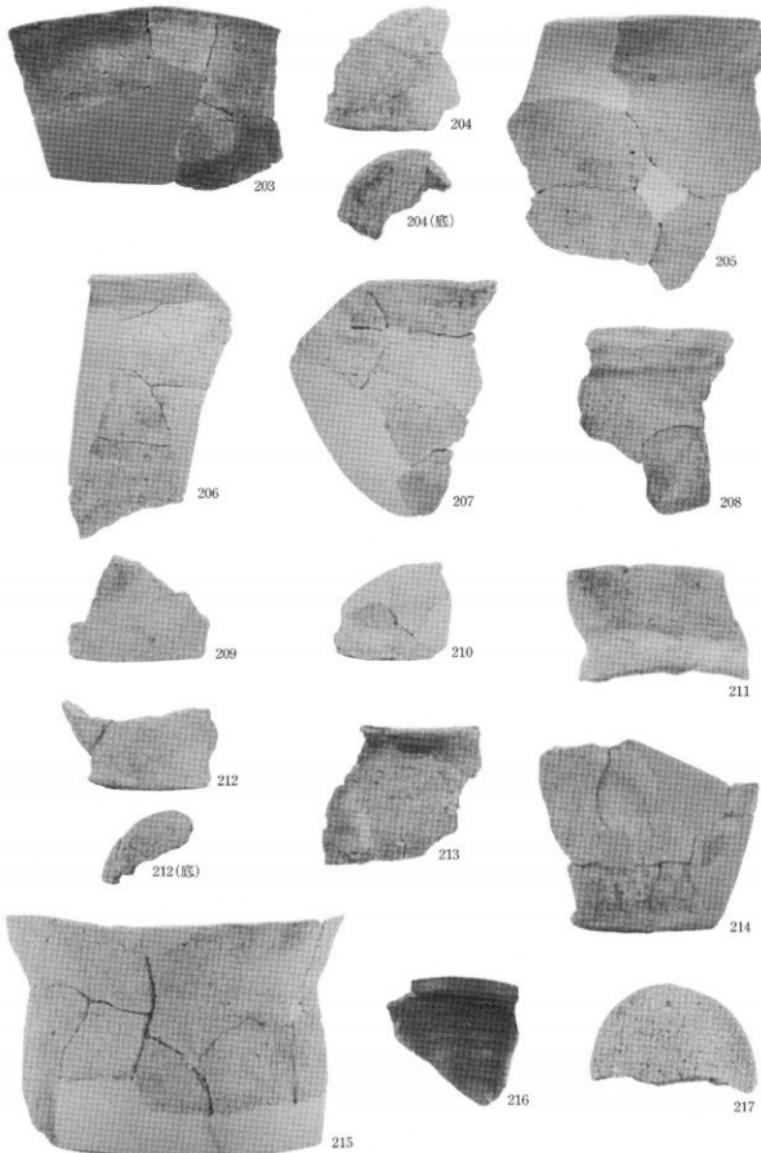
写真図版 24 7号竖穴住居出土遺物 (2)、5号土坑・1号掘立柱建物出土遺物、1・2号炭窑出土遺物  
- 112 -



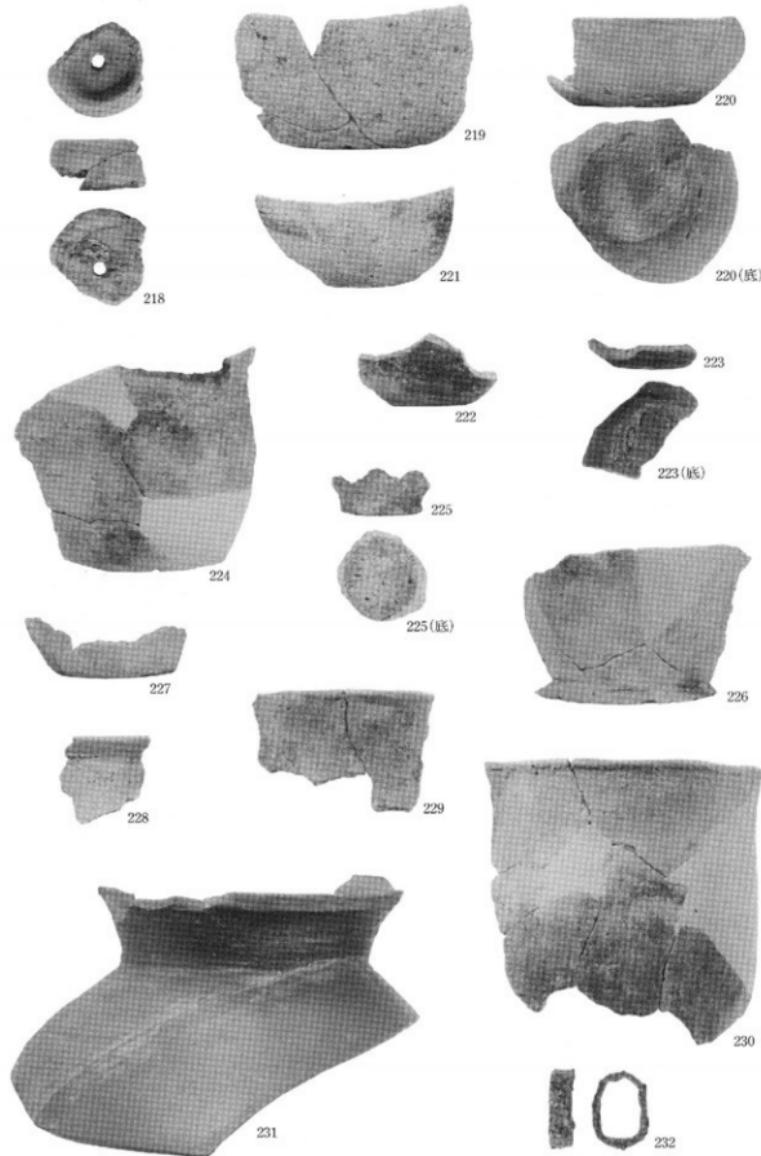
写真図版 25 遺物集中区 1 出土遺物



写真図版 26 遺物集中区 2 出土遺物 (1)



写真図版 27 遺物集中区 2 出土遺物 (2)



写真図版 28 遺物集中区 2 出土遺物 (3)

## 報告書抄録

ふりがな	まつやまおおちたさわいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	松山大地田沢遺跡発掘調査報告書							
副書名	道路改良事業一般国道106号宮古西道路松山地区関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第558集							
編著者名	丸山直美・鈴木博之							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2010年2月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積	調査原因	
松山大地田 沢遺跡	岩手県宮古 市松山第7 地割字大地 田沢112- 64他	03202	LG33-2166	39度 37分 21秒	141度 55分 17秒	2008.07.01 ~ 2008.09.12	1,790m <sup>2</sup>	道路改良事業 宮古西道路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松山大地田 沢遺跡	集落跡	古代 (8世紀後半 ~9世紀代)	竪穴住居7棟 土坑10基 炉跡3基 焼上造構1基 遺物集中区2箇所	土師器 須恵器 鉄製品 炭化種子	丘陵尾根部から斜面部に當まれた奈良から平安時代にかけての集落。	丘陵尾根部から斜面部に當まれた奈良から平安時代にかけての集落。		
	時期不明		掘立柱建物1棟 門跡?1箇所 炭窯2基		竪穴住居床面検出炭化材・炭窯底面検出炭化材の放射性炭素年代測定を実施。	竪穴住居床面検出炭化材・炭窯底面検出炭化材の放射性炭素年代測定を実施。		
要約	松山大地田沢遺跡は、奈良から平安時代にかけての集落跡であることが明らかとなった。遺構は調査区のほぼ全城に分布しており、東尾根頂部に竪穴住居、西向き斜面裾部に炭窯が集中する傾向を示す。東尾根から続く西向き斜面上位においては竪穴住居掘削時の廃土・整地層が2箇所で確認され、土器片が比較的まとまって出土している。西尾根においては炉跡と土坑が検出されたのみで居住にかかる遺構は未検出である。これは西尾根斜面が急峻で狭く、居住域としては不向きな立地であった為と考えられる。谷部沢筋は土師器・須恵器片のほか鐵滓などの遺物が少量出土しており、斜面上位の遺構から流れ込んだ様相を示す。竪穴住居埋土からは、鉄製の足金具が1対分出土している。県内においては古墳以外から足金具が出土した例は稀であり、貴重な出土例として注目される。							

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第558集  
松山大地田沢遺跡発掘調査報告書

道路改良事業一般国道106号宮古西道路松山地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年2月1日

発 行 平成22年2月5日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電 話 (019)638-9001

発 行 岩手県宮古地方振興局土木部  
〒027-0072 岩手県宮古市五月町1-20  
電 話 (0193)64-2221

(財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電 話 (019)654-2235

印 刷 株式会社 阿部印刷  
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2-2  
電 話 (019)624-2242

